ループ

目次

プロローグ 1
一、駄目人間の棲む場所 4
二、小心者の戦い 33
三、意気地なしのサービス 62
四、図々しい神頼み 91
五、見栄っ張りの地団駄 119
エピローグ 163

プロローグ

プロローグ

壁に描かれた少年に見つめられている気がした。

そう思ったのは私だけではなかったようで、その絵の横を通り過ぎていく人の目はちらりと壁へ向かっている。

この絵に何かを感じるのかと訊かれれば、そうではないと答えるだろう。生きているように描かれているその絵は素晴らしい。しかし、その絵に惹かれる理由が技術面での何かでないことは確かだった。

絵を描いた人間とはかけ離れてしまった何か。

言葉には表せないその何かが、立ち止まることさえしないが人々の目を引く理由なのだ。

この少年は本当に生きている。そう誰もが信じてしまう存在感がそこにはあった。

どう説明すればいいのか分からない。それを敢えて説明するとしたら、その表情は人に考え出せるものではないと思えるからだと思う。作り物ではなく、必ず存在するもの。しかし、それは誰にでも生み出せるものではないもの。

伸ばした手が届きそうで、思わず私は触ってしまったことがある。

しかしもちろんそこはコンクリートの壁で、その感触にはっとした私はその時その場所を駆け出して逃げた。恥ずかしいことでもなかったのだろうけれど、その瞬間の自分の心内を考えれば逃げ出さざるを得なかったのだ。

その後、沢山の人が壁に触れる姿を目撃した。その度に自分も微笑まずにはいられなかった。多分、その人たちも同じなのだと知っていたから。

どうしてだろうか。彼は何もせず、それでも救ってくれる気がする。

その時に合った言葉を、その目に見るのだ。

落ち込んでいれば、大丈夫だよ。背中を押してもらいたい時は、がんばれ。悪いことをしたと思えば、謝っておいで。

彼自身が何を思っているのか、それは分からない。そもそも壁に描かれた絵なのだから、思考を追おうとすることすらおかしいのかも知れない。しかし確かに感じるのは、その描かれた彼自身がとても優しい人なのだろうということだった。絵に込められた思いが、そう感じさせるのだ。

人に優しいことは悲しい。人に好かれることは難しい。

ただ優しい瞳で笑っているだけの絵から、そんな少年の思いが伝わってくるような気がした。逃げ出したいのか、突き進みたいのか。彼の手の側に書かれた「ＮＥＸＴ」という文字が、曖昧な意味を中学生だった私に投げかけていた。

それから、九年。

毎日のように見に行ったその壁を――私はいつの間にか忘れていた。

忙しくて必死で、救われたいという願いすら入る隙間がなかった。

楽しかった。辛かった。一生懸命だった。それだけで生きていられた。

しかし今、気づいてしまった。ただ夢中に走っていればいい時間は終わってしまったのだと。救いすら見つからない世界へ、迷い込んでしまっていたのだと。

そう気づかせてくれた人がいた。

懐かしささえ感じるその人は、もう少年ではなかった。私が大人になったように、彼も

大人になっていた。

ずっとずっと入ってみたいと思っていたレンガ造りの小さな喫茶店に、彼はいた。生身の人として。

彼は私に笑いかけた。それだけで胸が温かくなった。

大好きだった町の、大事な思い出の壁の少年。

その存在を思い出した時、私は今の自分が少し参っていることに気がついたのだった。

一、駄目人間の棲む場所

一、駄目人間の棲む場所

今日は大安だったはずだ。

太陽が顔を出しているというのに、何故か思い切りよく降り出した雨――キツネの嫁入りだったか、ネズミの嫁入りだったか、どちらかは忘れたけれど今はどうでもいい――から逃げるように駆け出し、私はそんなことを思っていた。

最近、私は短い日記を付け始めた。システム手帳のちょっとしたメモ欄に書くだけの、本当に簡素な日記なのだけれど、その適当さが自分に合っていて珍しく続いている。

女性の日記は感情的過ぎるとよく言われるけれど、私の場合まったくその通りで、後で読んでもその日に何があったのかさっぱり分からない内容になっている上、読み返すに当たって苦痛を伴うとんでもない代物に熟成してしまっていることが多い。

こんなもの、付ける価値があるのか？ 正直、自分でそう思った。

そんな時に、船乗りの人の話を聞いたのだ。短くていいから、その日のことを書き残す。その日記は将来、宝になる。そんなことを言っていたのだと思う。

私はその言葉に大変感銘を受けた。なるほど、その方がきっと将来読む分にも楽しく読めるだろう。それでこそ、日記を付けることに意味を持たせることができるというものだ。

そう考えてから何年か経った。そして今年ようやく、私は日記を付け始めた。

だけど何故、今年になって日記を付けようと思い直したのかというと、少し自分の記憶力に不安を感じ始めたからだったりする。あまりいいきっかけとは言えない。だけど、とりあえず始めたのだ。そして、自分が思ったよりも長く、日記は日々増殖している。

日記を付け始めて面白いことに私は気がついた。日記というものは不思議なもので、付けている内にちょっとした法則に出会うことがあるのだ。その中でも一番価値のありそうなものが「大安」だった。

大安吉日。そんなものを信じて行動したことはない。それどころか、日めくりカレンダーに大悪日と書かれている日に限っていいことがあったりするので、その日を楽しみにしていたほどだ。気がつけばいつも、大悪日を求めるように過ごしていた。人の悪日が私の吉日というあたりで、ちょっと物悲しい気分になったりはしたけれど、概ね自分が嫌な思いをしなければＯＫなので構わなかった。

その大悪日を好きになったわけと、大安を好きになった理由はさほど変わらない。

先日何気なく「よく続いてるなあ」と自分に感心しながら日記を読み返していて、いいことがあった日のところに大安の二文字を見つけただけなのだ。

つまりそこで、単純に「大安はいいことがある」という構図が私の中で出来上がった。大悪日だろうが大安だろうが、経験が裏打ちする幸運は受けておくに限る。激しく信じてはいないけれど、大安吉日バンザイくらいには思っていた。

それがどうして、この雨。

大悪日の魔法が切れかかっているように、大安の魔法は効き目が大きいだけに切れるのも早いのだろうか？ そんな埒も明かないことを考えて、更に落ち込んだ。

雨宿りができそうな場所を探している内に、Ｔシャツの色が雨水に濃く染まっていく。もう泣きそうな気分で自分の肩を抱いて俯いた。

私は運がいい。小さい頃からそうだった。

人が失敗するようなところで奇跡のようなことが起こり、いつも何かが引き上げてくれるように困難に溺れずに済んでいた。

高校生の時に友人と見てもらった手相で、私の運は人よりも格段にいいことが発覚した。飛行機が落ちても生き残るほどの運の持ち主だとかどうとか。それは、先祖の霊が守ってくれているからだと言われ、私は私が生まれる前に亡くなったおじいちゃんだ、と確信した。

会えなかったおじいちゃん。だけど、私が生まれることは知っていたおじいちゃん。

会えなかったからこそ大事に思えて、私はおじいちゃんのお墓参りを欠かさなかった。命日やお盆にしか行けないけれど、その時には色々な報告をしている。おじいちゃんはもしかすると、家族の誰よりも私のことを知っているかも知れない。

私を守ってくれているおじいちゃん。もしくは名前すら知らないご先祖様。その占い師の言葉を信じるならば、私の運のよさは人任せに繋がっている気がする。

運で切り抜けるイコール私自身の努力が足りない、そういうことなのではないかと。

そうやって沢山の運を使ってきたから、運の尽き、という考えがぽつんと現れる。

「もうきっと駄目だ.....」

これから先、いいことなんてもうないのかも知れない。そう考えたら、足がその場にくっついてしまったかのように動かなくなった。

大人になればなるほど、沢山のことが上手くいかない。失敗ばかりで成功がない。努力すればするほど、ドツボにはまる。頭はよくなっているはずなのに、経験が推測を簡単にさせてくれているはずなのに、分からない。集めてきたデータ自体が間違っていたというなら、もうどうしようもない。フリダシに戻る――戻れるのかな、今更。

雨ひとつでここまでヘコむ自分がちょっと笑える。

このまま落ち込んでいても仕方がないので、泣いてみようかなと思った。泣けば少しは落ち着くだろうし、自分の馬鹿さ加減が分かって冷静になれる。雨が降っているから、泣

いてもそう気づかれないだろう。

気合を入れて「ようし泣くぞ」と決意した時、何故かざあざあと鳴る雨音が頭のあたりで弾けるのを私は聞いた。僅かに暗くなった視界に、ぼんやりとした影が映る。

「何が駄目なの？」

思わず呟いた先刻の独り言に、誰かの声が応えた。

私が驚いて顔を上げると、透明のビニール傘が差しかけられている。

「傘、貸そうか？」

そう言った人の顔は、雨粒に邪魔されてよく見えない。しばらくその理由を回転速度が日々落ちていく頭で考えて、その人が私にだけ傘を向けてくれていることにやっと気づいた。困ったように笑うその人の髪が少しずつ水を吸い込んでいって、集まった水滴がぽたぽたと落ちていく。

「ああ、ごめんなさい！ 私は大丈夫ですから、傘、差してください」

「あ、オレはそこの店のバイトだから。すぐに戻れば濡れないよ。どうぞ、使って」

既にずぶ濡れ状態になりつつあるバイトのお兄さんは、何でもないことのように近くの店を指差した。その店に視線を向けて、私はその店を知っていることに気づく。だけど今は、それどころではなかった。お兄さんのエプロンは、青色から紺色に変化している。

「あの、雨宿りさせてもらいます。だから、早くお店に――」

私は咄嗟にそう言うと、傘の柄の部分を押すようにしてバイトのお兄さんの方へ少し傾けた。傘の下で見たお兄さんの格好は、私以上に濡れネズミになっている。それなのに、私の台詞であるはずの「ありがとう」を口にして、お兄さんは嬉しそうに微笑んでいた。

何かすごくいいことをしたような気分にさせてくれる、その笑顔がふわりと私の心を甘い匂いで満たす。声に出して「うわあ」と喜びたくなるような、不思議な笑顔だった。

「さあ、これ以上濡れると大変だよ。行こう」

とても自然に手を差し出されて、私は普段なら伸ばそうともしないはずの自分の右手を無意識に重ねた。雨の湿気と気分の重さに貼り付いたようになっていた足が、お兄さんの力に連れられて歩き出す。

店の入り口まで来て、ようやく頭の中が整理されてきた。そう、ここはずっと入ってみたいと思っていた喫茶店だ。可愛いレンガの建物。だけど、その扉の開く音は酷い。

ギィイィイ。

予想通りの音がお兄さんの手によって鳴らされて、中から乾燥した空気が漏れ出してきた。

エアコンから出る空気の匂いが、私の体のぬるさを吹き飛ばす。遅れてドアベルがカランカランと鳴った。

「ほらよ」

そんなぶっきら棒な言葉と共に、店の奥から何かが飛んでくる。それを素早くお兄さんはキャッチし、私の頭の上にそれを降らせた。突然目の前が暗くなったので驚いたけれど、手にしてみるとそれは黄緑色のバスタオルだった。

「お前なあ。外でもたもたしてないで、さっさと入ってこりゃあいいだろうが」

「でも店長、それだと変な客引きみたいで怖がられるかなって思って」

後から放り投げられた桃色のフェイスタオルで髪を拭きながら、「ね？」とお兄さんは私に同意を求める。私が反射的に頷くと「ほらね」とお兄さんは自慢げに笑った。

店長さんは小さく息を吐き、私を見て口の右側だけで笑う。お兄さんと店長さんを見比べるようにして、それから私もほっとした気持ちで笑った。

こんなお人好しの権化のような人を目の前にして、誰が変な客引きだと思うだろう。思わず頷いてしまったけれど、少しも怖くなかった。店長さんはそれが分かっているのだ。だから、面白そうに笑っているのだと思う。

「.....とりあえず、お前は着替えてこい。そんな格好で仕事されても困るからな。あいつの服があるとこ知ってんな？ 勝手に出して好きに着ろ」

「それ、前にしたらアキさんにすっごい怒られましたよ？」

「あれはいつでも怒ってんだ。放っとけ。で、お嬢だけど。あんまり濡れてるようなら着替え貸すが、どうする？」

「あ、いえ.....お構いなく。バイトのお兄さんのおかげでほとんど濡れてませんから」

「本当？ 服の中の何かも大丈夫？」

カウンターの奥の方へ向かっていたお兄さんが思い出したようにそう言った。何だ？ という顔で店長さんが彼を見て、私に顔が向けられる。

「え———あ、そうだ」

お兄さんに指摘されて、すっかり忘れていた事実に気がついた。あんなにも落ち込んでいたというのに、お兄さんの笑顔に絆されて安心してしまっていたのだ。

Ｔシャツの中から、すっと薄い紙袋が滑り落ちる。私はそれを抱えていたのとは逆の手で受け取り、くるくる回しながら眺めた。

「大丈夫だった？」

濡れている跡が僅かにはあったものの、中身にまで到達するようなものは見当たらない。

その奇跡に嬉しくなって、お兄さんにへらっと崩れた笑顔を向けて頷いた。

「よかったー。大事そうに抱えてたからさ。窓から君が見えて慌てて外に出たんだけど、こんなに傘が小さいとは思わなくて。ちょっと焦っちゃったよ」

よかったね、と優しく笑いかけられて、子供のように照れながらもう一度頷く。その時、お兄さんが「くしゅん」とくしゃみをした。

私はきっと目に見えて青くなったのだろう。店長さんは彼を追いやるように「さっさと行け」と叱り、私をカウンター席の方へ手招いた。大丈夫だよ、と捨て台詞を置いていったお兄さんの言葉を、信じていいものか少し悩む。

お兄さんが奥へ消えてしまうと、店長さんが堪えていたのを吐き出すように笑った。

「逆に心配させてどうするんだってな。まあ、あいつはやたらと丈夫だから心配しなくていいぞ。もう少ししたら雨も止むだろうから、それまで雨宿りしてくといい」

水と氷の入ったグラスが出されて、私は促されるようにその席に座る。店長さんがうろうろとカウンターの中を行き来するのを眺めてから、はっとして私は慌ててメニューを睨んだ。

絶望的だった雨から助けてもらったというのに、何の利益ももたらさないわけにはいかない。何か少し値の張るものを頼もう、と思う。ちょうどお昼時だから、ご飯を食べていってもいい。お母さんには後で電話すれば済むことだし、そんな風に考えて「お食事」の欄を見続けた。

オムライスもいいし、チャーハンでもいいかな。ああだけど、甘いものが食べたい気もするし、ハンバーグも捨てがたい。だけど、食べきれるだろうか。もしも残すようなことになったら悪印象だし、無理やりお礼代わりに食べましたって思われそうで私が嫌だ。気持ちよくお礼もしたいし、食事もしたい。

馬鹿みたいなことを考えながらメニューと睨めっこをしていたら、くるりとそのメニューが目の前で反転した。目を上げると味のある顔で店長さんが、メニューの裏側をリズムを取るように指差している。

そこには「ドリンク」とあった。目を瞬かせてもう一度視線を上へ向けると、店長さんが笑いを我慢するように口元を押さえながら目でまたメニューを示す。

気を遣うな、ということなのだろう。私は恥ずかしくなって照れ笑いを浮かべると、ずらりと並んだドリンクメニューに目を遣った。

「ええと.....アイスティー、貰えますか？」

店長さんは「はいよ」と言って、またカウンターの中でうろうろし始める。じっとその優雅とは言えない動きを見つめていると、店長さんは照れたのか雑誌を一冊放り投げてきた。呆然と受け取った週刊誌の表紙を見つめて、私は思わず吹き出して笑う。

表紙がおかしかったわけではなくて、失礼ながら店長さんが照れたことがおかしかった。

店長さんはよく見てみると、金髪で小太りで目つきが悪い。ちょっと昔まではチンピラをやってました、と言わんばかりの容姿なのだ。その人が可愛らしく照れているのだから、何だか楽しい。

拗ねた顔で睨まれたけれど、少しも怖くなかった。

「こんなもん、見てても楽しかねえぞ」

あきらめたように背を向けてしまった店長さんの動きが、またおかしかった。私の視線を気にしているのか、働く手がやたらと手近なものに激突しているのだ。

あまりに照れる店長さんに悪い気がしてきたので、笑いを止めるべく週刊誌の適当に開いたページに顔を埋めてみた。何でもない記事を間近で眺めてみるけれど、まだ喉の奥が痙攣したようにくっくっと笑っている。

「いい加減、笑い止んだらどうだ」

呆れた声が、頭上に飛んできた。だけど、楽しんでいるようでもある。

こんなに笑ったのはいつ振りだろう、と思った。地顔が笑顔とまで言われて、当たり前のように笑っていた日々が何処か遠く感じられる。遠くへ来たつもりはないのに、あっという間に世界の反対へ連れてこられたような、そんな感覚。

たかが三ヶ月か四ヶ月。それくらいの時間が流れただけなのだ。それだけのことなのに、その僅かな時間は私を置いてけぼりにして、友達を次元を隔てた世界へ連れていってしまった。そして私は今も、もたもたと歩いている。

そう、連れていかれたのはきっと友達の方。私だけが誰もいなくなったその場所に残っていて、別世界にいるような感じを受けているだけなのだ。

ずっといた場所なのに、人がいないだけでこんなにも世界の見え方は違う。

「ようやく収まったな。.....ちょうどいい。アイスティーも出来上がる」

いつの間にか笑い声が止んでいた私に、店長さんが明るい声で呼びかける。そこで私は我に返って、「また捕まった」と小さく溜め息をついた。

私には思い出しては暗くなるばかりの、ここ三ヶ月くらい抱えている難題がある。それはふっといつもの馬鹿な思考が止むと同時に、自分でも嫌になるほど常に隙間風のように入り込んできた。そして上手く逃げられずに捕まっては、何の得にもならない間延びしたような悩みが始まるのだ。

こんなにも楽しいのに――きっと楽しいからこそ――逃がしてもらえないのだと思う。

「笑い疲れでもしたか？ 急に大人しくなって」

頭を振って答えた私の目の前に、細長いグラスが置かれた。氷が音を響かせて、順に上へ上へとグラスの中で並んでいく。そこへ、綺麗な色の紅茶が注がれた。

「お待たせしました。どうぞ」

この人、にやりと笑うのがクセなのだ。不意にそんなことを思った。ついでに、この笑顔がとても好きだなあ、とも。

「いただきまーす」

「お、砂糖入れずに飲むんだな」

「甘いの、駄目なんですよ。いつの間にか、なんですけどね。ケーキとかも、昔は三つとか平気で食べてたのに、今は一つを食べるのにもふーふー言ってて。原因不明なんですよ。味覚が変わっちゃったのか、それとも必要なくなったのか」

「ダイエットしようとか思ってるからじゃねえのか」

意地悪な顔をして店長さんがそう言うので、私は即座に「違います」と睨み上げる。ごめんごめんと言うように、店長さんが手をぴらぴらと振った。

「ああ、だけどそう言えば。一度だけしたことがありますよ、ダイエット」

「へえー。どんなのをやったんだ？」

「絶食みたいなのを。三食お粥だけなんです。それがもう、辛くて。その日の夕飯でやめちゃいましたよ。だって、味のあるゴハンが食べたいんですもん。いつもはあまり好きじゃない煮物とかがものすごくおいしそうに見えて、食べてみるとこれがご馳走なんです。その頃は育ち盛りでしたから、一食抜くのも大変だったんですよね多分。今なら一食くらい抜いても大丈夫ですけど」

「絶食ってのはよくないわな、そりゃあ。まあ、飯のありがたみが分かってよかったって話なんだろ、それは」

「あはは。そうだといいんですけど。私、元々食にこだわりがないので、食べれたらいいやくらいですね。最近はお腹も空かないから、どんどん適当になってますし。あ、だけ

ど、両親と一緒に住んでるので、栄養面ではばっちりですよ」

店長さんは自分用にコーヒーを淹れて、それを飲みながら考えるように天井を見上げる。

「あんたが一人暮らししたら大変なことになりそうだなあ」

「えー、そんなことないですよ。この間大学を卒業したばかりなんですけど、それまで一人暮らしでちゃんとゴハン作ってましたから。周りの友達よりはずっと凝ったものを作ってましたよ。一人暮らししてると、放っといたら本当に死んじゃいそうな気がして」

「お嬢、やっぱりおかしな子だな。.....普通考えるか、そんなこと」

今の世の中ファミレスもあればコンビニもあるのに、とぶつぶつ店長さんが呟く。

確かにそうなのだけど、私の場合、ファミレスに一人では入れなかったりする。何故なら、ヘタレだから。それに尽きる。

ヘタレといえば、私はお弁当屋さんで何かを買ってみようと思って入った経験がある。結局その時どうしたかといえば、お弁当を頼む勇気が湧かなくておむすびとサラダを買った。この時ばかりは、自分のヘタレっぷりに激しく笑ったものだ。

そして、コンビニ。ここはまだ平気な部類に入るのだけど、買うものには意味もなく気を遣ってしまう。ここで大盛りカレー買ったらちょっと引かれそうだな、とか。朝からデミグラスソースのオムライスかよ、とか。もちろんそれらは自己ツッコミなのだけど、他人がそう思わないという保障もない。それ故、おむすびとかサンドイッチに甘んじてしまうのだ。

そんな苦悩をするくらいなら、行かない方がマシだと思ったのが結論。

八百屋で野菜を買い込み、スーパーで牛乳などを買い込み、自分でトントン好きなものを作るに限るのだ。その方が出費は少なくてすむし、料理の腕は上がっていく一方だし、苦痛も強いられない。自炊、バンザイだ。

そんな私自身あまり面白くもないことを一瞬の内に考えて、これはさすがに恥ずかしくて言えないと思った。初対面の人に、そこまで恥を晒す必要もないだろうとも思う。

それに第一、こんなことを話しても質問の答えにはならない。

「いや、例えばの話ですけど.....突然倒れて死んじゃうってこともあるじゃないですか。だから、普通にきちんとしていたいって言うか。部屋とか毎日掃除してましたからね、私。いつ死んでもいいようにって理由で。もしもいきなり私が死んだら、私の許可なしに人が入ってきちゃうでしょう。家族とか、もしかしたら警察とかが。それで部屋が汚かったりして、それを見られちゃったりしたら死にきれません。.....とりあえず、そんなことにならないようにできるだけ死なないようにしようって決めたんですよね」

「――そうなんだ」

カウンターの奥から聞こえてきた声に、私と店長さんはそちらを向いた。お兄さんは私たちの話を聞いていたようで、何度か頷きながら店長さんの隣に並んだ。

着替えてきたお兄さんを見て、「アロハシャツ？」まず、そう思った。先ほどまで着ていた普通のシャツとは違い、今着ているものはそんなケバケバしい色の半袖シャツなのだ。チンピラが着ていそうな、お兄さんに似合うとは言いがたい代物。

そこで店長さんが「あいつの服を着ろ」というようなことを言っていたことを思い出す。少し想像を進めるならば、多分これは店長さんの息子の服になるのだろう。

チンピラの子供はチンピラ。そんな言葉が思い浮かび、いやいや失礼だと思い直す。多分そう、ちょっと服装の趣味が悪いだけなのだ。

「死なないようにするって偉いよね。他人が守れない場所では、やっぱり本人が自分を守るしかないからさ。家族にとってはそれが一番嬉しいのかも」

お兄さんは少し寂しそうに微笑みながら、カウンターの何処かから青のエプロンを取り出してきた。それを身につけると、アロハシャツもどきが隠れてほっとする。直視し続けていたら、ふとした瞬間に笑ってしまいそうだったのだ。

お兄さんの声を聞いていると、不思議と落ち着く。その声が綴る言葉も、何だか優しくて聞き逃してはいけない気がした。

お兄さんの話を、真面目に聞きたい。だからこそ、アロハシャツは天敵だ。とりあえず、天敵はお兄さん自らの手で片付けられたので、私は安心して話を続けた。

「理由がズレてる気もしますけどね」

「どんな理由にしろ、君が生きてれば嬉しい人がいるってことだよ」

「嬉しい、のかな。どっちかというと責任、のような気がしませんか？」

「責任.....親にとってはそうかも知れないね。それじゃあ君は、自分の両親が責任だけで君を心配してると思うの？」

「はい。少なくとも父はそうだと思います。.....だって、可愛くないもの」

小さな声で本音を漏らす。聞こえなければいいと思いながら、聞こえてもいいかなと考える、微妙な音量だった。

それを、お兄さんは聞き逃さなかったようだ。更に、店長さんも。

「可愛くない？」

声を揃えて私に尋ねた二人は、顔を見合わせてしばらくしてから笑った。二人の言葉の後に、「お父さんが？」という疑問の声が聞こえた気がして私も笑う。

このお店に入ってからずっと、笑いが絶えない。そういえばこのお店の名前は「スマイル」だったなあと思い出し、スマイルというよりもラフの方がしっくりくる、なんて勝手に店の名前を頭の中で変えてみる。「微笑む」よりも「笑う」。ぴったりだ。

「もちろん。お父さんが、じゃないですよ。私が、です。.....可愛くない娘ってよく言

いますよね。まさに、それです」

「そんな風には見えないけどな」

「外面だけはいいんです。……父に似て」

「お父さんのこと、苦手なの？」

黙り込んでしまった店長さんと、不安げにそう訊いてきたお兄さんの顔を見て、私は何を話しているのだろうと慌てた。

人にこんなことを話したのは初めてだ。しかも、初対面の人たちなのに。

私は初対面の人と話すのに抵抗がある方ではない。どちらかといえば得意で、適当に話を合わせてその人の性格を把握するようにしている。

だけど、自分のことを決して簡単に話したりはしない。それが後に、弱点になる可能性があるからだ。弱みを見せてはいけない。愚痴を零してはいけない。そんな風にいつも自分を守ることだけは立派にこなしていた。

どうしてこんなことを話してしまうのだろう、そう疑問に思ってから、何処かでこれと似た感覚を覚えたことがあると思う。いつも辛いことがあるとそこへ行って、心の中で泣き言を叫んでいた。

そんな私に応えるように、いつも微笑んでいた――そう、あの壁だ。

中学生の頃だった。入学した頃にはなかったのだから、おそらく二年生かそのくらいの時だっただろう。学校へ行く途中にある商店街の、その間を抜けるような小さな路地で、壁に描かれた少年と私は出会った。

商店街からも見える距離に少年は立ち、通り過ぎていく人たちを笑顔で見送る。

その瞳がとても綺麗にきらきらと描かれていて、一目見ただけでその絵を好きになった。だけど次第にその思いは、その少年だけへと向けられるようになっていった。

優しく笑う少年。何かを零さないように掬い上げるような、重ねられた両手。そこには穏やかな光が見える。白色と黄色とオレンジ色。それらの色が円を描くようにふわりと塗られていた。

支えられるように、抱えられるようにそこにあるものが、自分のように思えた。多分、その絵の前に立った人たち全員の姿へ変化するのだろう。

その時に聞こえた声があった。あの声は何と言っていたっけ。

「.....大丈夫？ ごめんね、余計なこと訊いて。オレ、いつもそうなんだ。勝手に人のこと詮索するようなこと言って.....困らせてごめんね」

突然現れたお兄さんのアップに、ふとあの壁の絵が重なった。

泣きそうな私に笑いかけた絵。縋りつく私の指に応えた声。

そう、あの時に聞こえた声は「見つけたよ」と言っていた。

「あの、いえ。そういうわけじゃなくて――」

あ、この人だ。唐突にそんな言葉が頭に浮かんだ。

似ているというよりも、そのもの。ただ少し小さくしただけで、あの壁の姿へ戻る。

怯えているようにも見えるお兄さんの表情に、ああやっぱり本当にいた、と思った。

壁は見つめれば見つめるほど、変化のなさを顕著に私たちに伝えてきていた。この男の子はいる、そう信じていても壁はその思いを打ち消した。声は聞こえるのに動かないその不思議な絵は、絵であることを頻繁に主張しているようだったのだ。

本物に会いたいと思ったわけではない。だけど、本物が人間であると信じたかった。

私は、本物を、見つけてしまったのだ。

そしてふと、何故かお兄さんに申し訳なさを感じた。ずっとずっと貴方の絵に縋っていた頃がありました、などと言えるわけがない。だけど、救われていたことは事実だから、何かお礼をしたいとも思う。

それも何かおかしいのでは？ と頭を抱えながら、私は見上げるようにお兄さんを見た。

とりあえず、笑ってみた。

そんな私の笑顔に騙されたように、お兄さんも不思議そうに笑う。

店長さんは微妙に顔を歪ませながら、それでも笑っている。

なるほど。「スマイル」という店の名前も合っている気がしてきた。全く勝手ながら。

「よし。そのアイスティーは俺のオゴリにしよう」

「え、そんな。困ります」

「バイトが余計なことを訊いちまったからな。お詫びだ」

「え、だから。全然お詫びなんて必要ないです。ただ一瞬、ちょっとぼんやりしちゃっただけで.....よくあるんですよ、こういうこと。ぼーっとするのが特技だった時代がありましたから」

「ぼーっとするのが特技？」

「そうなんです。よく自然にぼーっとしちゃう子がいますよね。あれとは違うんです、私の場合。ぼーっとしたい時に、ぼーっとできるんですよ」

はぁ？ そう言いたげな目で、お兄さんと店長さんが口を開けている。

「まあ、そういうことなので.....気にしないでくださいね」

お兄さんに向けて微笑むと、納得がいかないのか、お兄さんは首を傾げていた。

「.....で。お嬢、その紙袋の中には何が入ってんだ？」

話題を変えようといった感じで、店長さんが私が大事に抱えていた紙袋を指した。紙袋についた水滴は、もうすっかり乾いている。

「本です。今日発売の.....もう、何年も新刊が出るのを待ってたんですよー」

ばりばりと紙袋の入り口に張られたテープを剥がすと、私はじゃーんという効果音を何とか喉の奥に飲み込みつつ、二人の前にハードカバーの本を見せた。

「あ、それ。何処で買った？」

「この辺の本屋さんにはなかったので、駅まで行って駅ビルで.....ってもしかして店長さん、知ってます？ この本」

「知ってるどころか、全巻持ってる。他のシリーズも短編も、その作者なら全部」

「うわー、いいなあ。私、文庫落ちするまでは買えないんですよ。置く場所もないし、お金もかかっちゃうし。だから、二作ほど文庫落ちしてないのは買えてません。図書館にも置いてないし、早く文庫落ちしないかなあって。.....今回のはすっごく待ってた本だからつい、買っちゃいましたけどね」

「それ、まだ残ってたか？」

「残ってましたよ。さすが大きな書店さんだけはあって、平積みでしたから」

呆然としたお兄さんだけが、ぽつんと私たちの会話についてこれずにいた。そんなお兄さんに気づいて、私と店長さんは見合わせて笑う。

そこで、私は本を見つめた。何処にも濡れた滲みはない。嬉しかった。

「お兄さんが傘を差してくださったから、濡れずに守れました。本当にありがとうござい

ました。.....風邪に気をつけてくださいね」

「大丈夫だよ。ありがとう」

にっこり微笑んでお兄さんがカウンターから出てくると、店長さんはカウンターの中にある丸椅子に腰掛けた。お兄さんは私と一つの間を残して、二つ隣の席に座る。

店内に招こうか悩んでいた時と同様で、お兄さんは気を遣いすぎるタイプの人のようだった。隣に座ったら、私が嫌がるのではないかと考えたのは一目瞭然だ。

「ええと、高校生？」

「お前、訊くことが唐突だな。.....下手なナンパみたいだぞ」

「ナンパって.....オレはただその」

話し始めるきっかけを作ろうとしただけだ、と言いたかったのだと思う。その恐縮した様子に私は咄嗟に、お兄さんが言いかけた言葉を遮って答えた。

「大学は今年の三月に卒業しました。現在はその.....無職です。完全な」

「ほー。あれか、モラトリアムってやつか。お嬢」

「そんな大層なものじゃなくて.....ただの、就職浪人ですね」

「そうなんだ」

「お嬢みたいな子ならすぐに決まりそうなもんだけどな。見た目も真面目そうだし、話してもしっかり加減が現れてるし」

「そんな風に言ってもらえると、お世辞でも嬉しいです。.....だけど、こればっかりは私がみんな悪いって分かってるんですよ。私って元々逃げたがる人間なものですから、多分今も社会人になるのが怖いんだと思います。自分がちゃんと役に立つのかなとか、何もできないんじゃないかとか。そんなのってやってみなきゃ分からないって分かってるんですけど、どうしても怯えちゃうんです」

「仕事、したくない？」

お兄さんが遠慮しながら口にしたその質問に、私は首を振って即答した。

「いいえ！……そんなことはないです。どちらかと言えば、すごく働きたい状態です。忙しくしてないと生きていられない人種っているじゃないですか。それなんです、私。高校生の時に手相を見てもらったんですが、貴方は一生忙しく生きるでしょうって言われて、そうだろうなあなんて頷いてましたから。今はこんなに暇ですけど」

買ってきた大切な本を僅かに掲げて見せる。欲しい本を探すために色んな場所をうろつくことができることが、暇な証拠だと言いたかったのだ。

「就職活動、上手くいかないんだ？」

「……はい。私、普段はかなりの嘘つきなんですけど、面接とかになると正直になるんです。やっぱり働き始めてから地を出して困らせるのも嫌ですし、だったら最初からこんな性格だっていうのを分かってもらおうと思って。だけど、変わり者過ぎて駄目みたいですね。きょとんとされてるのを見て、またやっちゃたんだーって思います」

「嘘つきが正直になるって、そりゃあすごいな」

そうでしょう、と私は自慢げに頷いてみせる。少し滑稽でわざとらしいくらいに。

私は何でもかんでも冗談にする以外、その場の雰囲気を壊さずに済ませる方法を知らなかった。暗い話だろうが辛い話だろうが、自分に余裕さえあれば冗談にできる。人を一緒に落ち込ませても、自分がまた落ち込むだけだ。何一つ、いいことなどない。

店長さんはそんな私の思いを知ってか知らずか、合わせるように笑ってくれている。その隣で、お兄さんは複雑な顔をしていた。そのことに気づいて一瞬、私はぞっとした。

何に対して、ということではない。ただ私は、人の考えていることが分からなくなると背筋に悪寒が走るようにできているのだ。小さい頃から、人の顔色を伺う子供だった。だけど何故かいつも、上手くやろうとすれば失敗し、無意識のうちに無茶をやらかすと上

手くいくという法則が成り立つ。だからといって、考えなしに行動してばかりいられない。当たり前だけど。

他人の考えていることは、顔を見ていれば大体分かった。自意識過剰だとか、思い込みが激しすぎるとか、そういうことがないでもない。だけど多分、三割くらいの確立で的を射ていると私は思っている。

その人が何を言うか、先読みして話してしまうことも多々あった。気持ち悪いと思われたことは幸いなことにないようだけど、最近では自粛するようにしている。自分が話したいことを先に人に話されてしまうのは、やっぱりつまらないものだと思うからだ。

こんな能力があったからこそ、私は今のキャラクターを確立している。常に危険を避けて歩いているから、深い穴には落ちない。だけど、成長も成功もない。可もなく不可もない私は、常に空気のようにふらふらと人の間を渡り歩くのだ。ただただ、平和に。

だからここでも、お兄さんの心を見抜かなければいけない。

その表情はどのように受け取るべきなのだろう？ お兄さんの顔をじっと見つめ、そこにあるはずの感情を探る。読めない心の奥が怖くて仕方がなかった。

壁の絵を相手にしている方がずっと、心穏やかに見つめられた気がする。

「そんなにさ、気負わなくてもいいんじゃないかな」

何に？ そう疑問が浮かんだ。

それと同時に、自分の左腕に巻きついた腕時計の示す時間に気づく。正午を過ぎていると知り、外を見た。雨はいつの間にか上がっている。

お昼を食べていこうと思っていたけれど、お母さんに連絡するのを忘れていた。この時間だとお昼ゴハンを用意してしまっているかも知れない。

慌ててそのことに気がついた私は徐に立ち上がり、目の前にほとんど残っているアイス

ティーを一気に飲み干した。冷たくておいしい。こんな飲み方はものすごく失礼だろうと思ったけれど、残していく方がもっと辛かったのであきらめる。

「どうした、お嬢」

「あ、もうお昼だね。帰る？」

驚いている店長さんと、落ち着いて私の行動を理解しているお兄さんの声が重なった。店長さんはちゃきちゃきで、お兄さんはのんびり。そんなイメージが私の中で焼きつく。

「はい。ええと、アイスティーのお金.....」

目の前にあるメニューに手を伸ばそうとした瞬間、二本の手がそのメニューを奪っていった。意地悪だなあと嬉しくなりながら思い、お金を多めに置いていって仕返ししようかとも思う。

すると、お兄さんが立ち上がって私の肩を押した。このままお店の外まで連れていかれるらしい。店長さんもカウンターから出てきて、私の見送りをしてくれるようだった。

「お嬢、暇ならいつでもこの店に遊びにこい。毎日でも歓迎するぞ」

「そうだよ。明日もおいで」

店長さんもお兄さんも言うことが極端だ。だけど、こういう物言いは好きだ。

無職の無気力人間。そんな私にはこういう外出も必要なのかも知れない。少なくともこの人たちは悪い人ではなさそうだ。本当のところは分からないけれど、私の話を普通に聞いてくれた。その「普通」が今の私には心地よくて、新鮮だった。

やっぱり、今日は大安だったのだ。欲しかった本どころか、この町で見つけたいと思っていた「誰かとのコミュニケーション」までも見つけてしまった。

「また、来ます」

何年か前に、初めて行った美容室でそう言って二度と行かなかったことがある。そんなこともあるかも知れないけれど、このセリフを言う時はいつでも本気だ。

「あ、そうだ。忘れてた」

お兄さんはそう言うと、背を向けて歩き出そうとする私を引き止めて「名前、訊いてもいいかな」と笑った。少し離れた場所で、そういえば聞いてなかったなと呟く店長さんの声がする。

「オレはカイヌマ、ツギヒト。食べる貝に、底なし沼の沼。次の人って書いて次人。字の表す通り次男坊なんだ。安直だよね」

貝沼次人。そう頭の中で感じを当てはめてみて、不意に壁の文字を思い出した。

ああ、だから。「ＮＥＸＴ」なんだ。

描かれた少年の――彼自身の名前とは知らずに、私は励まされていたのだなあと思う。

自分の自己紹介を終えると、お兄さんは店長さんを振り返った。どうしたらいいのか分からなくて私が黙って店長さんを見ていると、店長は恥ずかしそうに頭を掻きながら「カトウヒロアキ」と名乗った。

人に名前を尋ねる時は自分から。礼儀正しい人たちだ。

「私は、福井花です。福井県の福井に、植物の花。名前の由来は.....何なのかな。聞いたことがないので分かりません」

自己紹介は、とても照れる。大学生時代は友達ができるたびに自己紹介をし合ったものだけど、普段の生活でこんな場面は少ない。社会人になれたとしたら、こんなことも増えるのだろう。友達でも知人でもなく、同僚もしくは仕事相手として。そこには大きな違いがあるけれど、沢山の人と知り合えることは楽しいことだ。働き出したらそんなことを言ってられない、そう言われてしまっても、きっと私はもう少し夢を見ていたいと返す。

「それじゃあ、失礼します」

二人に「また明日」と手を振られて、私は俯いて笑った。

僅かな時間。知らない人と話をしていただけなのに、心が軽いのは何故だろうと思う。そして心が軽いと感じると同時に、自分がひどく疲れていたことに気づいた。体力的なものではなく、精神的に追いつめられていたのだ。だけど、それは自分自身の仕業なので見て見ない振りを決め込むことにする。

また明日、そんな言葉が私の口から小さく零れた。

「本当にまたおいでよ。待ってるからさ」

そう繰り返すお兄さんは、本当に待っていてくれるのだろう。あの壁が待ってくれていたように。何故か強くそう信じられる。

置いていかれた壁の少年は、今頃他の誰かを待っているのだろうか。

二人にずっと見送られていることに気恥ずかしさを感じ、私は足早にすぐ近くの道の角を曲がった。二人はどんな話をしながら店の中へ戻っていったのだろう。私の話をしているだろうか。変な子だった、とか？ 本当にまた来たらどうする、とか？ 可愛くない子だったなあ、とか。むしろ無言、とか？

そんなことが途端に不安になったけれど、折角の暖かい気持ちに水を差すのは嫌だったので忘れることにした。

二人ともいい人そうだった。それだけは確かだ。今まで生きてきた二十三年間で培った人を見る目は、そこそこいい具合に育っているはずだ。信じてもいいと思う。

だから、自分の勝手な被害妄想であの人たちを判断するのはやめよう。

そう決心して、珍しく私は喫茶店内で自分が話したことや、二人が話したことを反芻するのをやめた。いつもは反芻して失敗がなかったかを反省するのだけど、今日はこのままの気持ちでいたかったのだ。

「あー。角曲がっちゃったせいで遠回りになっちゃったよ.....」

やっぱり駄目人間だ。そう小声で口にして、目の前に広がる未知の道に私は頭を抱えた。

恥ずかしい思いと遠回りするための体力。どちらを優先するかといえば、恥ずかしい思いだろう。つまり、遠回りしてでも逃げたい。結果は常に同じだ。

もしかしたらこれから、あの店へ通うことになるかも知れない。それなら、今からこのあたりの地理を勉強しておくのも悪くないだろう。

楽観的に考えながら、私は大事な紙包みを持って一歩を踏み出した。

そういえばあの喫茶店。私以外にお客がいなかったけれど、大丈夫なのかな。

見事に晴れた空を見上げながら、店内の様子を思い浮かべてまた笑った。

昨日はあれから、十分で帰れるところを三十分かけて帰ることとなった。

右へ曲がりたいのに、右へ曲がる道がなかったのが原因だ。五分ほど歩いてから、まだ先に右折できる道がなさそうだと知り、元来た道へ戻ろうかと思ったほどそれは長い一本道だった。

もうここまでくると意地を張ってしまうのが私の短所で、そのまま行けるところまで突っ切ることに決めて歩き、倍以上の時間をかけて帰宅したのが午後一時。

お母さんは昼食を用意して待ちくたびれていたし、私自身も炎天下の中をうろうろしたために疲れ切っていた。私は「暑い暑い」と連発しながらお母さんに謝り、それから買うことのできた大切な本を見せた。もちろん「よかったね」と言ってもらい、私は喜びながらサンドウィッチを口にした。

その後はただひたすら、買ってきた本を読んだだけ。

夕方にはもう読み終わってしまい、まだ物足りない気もした。だけど、その世界観は以

前と変わっていなくて、一行読むほどに懐かしくて微笑んでしまったのも事実だ。

こうして本を幸せな気持ちで読めるのも、お兄さんが助けてくれたおかげだと思う。

その反面、お母さんに喫茶店で出会った二人のことを話すことは結局なかった。

言えなかったのではなく、本当にあったことなのかと自分でも疑問に思ったからだ。それほどに素敵な出会いだったのだと思う。

その夜は暑さにうなされて中々眠ることができなかったので、そんな二人のことを思い出していた。

また明日、と言ってくれたツギヒトさんと店長さん。それが社交辞令だということを、私はちゃんと気づいている。だけど、その言葉には引力があった。いや多分、私が勝手に引っ張られている振りをしているだけなのだろうけれど。無意識に。

そわそわしながら考えたのは、とりあえず週一で行ってみようということだった。週一なら、それほど気にされないだろう。

ただ、二人の会話や空気を感じるだけで楽になれる。それに今は縋りたい一心だった。

ここがもし、私が小さい頃から住んでいたあの町だったとしたなら。真っ先にあの壁のところへ行っただろう。少年の姿をしたツギヒトさんに会いたくて。

ああだけど、来週になったら行く勇気を失ってしまう気がする。

そんなことを延々と考えていたら、ブラインドの隙間から光が差し込んできていた。ほとんど眠らないまま、朝を迎えてしまったらしい。

どうしよう、どうしよう、どうしよう。

それにしても暑いなあと思い、ブラインドを上げて窓を開けた。涼しいのかそうでないのか判断できない温度の風が少しだけ入り込む。それでも汗でじとっとした体がひやりとしたので、窓を開けたままにしておくことにした。

ベッドの上にもう一度転がって、父親が出かけていく物音を聞く。いつも私は父親が出て行くまで、部屋の外に出ることができない。

出かける先もなく、早く起きる必要もない。出かけていくのを見送っても、自分が置いていかれるのをまた実感し、落ち込んでいくばかりだ。

出て行って「いってらっしゃい」と笑顔で言えたらいいのだけど。それはまだ、先のことになりそうだと思った。どう考えても、私には笑ってあげられる余裕がないのだ。

テレビをつけてニュースを眺めみるけれど、いいニュースは聞こえてこない。どうしたらいいのか分からなくなることばかりで、自分の頭の悪さに辟易する。犯罪も政治も戦争も、私の力では止めることができないのだ。自分の犯罪を押し留めることはできても、他人の犯罪を一人一人止めて回るわけにもいかない。

十時頃になってようやく、ワイドショーが終わり出した。朝ゴハンを食べようと台所へ行き、冷蔵庫に入れてある栄養食のクッキーを取り出す。それを幾つか口の中に放り込んで、コーヒーを飲んだ。これで、朝食は終了だ。

それから買い物へ行く。お母さんの手伝いでできることといえば、この程度のことだけだった。優雅なプー太郎だと思われて当然の生活が、私の毎日にはある。それを喜んだことは一度もない。楽だと笑ったこともない。何もしなければ何もしないほど、泣きたくなる毎日が続いていた。悪いのはもちろん、何もしようとしない私なのに。

家に帰ってきてから、お母さんに何を食べたいかと訊かれたけれど、食べたいものはなかった。「なーい」と答えると、お母さんの「ダメよ、ちゃんと食べなきゃ」という声が返ってくる。ぼんやりとした日常。どうしようもない私。

出来上がった素麺をつるつると吸い込みながら、またヘコむ。

こないだ郵送した履歴書はどうなったんだろう？ 書類選考で落ちたのかな？ さあ、次を探さなくちゃ。

気分はどんどん落ち込んでいく。頑張らなくちゃと思うのに、その思いに反して落ちる。

先程まで少しはあった僅かな勇気まで萎み始めた。このままだと、ツギヒトさんたちに会いにいけなくなる。

あの笑みが見たい。そう、見るだけでいいのだ。壁を見つめるように。昨日のことも忘れていていい。反応がなくてもいい。だから、とりあえず行こう――と重い腰を上げる。

「ちょっと図書館に行ってくるね」

「そう。行ってらっしゃい」

お母さんはにこやかに送り出す。駄目人間な私をお母さんはいつも咎めない。

図書館へは行こうと思う。だけど目的地は「スマイル」だ。

嘘をついてることに少し後ろめたさを感じた。

玄関を開け通路に出ると、私は鍵をかける。お母さんが出かけるかも知れないので、鍵を持ってきたからだ。これで、お母さんを玄関まで連れ出す必要もなくなる。

それからふと自転車を見て、背を向けた。今日も歩いていこう。自転車を止めている内に見つかってしまったら、逃げられなくなる。歩きならば、通りすがりを演じられる。

まだ逃げるつもりなのか、と自分自身に笑って私はエレベーターに乗り込んだ。

今日はちゃんと最短距離を行こう。そう決心して、緑色のキャスケットを被った私は熱されたアスファルトの道を歩いていく。

今日は本当の快晴だ。雲一つない空を見上げると、夏だなあと思う。

汗を拭きながらずんずん歩いていくと、水色の看板が見えてきた。ここからが勇気の見せ所だ、と深呼吸をした瞬間――

「あ、花ちゃん。いらっしゃい」

間延びした優しい声が、何処からともなく私にかけられた。声のする方向をきょろきょろして探すと、店の前の花壇に水をあげているツギヒトさんが顔を出す。

「……こんにちは」

「こんにちは。待ってたんだよ」

驚きながらも必死に挨拶の声を絞り出すと、意外な答えが返ってきた。ツギヒトさんは手にしていたじょうろをその場に置いて、私に手招きすると店内へと声をかける。

「店長ー。花ちゃんが来たよー」

よろよろと近づいていく私の手首をツギヒトさんが取り、店の中へと引き入れられた。涼しくて気持ちがいい。日焼けしかけた頬が熱を放出していくみたいに感じる。

「お、来たか」

カウンターの奥から店長さんが姿を現して、私を一目見ると意地悪そうなあの笑みでにやっと笑った。その手には何故か、不似合いとも思える何冊もの本が抱えられている。

その本が何なのか、そのことにすぐ気がついて、私は泣きそうになった。いや、もう泣き出していたのだと思う。

ぎょっとした店長さんと、穏やかな顔で頭を撫でてくれるツギヒトさん。

「どうかしたのか？　これ、貸してやろうと思って出してきたんだが」

私が集め切れてないと言った本を、本棚の奥から出してきてくれたのだろう。少し埃を

被った背表紙がまた涙を誘った。今度は頬を伝う涙を感じたので、完全に泣いていると自覚している。

馬鹿みたいだなあ。こんなところでも泣いちゃって。

お兄さんは何でも分かってるといった風に、まだ私の頭を撫でてくれていた。

「ありがとう.....ございます」

人の些細な優しさとか、人の純粋に働いている姿とか、そんなものが今の私にはひどく羨ましくて、だからこそ目を逸らすことができない。痛みにも焦燥にも似ている思いが湧き出して、今は辛いけれど。その内に幸せと受け取れるようになるはずだから。

泣きながら笑う私に、二人は口を揃えて言った。

「「いらっしゃい」」

こうして駄目人間でプー太郎の私はこの日、力を分けてくれる優しい人たちと付き合っていくことを心に決めた。

二、小心者の戦い

二、小心者の戦い

今まで生きてきて常に自信がなかったので、自信をどう付けたらいいのか分からない。

もっと心を強くしろ、とか。もっと色んなことに平気になれ、とか。長いこと言われてきた気がするけれど、駄目だった。そうしてるつもりだけど、そうなってないというか。

駄目な自分でいいや、とか。駄目人間バンザイって思ってみるけれど、やっぱりそんな自分は許せなくて。それでもお母さんは、駄目だとは思ってないと断言してくれる。

.....何処が駄目じゃないんだろう。何処がいいんだろう。気のいいところ？ それって悪く言えば気が弱いってことだよね？

いいところなんて見つからない。だからといって、これといって悪いところも思いつかない。つまりそう、何の取り柄もない人間ということ。これはこれで得してるのかも知れないけれど、本人は結構大変だったりする。

突出したものがないのだけど、できないこともそんなにない。普通に生きていく分には困らない。だけど、個性というものがない。

私はとりあえずいつも、マイペースだって言っているけれど、本当は特徴がないのが特徴、なんて思っている。それは空気みたいで、誰の間もふわふわと擦り抜ける。

だから私は、スパイとかに向いてるんじゃないかと思ったりもした。これがなんと顔にも特徴がないものだから、人に覚えられない。これはスパイとしては素晴らしい才能だと思う。

そして、小心者。スパイは自分の命を守りつつ、自分の職務を全うしなければならないから、私くらい石橋を叩いて渡る人の方がきっといい。

実は、小心者には度胸がないと思ったら大間違いだ。小心な人間ほど、大半が切羽詰ると度胸が据わる。パニックのままになるかと思いきや、性格が変わるのだ。それも如実に。

私は以前、別人になったと言われた経験がある。突然いつもぼけーっとしてる人が、ちゃきちゃきになるのだ。それはびっくりするだろう。

そんな時は自分でも、ちょっと私おかしいなと思っていたりする。それでもその時は必死だから、深く考えない。その突然現れたちゃきちゃき人格と共に努力する。

結果はそこそこ。いや、いつもの倍はすごいことにしておこうかな。

.....こんなことを考えながらもスパイにはなれない。そんなことは分かってる。何故ならまず、なり方が分からない。そして、日本語以外は完全に不自由。ハローとグッバイで済むならいいけれど。

そんなわけで、私はやっぱり特徴がないだけの人間だというところに戻ってくる。嫌われたことはあまりない。でも、好かれたこともない。

これって自慢することなのだろうか？ 自分でも時々悩む。

「あれ、ヤマダさん？ 久しぶりですね。いらっしゃいませ」

私と比べて目の前にいる人は、余りあるほど好かれていそうだと思う。私が「スマイル」の常連になってまだ一週間しか経っていないけれど、この人を訪ねてくる人が絶えないことには気づいていた。もちろん、私も含めて。

「ツギヒトさんってすごいですね。みんなツギヒトさんに会いに来てるみたい」

「実際そうなんだろうよ。天性の性格ってやつだな、アレは」

「あ、だけど私は、店長さんの出してくれるアイスティーも店長さん自身も、目当てにして来てますからね」

「……そんなこと言っても何も出ねえぞ」

カウンターの中を動き回りながらも私の方を見て話してくれていた店長さんが、私から顔を背けてツギヒトさんにアイスコーヒーの載ったお盆を渡している。

照れ屋の店長さんは、こうして分かりやすい動作で照れ隠しをするのだ。それは最初に出会った日から変わらないのだけど、そのレパートリーが増えれば増えるほど、私はこの店長さんが益々好きになった。

私の言葉を受け止めてくれている。そのことが、店長さんの表情を見ているだけでちゃんと分かる。流しているだけの答えとは違った嬉しさがあるのだ。

「あ、そうだ。先日お借りした本、今日持ってきました。とても面白かったです」

「そうか。そりゃあよかった。あの作家が好きなお嬢なら、この作家も合うだろうと思ったんだが正解だったな」

「はい、もう。あの主人公の友だちがすごく好きで、後半は沢山出てきて嬉しかったですね」

「ああ、あの優しい子な。俺もあの子は気に入ってた」

私が鞄から出した本を受け取って、店長さんはぱらぱらとページを捲っている。それを逆側から眺めながら、私はそこにあった一つの名前を指差して言った。

「それに対して主人公ですけど……好きになれませんでしたね。あまりに不幸ぶってるというか、友だちを信用してないというか」

「そういうキャラクターの方が女の子には人気があるって聞いたが……外れてるな、お嬢」

「自分よりもはるかに辛い思いをした人の前で、辛さ自慢をするっていうのが信じられないんですよ」

「まあ、不幸ってのは比べられるもんじゃないが……俺は不幸なんだっていうのをあまりに主張されても困るわな」

「この友だちに会えたから、楽しいことも増えたって言ってるのに。どうして友だちを悩ませるようなことを言うんでしょうね」

「――みんながみんな、強いわけじゃないからね」

すっと本のページの隅に人差し指が現れて、私と店長さんは顔を上げてその指の持ち主を見た。ちょっと貸して、といった仕草をした指の持ち主――ツギヒトさんに本は渡され、私から見やすい向きになった本を見合わせた店長さんと一緒に覗き込む。

「この主人公はさ、この友だちが好きだからそんなことが言えるんじゃないかな。好きな人にしか言えないことってあると思うよ。オレもこの本なら読んだことがあるけど、その時はそう思ったけどな」

「好きな人だから心配させたくないって思いませんか」

「好きな人だから隠しごとはできないって思うのかもね」

「うーん。納得できるようなできないような……」

すっと目の前に差し出された本を見つめて、私はしばらく考え込む。そうしている間にツギヒトさんはお客さんに呼ばれ、注文を取るためにその場を離れた。

「今日はお客さんが多いですね。店長さん、お手伝いしましょうか」

「お客に手伝わせるわけにはって言いたいところだが、手伝ってもらえると助かるな。頼めるか？」

「ええと、バイト経験皆無に近いので役に立つかは分かりませんけど。運ぶくらいはできると思いますよ」

店長さんがカウンターで忙しくしながら「９番テーブルな」と言って、お盆に載せた飲み物とオムライスを私に手渡す。それを受け取ると、ツギヒトさんとすれ違うようにテーブルへと向かった。

「あ、手伝ってくれるの？ ありがとう」

笑顔を向けられて自然と私も笑顔になり、注文の品をお客さんの前へと並べる。

「お待たせしました。アイスコーヒーとオムライスです」

どう言っていいのかも分からなかったので、とりあえずそう言ってみる。すると「ありがとう」という言葉が返ってきて嬉しくなった。

「お姉さん。こっち、水貰える？」

「あ、はい。少々お待ちください。.....ツギヒトさん」

「オレが行くから、あれ運んでくれる？」

水を取りに行こうと振り返ると、ツギヒトさんが水滴のついた銀色のポットを持ってこちらへやって来ていた。言われた通りにカウンターの方へと私は戻り、お盆を受け取ってまた違うテーブルへと向かう。

「何だよ。俺らはお姉さんに頼んだんだぜ。オカマの兄さんになんか頼んでねえんだよ」

そんな声が聞こえてきて、私は無意識に振り返っていた。水を私に頼んだ高校生らしい制服姿の少年たちの口から、意地悪な言葉が繰り返し飛び出している。

ツギヒトさんはそれをものともせず、にこにこしたまま水を注いであげていた。慌てて店長さんの方を見遣ると、いつものことだから心配するなと言いたげにひらひらと手を振る。

「.....アレらはな、じゃれに来てんのさ。ツギが大丈夫だって言ってるんで、俺も大目に見てやってる」

カウンターへ小走りで戻った私に、小声で店長さんがそう教えてくれた。

ツギヒトさんを目当てにここへ来ている人たちは、眉を潜めてその様子を見ている。見ているだけなのは、ツギヒトさんが店長さん同様に止めているからなのだろうと思った。

「どうしてあんな意地悪なことが言えるのかな」

ちょっとした瞬間にツギヒトさんが痛そうな顔をしているので、全てを受け止めて微笑んでいるわけではないと分かる。我慢に近いようなその状態に、私まで苦しくなってくる。

「大体、オカマって何ですか.....」

困った顔のままで戻ってきたツギヒトさんに、私は抑揚をつけずに尋ねる。その言い方がおかしかったのか、ツギヒトさんと店長さんがぷっと吹き出した。

「一番気になるのはそこか？ 普通」

「はは.....気になる？ 少なくともオレはオカマではないつもりなんだけどね。オレの話し方ってこんなだからさ。オカマっぽいらしいよ」

「全然オカマっぽくないですよ。柔らかくって好きです。私は」

柔らかい返答だからこそ、あの子たちも甘えてしまうのだろうけれど。そう思ったままを口にしたら、ツギヒトさんは嬉しそうに笑った。

「.....ありがとう」

そう言って窓の外を眺めると、ツギヒトさんは独り言のように呟いた。

「誰からも好かれるなんてことがさ.....無理だってことなんだよね」

自分の中で納得するように、ツギヒトさんは小さく頷いている。何故かその答えにとても満足しているように見えて、不思議に思った。

好かれることに疲れてしまったようなその響きに、私は寂しさを覚える。それは、私もツギヒトさんを好きになってはいけないということに繋がるからだ。要らない、と言われるのに似ている。

「ツギヒトさんは誰からも好かれたくないんですか」

「そんなことはないよ。花ちゃんは？ 好かれたい？」

「無理だっていうのがまず本音ですけど。それを置いておいて答えるとしたら.....好かれたくないです。私は何も返せませんから。役立たずだし、駄目人間だし。だけどやっぱり、常に与えられた分だけ返したいと思うんです。それで、返せなくて困る」

俯いてそう答えると、返事が返ってこなくて不安になった。私が焦って顔を上げると、ツギヒトさんは瞠目して私を見ていた。

「お前ら、似たもん同士だな」

店長さんが笑って、私たち二人の頭をくしゃくしゃと撫でた。私は意味が分からなくて、店長さんとツギヒトさんの顔を目で行き来する。すると、ツギヒトさんが頭を振った。

「全然似てないですよ。少なくともオレは、こんな風に説明できないですから」

ツギヒトさんはお盆を持ってカウンターの中へ入っていく。その時また、高校生の一団からツギヒトさんに声がかかった。私が代わりに行こうとすると、それを制止されてツ

ギヒトさんがカウンターから出て行く。

「あのな」

高校生の方を向いていた私たちに、店長さんが声をかけた。二人で振り返ると、店長さんはにやっと笑ってこう言った。

「お前らにこれだけは言っとくぞ。恵まれてるってことはな、悪いことじゃない」

机に向かって日記を開き、私は今日のことを思い出していた。

どういう意味で店長さんは「恵まれてる」という言葉を使ったのだろう。そんなことが気になった。正直私は、恵まれている、と思ったことが一度もない。

貧乏とまではいかないけれど、裕福とは言えない。そんな家に私は生まれた。

別にそれを苦にしたことはない。それが当たり前というのは、何処へ行っても当たり前なのだ。例えば、突然今からヨーロッパの国に放り出されたとしても、私が日本人として培ってきた二十三年は消えない。どんなに馴染めたとしても、時折納豆が食べたくなると思う。そういうことなのだ。

恵まれているというイメージは、私の中でお金持ちに繋がる。もしくは素晴らしい人との出会いに恵まれた人、というところだろうか。後者だけで考えるとするならば、確かに私は恵まれている部類に入るのかも知れない。

私には自慢できる友だちが沢山いる。それはもう、私には勿体ないくらいの人たちだ。

高校時代、私はソフトテニス部に所属していた。そこで見つけた仲間は本当に素敵な人たちばかりで、勇気を出して入ってよかったと今でも思う。

優しい仲間だった。本当に心からそう思える人たちだった。

一番思い出に残っているのは、私が練習試合の途中で熱を出した時のことだ。部室で薬

を飲んで横になっていた私に、仲間たちが入れ違いに入ってきては自分たちの上着をかけてくれた。真冬だったにもかかわらず、私の背中には何重にもジャージが積み上げられていて、その下でこっそり泣いたのを覚えている。

私が悪性のウィルスに倒れた時も、仲間たちは総出で学校の公衆電話から励ましの電話をくれた。恥ずかしくて、どう答えればいいのか分からなくて慌てて相槌を打ちながら、漫画のようなその演出にやっぱり私はひっそり泣いた。

色々な問題もあったし、辞めたいと思ったこともかなりあったけれど、やっぱり最後までそこにい続けたのは彼女たちのおかげだと思う。大好きで大好きで、いつも笑っていた自分をいつまでも忘れることはない。

恵まれていたのだろうか、私は。

その頃の私は「大好き」ばかりが先行していて、そんな風に考えることなどなかった。

意地悪を言われても、からかいのネタに使われても、みんなが好きだったから嬉しかった。みんなの口の悪さはよく知っていたから、何を言われても平気だった。

たまに、泣いてしまうこともあったけれど、みんなは私のことを分かって慰めてくれた。「泣き虫は嫌いだ」とよく言っていたのに、私が泣くのは別だと言ってくれた。

本当はとても優しいのに、いつもはそれを表に出さないみんなが好きだった。

だからこそ、何も返せない自分が嫌いで仕方がなかった。

恵まれていることは、悪いことではない。店長さんの言う通り、そうなのだろう。だけど、それに甘んじて何も返せずにいることは悪いことではないだろうか。

返す力のない私は、結局駄目人間なのだ。

ツギヒトさんのことを私は心の中で、余りあるほど好かれていそうな人だと評した。つまり、私と似た悩みを持っているとするならば私以上にその数は多く、苦しみも大きい

のだろう。人に好かれることは、難しい。

あれから、ツギヒトさんは相変わらず高校生に酷いことを言われていたし、私は何もできずに店長さんの近くにいたけれど。これから、私にできることはあるだろうか。

どちらにしろ。できると信じなければ、やる気がないのと同じだ。だから私は、ひたすらに何かができると信じ、常に全力で戦わなければいけないのだと思う。

手を握り締めてそう自分に誓った時、リビングの方から父親の声が聞こえた。その少し大きな声にびくっとすると共に、苛立ちと恐怖に似て、どちらでもない感覚が胸を占める。

今度こそは、あきらめたくない。弱い自分など、何人も要らないのだから。

「――花、ちょっと」

聞こえない振りをしようか、いつも通りそんなことを考えて、だけど私は椅子から立ち上がった。机の上に広がった日記には、ここ何日かの楽しい記憶が短く綴られている。

人生楽ありゃ苦もあるさ。まさにその通り。そしてそれが同じ分だけあるとすれば、恵まれている分だけ苦労もあるのだろう。

「何？」

声のトーンは上がらない。「スマイル」にいる時とは別人のような低い声。

だけど、これが今の私の精一杯なのだ。それを分かってもらえるといいなと思いつつ、胃を押さえながら私はリビングへと向かった。

日々募るばかりの吐き気は、いつまでも私の胸を渦巻いている。

ここはマンションだというのに、どうしてこんなにも虫の声が止まないのだろう。耳鳴りにも似た音が、私にはずっとずっと聞こえたままだ。

「そういえば。ツギヒトさんはこの近くに住んでるんですか？」

いつもなら混んでいる時間帯だというのに、今日は何故か人がまばらにしかいない。忙しくしているはずのツギヒトさんが、のんびりとカウンター席に座っているほどだ。

だけど、こうしてゆっくりと話すことができるのでちょっと得した気にもなる。店長さんには申し訳ないけれど。

「ううん。実は、ここに住み込みでお世話になってるんだ」

「住み込みだったんですか.....そっか、だからなんですね。お二人が親子みたいにとても仲良しなのは」

私の声にカウンターの奥の方で備品を整理していた店長さんが、手にしていたコーヒーフィルターの箱を落として照れくさそうに拾っている。思わずその姿に笑ってしまって、つられるように隣でツギヒトさんも笑い出した。

壁の少年であるツギヒトさんは恐らく、私と地元は同じはずだ。知らない土地で店長さんのような人に出会って、ツギヒトさんは楽しそうにお店を手伝っている。そんな偶然がとても羨ましくなる。

私は父の仕事の都合で大学を卒業するとともに、愛知県へ引越しをした。九州の大学に通っていたので、見知らぬ土地に飛び込むことに不安はなかった。三重県はすぐ隣りだ。いつでも帰れると思う反面、迎えてくれる人もいないのだからと構いもしなかった。

どうしてこんなにも私は極端なのだろうと、時々思う。大学に入ってからも何度か高校時代の友達と会うことはあったのだ。それをなくしてしまったのは、私自身だった。

高校時代の友達のことは本当に心から、大好きだった。だからこそ、遠くへ行こうと思った。九州の大学を選んだのもそんな理由だ。

近くにいたとしても、大学が違えば今までのようにいつも一緒にはいられないことが分かっていた。新しい友達がお互いに増えていき、近くにいても会わなくなってしまうことが簡単に想像できた。それならば。遠くに行ってしまえばいいと思った。

九州に行ってしまった友達。ちょっと特別で思い出してもらえるかも知れない。たとえ、忘れられてしまったとしてもそれは近くにいないからだ。そう言い訳できる。

今考えてみると、私は友達が自分の知らない何かに変わってしまうのが怖かったのだと思う。連絡をくれる友達との関係を、私は少しほっとしながら閉ざした。

大切なものは少なければ少ないほうがいい。大事にする時間を濃く持てるから。

だけど、二人を目の前にして感じることが、羨ましいなあ、なのだから複雑だ。

「馬鹿息子が外で働くようになっちまってな。さすがに一人でこの店をやってくのも大変だって思ってた時に、馬鹿息子が馬鹿な理由でツギを連れてきたんだよ」

「店長の息子さん――アキトさんっていってオレはアキさんって呼んでるんだけど、そのアキさんが何の当てもなくて困ってたオレを拾ってくれたんだ」

「それは違うだろ、ツギ。ありゃあ、犯罪だったぞ」

「犯罪って.....自転車が壊れただけじゃないですか」

「撥ねちまったことには変わりねえだろ」

「オレは無傷でしたよ」

「ええと.....事故、ですか？」

二人の押し問答が始まりそうな気がしたのでさり気なく口を出してみると、ばつが悪そうな顔をした店長さんが頷いた。

「まあ、そういうことだ。うちの馬鹿息子がこいつを撥ねちまって、それ以来の付き合い

なんだよ。そうだなあ.....もう九年なるか」

カレンダーの西暦を眺めて、店長さんが指折り言う。

九年。その年月が自分の中でも、意味のあるものとして流れていたことを思い出した。

その年月は、あの壁に出会ってから過ごしてきた日々の重なった束だ。

あの絵が描かれてから、ツギヒトさんはここへやって来たのか。あの絵が描かれる前に、ツギヒトさんはここにいたのか。九年という数字はぴったり合わさるのに、絵とツギヒトさんの関係は曖昧な間を彷徨っている。

「そう考えると、長くお邪魔し過ぎてますね」

「アレを警察に突き出さずにいてくれただけで感謝してるんだ。そんなこと気にされる筋合いはねえよ」

お嬢がいると普段話さないようなことまで零しちまうなあ、と店長さんがぼやいて、私に微笑んだ。ツギヒトさんは苦笑いと申し訳なさそうな顔をごちゃ混ぜにして、店長さんと私を見ている。

ああ、この店にいる人たちの関係がよく分かるなあ、と思った。

ずっとここにいて迷惑なんじゃないかと不安に思いながら、それでもここを離れられずに暮らしているツギヒトさんと。そんな不安を感じ取りながらも、自分からは何かを言ってあげられない店長さんと。

何だかどちらもに、負い目があるような。不思議な関係。

本当はお互いに親しみも家族のような気安さも生まれているのだろうけれど、本当の家族ではないから言えないこともある。それは、私が友だちに対して遠慮してしまうのとすごく似ている気がして、すんなりと飲み込めた。

踏み出した瞬間に泥沼に足を取られないか。そんなことが気になって中に入れない。

自分が思うほど、その人は自分のことを好きではないかも知れない。自分を抑えている私は好きでも、本当の私は好きになってもらえないかも知れない。だけど、嘘をついたまま一緒に過ごすことはできないから、何処かであきらめて曝け出すしかないのだと思う。

だけど、私にはそれができない。一生、自分のことは自分の中に隠したままでいたい。

隠したまま誰かと生きるわけにはいかないから、私はいつも他人と付かず離れずの距離を保ち続ける。

可もなく不可もなく。私の顔と同じ。印象に残らない顔。印象に残らない性格。だからこそ私は今まで、安穏として生きてこられたのだと知っている。特徴はそのまま、何かを生み出す効果を持っているから。何も生み出さない私という存在は、早々害にはならない。

もちろん、何かの得を生み出すこともないけれど。

何かをあげたくても、何も生み出せない私は無だけを常に握り締めている。「無でよければあげますよ」なんて言って、誰が受け取ってくれるだろう。

「でもまあ。息子からいきなり電話がかかってきて、粗大ゴミの日はいつだって訊かれるとは思わなかったがな」

「……粗大ゴミの日、ですか？」

「こいつがな、壊れた自転車を目の前にして困ってたらしいんだ。自分が撥ねられたことも忘れてるみたいにな。それで、近づいてった馬鹿息子に訊いたらしいんだよ」

「ああ、自転車をそこへ放っておくのが心苦しかったんですね。そうですよね、最近は自転車もお金を払わないと引き取ってもらえないですもんね」

合点がいって私がそう頷くと店長さんは笑い、ツギヒトさんは「やっぱり花ちゃんは分かってくれると思った」と嬉しそうに言った。

「でも本当は、直らないかなあとも思ってたけどね」

「分かります！ 私、自転車に名前つけてましたし、相棒だと思ってましたから」

「うん、分かる。オレも自転車でかなりの距離走ってたから」

「それを、うちの馬鹿息子が壊したと」

茶化すような響きで店長さんがそう言うと、ツギヒトさんはひどく困った顔をして「そうなんですけど」とか「でも」とかを繰り返していた。私と見合わせて笑った店長さんは、「俺が謝るところで困ってんじゃねえ」といつものにやり笑いをした。

カラン、カラン。

「「いらっしゃいませ」」

二人はドアベルの音とともにいつもの仕事へと戻っていく。ふとこんな時に、私は自分がここへ来て長々と邪魔をしているような気がした。そう、邪魔にならないはずがないのだ。仕事の合間を縫っては、二人ともが私の相手をしようとしてくれている。

そう考えながらも、二人はサービス業のプロだからと思う。少し変わった出会い方をしたものの、もちろん私は客の一人なのだ。お店へやってくれば相手をするのは当たり前だと思っているに違いない。だけど、落としていく金額が少ない、お店としてはあまり有難くない客であるのも現実だ。

無職なのだからなおさらだ。お金を取ろうとしても取れないことも知っている。

新しいお客の方へ水を運びながら、ツギヒトさんが私に笑いかけてくれる。

きっと、美容院で好きなスタイリストさんができるような、好みの服が入荷したら連絡をくれるショップ店員さんのような、そういう友好関係もあるのだと思う。残念ながら——そう残念でもない気もするけれど、どちらも私にはない。そんな利害関係を乗り越えるには、個人の力が大きいのだろう。

友達を切ってしまった私には、そんな力なんてそもそも持ち合わせていない気がした。だけどそんな風に思うのは、私が誰よりも何よりも小心者だからなのだと思う。

事故という不を、新しい出会いという良に変えてしまう力は、簡単な発想転換かも知れないけれど。やっぱりそこには、その人たちの溢れる人柄にもあるのだろう。

また、いつもの言い訳だ。

今日もまた眠れなくて、貰った安定剤を飲んだ。これでも眠れないことが多いけれど、だからといって睡眠薬は翌日に響くので飲みたくない。

眠れないのは昔から。小さい頃はよく、口で息をするか鼻で息をするかで悩んで眠れなかった。正直、馬鹿だと思う。

成長して色々なことを考えるようになったら、今度は考え過ぎで眠れなくなった。何も考えなければいいといつも言われるけれど、それができないのだからずっとそのまま。

ああ、今日もまだ頭が動いている。

気づけばもう一時間が経っていた。薬の効き目は三十分過ぎたあたりから出るのに。もう今日も駄目かも知れない。

ぼんやりして寝返りを繰り返し打っていると、二時間が経っていた。

眠らなきゃいけないのに。どうして眠れないのだろう？

一日が二十四時間以上あったら、なんて思うことがあった。今もそんな風に思う人が、沢山いるんだろうと思う。

だけど現在の私は、そうは思わない。

一晩中眠れない日。次の日がやってきても、日にちが変わったとは思えなくて、ずっと同じ一日を生きている気がするから。

もう今日が終わらないかな。明日にならないかな。

そんなことを思っている。一日はきっと、二十四時間だから丁度いい。

私は今、何もしていない。働いていなければ、勉強しているわけでもない。

心苦しさを紛らわそうと漫画を買っては、またヘコむ。漫画を読んでいる駄目人間の姿を想像するだけで泣けてくる。だけど、ぼーっとしているのに耐えられないから読む。昔の本を出してきて読む。読んでいる間だけは別世界だから。

時々、本の内容が自分とリンクしていて胃が痛くなることもあるけれど。

働こうと思ってバイトに応募する。面接に行ってみれば駄目人間の私を呆れた目で見ているおじさんたちがいる。

話している内にやっぱり就職すべきかなって思う。だから、このバイトに受かるわけにはいかないなあ、と適当になる。もちろん落ちる。そしてまた、ヘコむ。

就職っていうのはそう簡単にできるものではなくて、気づけばひと月ふた月...落ちまくっていたりする。

こうなってくると、バイトしておけばよかったのでは？ と疑問が湧く。

お母さんは自由にしろと言ってくれているけれど、父親は頭が固い。自分は結構おかしな人間のくせに、人には常識を望む。おかしい。

常識的な人間になりたいと思うけれど、何故か気づくと逆に走っていることに気づく。

いつも、だから、思う。

もうできれば両親にはあきらめてもらいたい。理想の子供にはなれそうにない。貴方たち好みの人間にもなれそうにない。子供だからって遠慮しなくていい。嫌いなら嫌いって言ってくれればいい。

どうにか軌道修正をして、いい形に持っていこうとしたけれど、やっぱりどうしてかぐるぐる回って逆向きにしか進まなかった。

努力しているけれど。どうにもならないらしい。基盤が違っているのだ、もう。

そこで不思議なことに気づく。その基盤を作ったのは、普通に考えれば両親なのでは？

どうしてこうなったのだろうか。私どころか、両親にも分からないのだろう。

だとするとその原因は、時代？ 友人？ 残念ながら私は平々凡々と生きてきた。変人になる要素なんてこれっぽっちもなかったと思う。そう思う時点で、もう何処かおかしくなってるのかな。きっと。いやいや、特徴がないのだから変人というのもおかしい。

それとも。特徴がないイコール変人という式も成り立つのかな？

そういうわけで、家に入り浸っては漫画を読む日々が続く。引きこもりではない。何故なら、漫画を買いに外には出る。

自慢することじゃない？ そうかも知れない。誰に話しかけてるんだろう。

ネットもそこそこ好きだ。夜中に動いているのを見ると、こんな時間でも起きている人がいるのだとちょっと励まされる。

テレビも好きだ。お笑い番組を見て笑っている自分を見て、荒んでいるなと思うけれど。面白くなくても笑いが込み上げてきて、笑っている自分に嫌気がする。でも笑う。

なんて寂しいループだろうと思う。それでもまた、お笑い番組をもちろん見る。

テレビを見ていたり、ネットしていたり、漫画を読んでいたり、そんな時に限って人の

声がよく聞こえたりする。特に自分の話をしている時の両親の声は、どんなに小さくても届く。そして私は、テレビの音量を小さくしてでもその声を聞くのだ。

不安で仕方がない。何を言われているのかが怖くて、でも聞かずにはいられない。直接言われるよりマシかなと思って聞き耳を立ててみる。

私自身がいつも思っていることを、また父親がお母さんに言う。そして、胃が痛くなる。聞かなければいいのに、今日もまたそれを聞く。

最近では両親に頼もうかとさえ思っている。私の話は私のいないところではしないでほしい。それよりもむしろ、私の話はしないでほしい。

心配かも知れないけれど、どうにかする気はある。働きたいと思っている――だけど何故か落ちるの。失敗ばかりばかりなの。お願いだから。私のことを心配したり、考えたりしないで。

家を出ようと思ったことは何度もあるけれど、お母さんが仕事が見つかるまではいてくれと言う。離れていて、お金の心配もあって、それには耐えられないそうだ。

そんな言葉を受け、私は家にいる。お母さんは言い訳を私にくれたのかも知れない。私は仕方なく家にいる。そういうことだ。

お母さんはそう言う。だけど、父親はそうはいかない。

お母さんと父親。どっちをとるべきか悩んで、楽な方を選んできた。

実は私自身、お金がないわけではない。祖父から貰ったお金もあるし、コツコツ貯めてきたお年玉もある。

だから、家賃と食費は出すつもりでいる。今はお母さんが一年は見逃すと言うので甘えているけれど、父親があまりにうるさいようならお金を払うつもりでいる。

もちろん、私が悪いと知っている。だけど、今は少しでも気分を軽くしたい。積もり積もったこの重い何かが、私の胃を痛めつけている。

私はここ何ヶ月でめっきり痩せた。元々小心者の私だ。いざという時以外はもちろんヘタレなのだ。

働ければいいと思っている。だけど、何処も働かせてくれない。私に欠点があるのだろうと思う。だけど、それが分からない。

甘えるんじゃない、と自分が叫ぶ。私を甘やかしてはいけないと人にも言う。だけど、優しい人が周りに沢山いる。私は私のままで大丈夫だと言ってくれる。

.....何が足りないのかな。

そう毎日思うけれど、隙間だらけの私の器は何処から埋めればいいのか分からない。片っ端から埋めていくのに、半周している間に逆側が壊れる。また直しにいけば、その間に埋めた場所から記憶が溢れる。ある意味恐怖だ。

型通りにと思ってマニュアルを見るけれど、これでは最初はよくてもその内本性が知られてしまうはずなのだ。後々困らせるくらいなら、最初っから直球が――そうしてきて面接に落ちる。

働くためには嘘も方便ということなのだろうか。みんなそうやってやってきたのだろう。なのにどうして、私にはそれができないのだろう。今度一回試してみようと思う。だけど、それで受かったらちょっとまたヘコむかも知れない。

そういうわけで私は、完全な無職だ。フリーターなんて良いものでもない。食う寝る遊ぶの代名詞。

私に比べればみんな偉い。本屋で働いているお姉さんも、スーパーで働いているおばさんも、たぷたぷお腹を揺らしながら歩くスーツ姿のおじさんも、働いている人はみんな

素晴らしい。私はいつも尊敬の眼差しで見つめる。

.....私も、ああなりたい。

やっぱり自分を追いつめなければならない。だけどその時の私が、死にたいほど追いつめられていたらどうしよう。やっぱり余裕があるうちに、何とかしなくてはと思う。

私は引っ張りあげられるのを待っているのではない。登りたいのだ。そしてまた、落ちまくる日々が始まる。

とりあえず、何かしていないと落ち着かない。また漫画を買う。

自分の未来を想像してみるけれど.....私には無理だ。だけど多分、結構楽しくやっていると信じている。そんな楽しげな私のためにも、私は今、職を探す。

何もしてこなかった真っ白な人生。だけど、財産は沢山ある。

誰も想像できないほどの楽しい過去。だけど、戻りたいと思ったことはない。それはそれで完成してるから。今の私が触れていいものではない。

あの頃はよかったなんてことも思わない。今だって充分に楽しい。

これからもきっと楽しい。胃が痛くても、嬉しいことはそこそこある。だから私は、また楽しい日々をノイローゼ気味に生きる。

そのうちにもしかしたら、根性もついてくるかも知れない。小心者の看板を下ろしていいっていうことになるかも知れない。

まだまだ予定は未定。だけど、無きにしも非ずと望む。高校受験に合格して、色んな人に感謝したように。できたように。

私はいつかまた、沢山の人に感謝する。絶対に。

私は光の差す窓を見つめ、少しだけ泣いた。

昼食の時間に朝食を食べ終わり、外へ出て行く準備をした頃にはもう午後三時を過ぎていた。眠れない日は眠り始めるのが朝の七時だったりするので、それから眠るとどうしても昼を過ぎてからしか行動ができない。

昼まで眠ってしまえばもちろん夜は眠れなくなる。切なくなるループだった。

こんな時間からスマイルへ顔を出すのも気が引けて、だけど何処へも行く宛てがなく、それでも家の中に一日中いるのはいけないと思い、玄関のドアを押し出る。

一階まで階段で駆け下りると、エレベーター前の郵便ポストから封筒が少し飛び出していていることに気付いた。覗き込むと自分の名前がぼんやりとそこにあるように見えたので、何となく、他の人に見られる前に自分で取らなければと思う。

くるくると回す鍵を開けて中から取り出した細長い封筒の表側には、私の名前が書かれていた。裏を向けると、先日履歴書を郵送した会社の四角いハンコが押されている。

開けずに捨ててしまおうかと一瞬考えて、太陽に封筒をかざして透かしてみようとしたけれど中身は見えなかった。触れた場所には、小さな写真のデコボコを感じた。

また、駄目だったんだ。入っているものは間違いない、私の送った履歴書だ。履歴書を見ただけで、私のことを駄目だと判断したのだと分かった。恐らくやんわりとしたお断りの言葉が書かれた紙が同封されているはずだ。

これはこれで持ち帰ろう。履歴書が再利用できるかも知れないし、写真だけでも次回に回さなければもったいない。そういえば、この履歴書の写真はもう五ヶ月くらい前の写真だ。三ヶ月前までの写真を使うようにとよく書かれているけれど、そんな数ヶ月で顔が変わるものかと思うのでそのまま使っている。髪形さえ、変えなければいいのだ。

それとも、せめて髪型だけでも変化した方がいいのだろうか？ 何の変哲もなく、何の変化もない日常から抜け出すには、そのくらいのことをした方がまだ気分が変わってくる

のかも知れない。駄目人間だって、ものを考えたりはするのだ。

駄目人間です。構わないでください。

そんな文言を載せた画用紙を、首からぶら下げて歩きたい気分だ。案外逆に構われてしまうかも知れないけれど。駄目人間ならどう扱ってもいいと襲われてしまったり、とてもとてもやさしい人に出会って声をかけてもらえたり。だけど多分。無視されるのが現実なのだろうと思う。駄目人間に声をかけてくれる人なんていないのだ。多分。家族以外は。

「――花ちゃん？ やっぱり、花ちゃんだ」

声をかけられて視線を地面から声のする方へ向けると、自転車にまたがってにこにこしている瞳と目が合った。この人はもしかすると、いやこの人ならば、駄目人間の看板を持った人であろうと構わず声をかけてくれるかも知れないなと思う。

知れない、知れない.....私は想像の域を超えないことばかり考えている。

「ツギヒトさんだ。おつかいですか？」

「そう。店長が今日はお客さんもまばらだから買い出しに行ってこいって」

「珍しいですね。私、店長さんがツギヒトさんを買い出しに出すのって見たことなかったです。あるんですね、そんなことも」

「うん。ごくたまに、ね」

意味ありげな笑顔に、少し期待にも近い想像がよぎった。駄目人間で勇気もなくてどうしようもない私なのに、世界は何だかとてもやさしいと感じる時がある。

「花ちゃん、今から一緒にスマイルに行かない？」

自転車のカゴにもツギヒトさんの手にも荷物らしいものはない。買い物はもう終わったんですか？ という質問を飲み込んで、私は頷いた。

「後ろに乗る？」

「二人乗りが見つかったら捕まっちゃいますよ。走ります」

手にしていたカバンだけをツギヒトさんに預けて、自転車の先を先導するように走り出した。短距離も長距離もそれなりに好きだったことをふと思い出す。

中学生の頃、走るのは得意だったけれど運動神経は発達していないと思い込んでいた。どんなにいいタイムで走っても、成績はずっと三年間「３」のままだったからだ。

高校に入って直ぐのことだった。違う中学出身の友人に運動神経がいいね、と褒められた。そこでやっと、初めて気がついた。中学校時代の女性の体育教師に嫌われていた。だから、ずっと「３」だったのだと。

もちろん、嫌われていると考えられる理由は幾つかある。私自身、もう思い出したくないような記憶として残っている。私も好意を持つことはできなかった。

それとも、他の理由があったのだろうか。そう別の方向から考えてみるけれど、長距離ばかりの三学期の成績も「３」だった。駅伝選手に選ばれた友人よりも早く走ることができたにもかかわらず。それでも変わらなかったのだから、やはり嫌われていたからとしか考えられない。そういう風にしか考えられなくなった自分を哀れんだ方がいいのかも知れないけれど。

嫌い、だから「３」なのか。どうでもいいから、「３」なのか。普通だから「３」なのか。

好きだから特別。好きだからやさしくする。好きだから我慢できる。

「ツギヒトさんは、人の考えてることが、分かるような気がすること、ないですか？」

弾む息の中、隣りで自転車をゆっくり漕いでいるツギヒトさんを見た。

「そう思ってた頃もあるよ。……今は、きっと分かった気になってるだけだったんだろ

うなって思うけど。どうして？」

恐らく私が息を整えられるようにとの配慮で、ツギヒトさんが自転車から降りて立ち止まる。そこから、自転車を押すようにして歩き出した。

「思い出したんですけど.....私、その人の言いたいことを先走って口に出してしまったり、まとめてしまったりして失敗したことが何度かあるんです。どうして先に言っちゃうの？ なんて怒られるんですよね。お笑いでいえばオチを先に言われちゃうようなものですよね。だけど、いいことも悪いことも言われる前から大体想像できてしまうんです。それが、顔に出てたんだと思います。私、先生に好かれることが少なかったんです.....小馬鹿にされてると思ったんでしょうね.....苛々する表情がいつも先生には浮かんでました」

「先生みんながそうだったの？」

「ほとんどです。.....あ、だけど、部活の顧問の先生だけは別です。部活だけは本当に大好きだったんですよ。友達も大好きだった。ソフトテニスをしてたんですけど、中学も高校も顧問の先生には可愛がってもらいました」

「部活が好きだっていうのが素直に見えたんだろうね」

確かに可愛がってもらっていたけれど、それが原因で贔屓だと友達に言われ傷ついたこともあった。部活も、友達も、顧問の先生も、本当に大好きだった。だから、友達はやさしいけれど口が悪いから気にしないようにと我慢していた。我慢できていた。

嫌われていても好かれていても、何かしら問題が浮上してくるなんて悲しい。

「想像すると、次に何をすればいいか分かるんです。この人はこうしてほしいんだな、とか。そうしていれば敵を作ることはなかったんですけど.....嘘っぽいですよね。分かってもできないことだってありますし」

「難しいね。うまく説明できないけど.....花ちゃんは相手のしてほしいことを求めて想像してるよね。もちろん、嫌われたくないからっていう理由が先にあって。でもそのもっと前には、その人を好きだっていう思いがあるんじゃないかな。それが分かる人に

はきっと、花ちゃんの一生懸命さが伝わったんだよ。.....伝わらないからってより以上に頑張って、花ちゃんが辛い思いをするのも違うと思う」

直ぐそこに近づいたスマイルの窓から、店長さんの外を窺う様子が見える。視線が合うといつものように恥ずかしがって奥に引っ込んでしまった。

自転車のカゴからカバンを受け取って、小走りでお店へと向かう。

思い浮かんだ想像を一度は吹き消してしまったけれど、今もう一度膨らませてみようと思う。思い違いだとしても、自意識過剰かも知れないけれど、時々は自分に都合のいいように想像してみたって罰は当たらない。と、思いたい。

いつもより遅い時間に出かけた私。何も買っていないように見えるツギヒトさん。誰かを待っているような店長さん。

ドアを開けると、私の大好きなアイスティーが用意されていた。笑顔の店長さんはお勧めの本をまた幾つか貸してくれるつもりなのだろう。カウンターにはアイスティーと一緒に並んでいる文庫本が何冊か。

「待ってたぞ、お嬢」

二人は私を待っていてくれたのではないかという、想像。いつもの時間になっても現れない私を、ツギヒトさんは迎えに来てくれたのではないかという、希望。もしかしたら、他のお客さんよりも特別扱いをしてもらえているのかも知れないなんて、間違っていたらとても恥ずかしくて打ちのめされてしまうような気もするけれど、そんな想像をさせてくれるやさしさが嬉しい。

ツギヒトさんが現れなければ、ここへ来るつもりはなかったのだから。

「花ちゃん、封筒落としたよ」

「あ、ありがとうございます」

自転車を止めて入ってきたツギヒトさんの手にあの封筒があって、暗い思いが少し巡っ

たけれど取り込まれたりはしなかった。就職にはまた失敗してしまったけれど、とても素晴らしい人たちとの出会いと相殺――相殺どころか出会いの方が勝つに決まっている。

だから、私はやっぱり運がいい。駄目人間なのに、幸運なのだ。

「何だ、それ」

「履歴書です。就職活動で履歴書送っただけなんですけどね。それが、履歴書だけで落とされちゃって。送り返されてきたんですけど.....これ、次に再利用しようと思って」

郵便ポストの前では開けられなかった封を切り、中から丁重なお断りの手紙とちょっと情けない顔をした写真が貼られた履歴書を取り出す。すると、「見せてみろ」と店長さんが楽しそうに履歴書を私の手から引き抜いた。ツギヒトさんも面白がるようにそれを覗き込んでいる。

「――よし。お嬢、うちでアルバイトとして採用してやろう」

「いいですね。女の子がいた方が華があるし」

「へ？」

言われたことの意味が分かるような分からないような、頭の中が真っ白とはこういうことを言うんだろうなと思わず考える。

「いやな.....前々から提案しようとは思ってたんだよ。どうせ毎日来てもらえるんなら、うちで働いてもらえないかってな。そしたら、いいところにお嬢の履歴書がやってきたってわけだ」

「え、あの.....」

「ツギがお嬢に声をかけたのも、何かの縁だよなって話をしててな。お嬢、ここでバイトしながら就職活動するってのはどうだ？ もちろん、見つかるまでいい」

あまりに唐突過ぎて、何をはじめに考えればいいのかが分からなかった。だけど、働き

たいとこぼしていた私の願いを叶えてくれようとしている。それだけは、深く理解していた。

こんな、こんな素敵な話はあるだろうか、と思う。とても好きな人たちと一緒に働けるのだ。いきなり知らない人ばかりの世界に飛び込んで、不安に駆られるような想像はここにはない。

だけど、好きな人たちとアルバイトと店の人間という関係で付き合いはじめて、嫌われてしまったらどうしようとも思う。お客だという最強のバリアがなくなってしまうのだから。

断ってしまったら、ここへは来られなくなるだろう。そんな思いもある。

「やっぱり、不安かな？」

不安だった。働きたいとは言っているものの、未知のものは怖い。いざ働ける場所を得たとなると、またそこで怖気づくのが私の悪いところだ。いくら未知だといっても、こんなにいい環境で救われるようなところもない。

いい加減、頑張ってるけど結果にならないという嘘っぽい言い訳をやめなければ。

就職先が見つからないんじゃない。本当は、受からない就職先ばかりを私自身が選んでいたのだ。選り好みして、落ちて、受からないから働けないなんて呆れた言い分を押し通してきただけだ。

分かっているけれど、見ないようにしなければ辛くて仕方がなかった。

「あの」

戦いに出ずに蔑まれる我慢と、戦いに出て戦わなくてはならない我慢と。ここにいる二人が背中を押してくれているのだから、私は戦いに出なくてはならない。

「よろしく、お願いします」

私の決死の覚悟の言葉に、二人は不思議と崩れるように笑った。

どうしてこんなにも嬉しそうにしてくれるのだろう。どうしてこんな風に応援してくれるのだろう。

どう考えても、この店に二人もバイトは要らないような気がするのだけれど。そんな失礼なことを思い浮かべながら、大好きなアイスティーを一口飲んだ。

「じゃあ、明日からは仲間だね。よろしくね」

手を差し出されて、ツギヒトさんと握手をする。その向こうで店長さんも照れくさそうに手を差し出していて、笑いながらその手を取った。

「ツギ、これで心配して迎えに行くこともなくなるな」

店長さんの言葉にツギヒトさんを見上げると、珍しくよそ見をしてこちらを向いてくれなかった。そそくさとカウンターの奥に消えていくツギヒトさんの後姿を見て、堪えきれずに吹き出して笑う。

「明日からは遅刻しないように頑張ります」

こうして、手を引っ張られなければよちよちとしか歩けない私の時間が、動き出した。

三、意気地なしのサービス

三、意気地なしのサービス

どうしたら、うまく表現できるのかが分からない。

ありがとう、と心から感謝していたとしても照れくさかったり、言葉でどんな風に言えばいいのかといつも悩んでしまう。頑張って表現してみたものは、嘘くさいと無残にも切り捨てられてしまったことがある。頑張るものではないということも、実は知っている。

喜んでくれてるのかな、と不安に思ってリアクションを待っているだろう相手にも申し訳ない気持ちでいっぱいなのだけど、表現が伝わらない。難しい。

五人の男女を目の前にして、パイプ椅子に座っている私は迷路に迷い込んでいた。

店長さんのところで働かせてもらうようになってから、初めての面接だ。午前中だけお休みをもらってこうして高いビルの高い階まで上がってきた。受付の内線の使い方が分からず、近くにいた男性に教えてもらって入った部屋には何人かの女性がいた。

初見でまず思ったことは、みんな私よりもずっと年上だということ。私だけが頼りない風情でうろうろしていた。校正の仕事に興味があったので、印刷会社のアルバイト募集に応募してみたのだけど、場違いだと言われているような気がするのは自分が弱気だからだと思った。ドアの向こうに五人もの人がいるのを目の前にするまでは。

「大学を卒業してから随分経ってるけど、今まで就職活動はしなかったの？」

「三重県から愛知県に家族で引越しをすることになっていたので、その準備で今まで就職活動をほとんどできずにいました」

もちろん事実だけれど、言い訳にしか聞こえない。心の中で自分にツッコミを入れて落ち着こうとして、失敗した。

アルバイトの募集ということだったので甘く見ていた。テレビで見るような、マンツーマンのバイト面接の想像しか持ち合わせていなくて怖気づいた。テレビで見るような、正社員の二次面接のようだ。大きな会社はアルバイトもこんな風に面接するのか、へえ、と他人事のような感想が浮かぶ。

何を訊かれても、自分の答えが言い訳にしか聞こえなかった。

働きたくなくて、働くのが怖くて、今までずるずると引き延ばしていたんです。逃げ切れなくなって、形だけでも働く気がある振りを家族にアピールしているんです。自慢できることなんて何一つありません。仕事をきちんとできる自信もありません。質問されてることに対して、答えを持っていません。答えがありません。

質問に何を答えても、私のそんな声を引き出されているようだった。どんどん自己嫌悪に堕ちていく言い訳の数々に、そこまでして自分を守りたい私にがっかりした。正直に答えているのだけれど、何処か自己防衛をしてしまう自分がいた。

働きたいという思いは確かに、ある。だけど、自信がないのも本当だ。あり得ないと分かっているのに願うのは、楽な簡単な仕事をして沢山お給料がもらえたらいいな、なんて都合のいい弱音に思いを巡らせる。生きているだけで難しいのに、簡単なことなんてある訳がないのに、そんな風に考えるのを止めることはできない。

色々なことを訊かれたのだと思う。気がついたら、どうでもいい人間を見るようにしている人たちと目が合った。人を傷つけることができそうな、刺すような視線だった。

「この仕事は結構怒鳴られたりすることが多いんだけど、男の人に怒鳴られたりして泣いたりしないかな？」

「……そんなことはないと思います」

面接で泣いたりしないかどうかなんて訊くものなのだろうか。確かに泣き虫ではあるけ

れど、大事なところで泣いたりしない。ひどく悔しい思いでいっぱいになった。

それから別室に面接を受けた人たちと一緒に入り、交通費といって千円をもらった。面接に来るだけで交通費がもらえたのは初めてだった。大きな会社というものは何と言うか、親切なようで嫌味だ。そう思った。

たとえば、本当に働きたくて働きたくて仕方がない人がいたとして。その人がそれまで何もしてこなくて、それでもこれから気持ちを切り替えて働きたいと願っていたとして。その時その人は過去には戻れない。だから、高い所から挑戦することはできないのだろうか。低いところから地道に登っていくことしかできないのだろうか。その人に実力があったとしても、中学の時の内申点のように変えられないものは変えられないままで。

そう思う反面、今までずっと努力してきた人たちと公平ではないから仕方ないとも思う。

私の場合は恥ずかしくて、努力もせずに調子に乗って「上から挑戦する」なんてことは決して言えない。実力がないのだから、問題外。

不思議だけれど、それでももしかしたら受かるかもなんて希望も残している。

「そりゃあひどいな。でもまあ、お嬢は年齢より幼く見えるからなあ」

「面接でこんなこと訊かれるんだなあって驚きましたよ」

カウンターの中でカップを洗いながら店長さんに愚痴をこぼすと、豪快な笑い声が返されて心がすっかり晴れた。悲しい思いは、笑い話にするのが一番だ。

ここは言わば、社会見学先のようなものだった。仕事というものが何かということをやさしく教えてくれる場所。

「よっぽど忙しい会社なんだろうね」

「大きな会社なんですよ。だけど、アルバイトのはずなんですけどね」

「最近じゃあ派遣とか契約社員とか、そんなのが流行ってるみたいだからな」

「怒鳴られるくらい仕事をしてもアルバイトなんですよね.....何だか寂しい」

「オレもずっとここにいるから、あんまり深く考えたことはなかったけど。何となく花ちゃんとかオレの世代ってちょっと損してる気がするよね。子供の頃にバブルが崩壊しちゃってその恩恵に与ってもないのに、成人してみたら就職氷河期だなんて」

「子供の頃に少しはいい暮らししてただろ」

「「全然」」

店長さんの横からの発言に、ツギヒトさんと私の否定の声が重なった。ツギヒトさんと私は顔を合わせて照れるように笑い、店長さんはきょとんとしてから笑う。

「裕福じゃない家はずっと変わらないんですよ」

「そうそう。もちろん、バブル崩壊もあんまり影響なかったけどね」

「私が高校生の頃なんか、高校生の犯罪が相次いでたんですよ。それで私たちの年頃の子供がゲームとかの所為でおかしくなったって言われちゃって。いいとこなしです」

窓の外に人の流れが見えはじめ、高校生が下校していく影が過ぎていく。

あの頃の私も、ただ普通の高校生だった。勉強に部活に苦労しながらも楽しさを見出して、友達と笑っていた高校生。テレビが伝えるニュースの中の高校生に共感することなんてなかった。だけど、一まとめの高校生。
カラン、とドアベルが鳴って入ってきたのはいつもの高校生たちだった。

「「「いらっしゃいませ」」」

水の入ったグラスを準備して私が出て行こうとすると、やはりいつものようにツギヒトさんに引き止められる。私がバイトとして入ってからもずっと、あの子たちの相手をさせてもらったことがない。ツギヒトさんが意地悪な言葉を投げかけられているのを何度も見ているので、代わりたいと思うのだけれどツギヒトさんにはそれが嫌なようだった。

「いいよ、オレが行くから」

「やです。私が行きます」

今日は自分の面接に腹を立てていたのもあって、何も譲りたくないと思った。高校生にケンカでも売れそうな悪い強気が湧いている。そんな私の顔を見て、ツギヒトさんがふっと笑った。

「.....花ちゃん、なんか悪い顔してる」

「今日はかなり悪いですよ」

今度はカウンターの中の店長さんが吹き出した。二人の笑顔を尻目に悪い私はずんずんと高校生グループのテーブルへと向かう。

先日ツギヒトさんのことを「オカマ」呼ばわりした高校生の一団は、四人組のようだ。いつも同じ顔触れでこの店へやってきては、ツギヒトさんにちょっかいをかけて帰っていく。

奥から体型がガリガリなガリガリ君。その隣の子は髪の毛がキツネの毛の色をしているのでキツネ君。ガリガリ君の真ん前の席の子が、ちょっと優しそうなのでヤサオ君。その隣がよく食べる子なのでモグモグ君。見たままのあだ名を付けて心の中で呼んでいたので、何となく親しみが少し湧いてもいた。

「おっ、今日はお姉さんじゃん」

「いらっしゃいませ。御注文はどうされますか？」

「ねえ、ちょっとちょっと.....」

はじめに呼びかけたのはモグモグ君で、呼び寄せるように小声で手招きをしたのはキツネ君だ。私は彼らのひそひそ話しに加わるように、姿勢を低くして耳を傾けた。

「お姉さんさあ、オカマのことはやめといたほうがいいと思うよ」

「え？ どういう意味？」

「お姉さん、あのオカマのこと好きだろ？」

今まで、そんな風に考えたことはなかった。余計なお世話だ、と思う。

「嫌いではない、けど」

そう答えるのが精一杯だ。好きだと答えた方がよかっただろうか。

「あんなふにゃふにゃしたのがいいわけ？」

漠然とした忠告をしてくれているようだ。ツギヒトさんに対しては冷たいこの子たちの言動は、私には幾らかやさしいのかも知れないと思った。少し油断させて仲良くなるのも一つの手段かも知れない。

「――そうだけど、逆に危なくなさそうじゃない？」

ツギヒトさんや店長さんには聞こえないように、小さな声でこっそりと返す。

「危なくないって、いろんな意味で危なそうだろ、あれ」

「やさしそーに見えて、危ないんだって」

「ご忠告ありがとうございまーす.....って、あ、注文どうしますか？」

さり気なく注文を取ってみると、素直に高校生君たちは注文してくれる。注文を取らないとアルバイトの意味がなくなってしまう。

カウンターに振り返って高校生君たちには見えない角度で、親指を立てて笑って見せる。

「コーラ二つと、アイスティーとアイスオレをお願いしまーす」

「はいよ」

店長さんがアイスティーとアイスオレの準備をしはじめると、ツギヒトさんがコーラを入れたグラスに注いだ。しゅわしゅわと泡が浮き上がっていく様子が見ていて気持ち

いい。

「店長さん、ちょっとだけ。お客さんへのタメ口、見逃してくださいね？」

「了解」

にやりと笑った店長さんが親指を立てる。トレイの上には素早く四つのグラスが並んだ。

「お待たせしましたー。コーラはこちらとこちらでしたねー。アイスティーがこっちで、アイスオレがこっち？　あれ、違う？」

「違う違う、俺がアイスオレ」

「こことここ逆」

「あれ？　ごめんごめん……物覚え悪いんだよねー」

アイスオレとコーラを移動させていると、高校生君たちは怒るでも文句を言うでもなく黙って私の手元を見ていた。これがツギヒトさんだったなら、一言二言飛んできているだろうに。

「お姉さんさ、どこの高校出身？」

「私、地元はお隣の三重だから。このへんの高校の名前も全然わかんない」

「へーそっかー」

「みんなはずっとここ？　地元なの？」

「うん。みんな小学校から一緒」

「いいね。みんな仲良しだね」

素直な返事がぽんぽんと返ってくるので、何だかかわいく見えてきた。仲良し、の一言に照れくさそうに笑う男の子たちは本当にとても仲がいい仲間のようだ。

「お姉さん、いくつ？」

「え、もうすぐ 23 になるよ」

「ええーっ！ 見えねえ！」

「若く見えるって言われない？」

「つーか、大学生でもないんだ？」

「.....褒めてないね？ 馬鹿にしてるね？ ババアとか言っちゃうんでしょ？」

「言わねーって。いや、ホント。ちょっと上なだけかと思った」

「そうそう」

「ふふ、みんな良い子だなあ」

「い、良い子って.....子供扱いすんなっての」

「良い子、良い子」

そろそろ話を終わらせて戻ろうと思い、隣りのテーブルを拭く振りをして高校生君たちに背を向けた。この子たちと話しているのも悪くはないと思うけれど、それでは折角バイトとして雇ってもらった私の立場がない。

同情に近い思いで働かせてもらえているのに、それを裏切ったりしたら「死んじゃう」のだ。

死んじゃう、は私の口癖だ。嫌なことがあると無意識に言っている。こんなに暑かったら、死んじゃう。悲しすぎて、死んじゃう。もちろん、死ぬほどのことではない。

店長さんとツギヒトさんに高校生君たちのいる間は彼らの話をするまいと目配せし、カウンターに戻って洗い物を始める。すると、隣に複雑な顔をしたツギヒトさんが立った。

「花ちゃんさ……三重、出身なんだね？」

「はい。今年の春に愛知に越してきたんです。……どうか、しました？」

ものすごく深く探るような目をしているツギヒトさんに、私は首を傾げて訊く。

私は、ツギヒトさんが恐らく三重出身であると知っている。それはもちろん、これから何かのきっかけで話すかも知れないと思っていた。今がその時なのだろうかと思ったけれど、ツギヒトさんの深刻な顔に言ってはいけない気がした。

「じゃあ、あぶるって意味分かる？」

「あぶるって、魚をあぶるとかのあぶるか？」

店長さんが重い雰囲気を和ませるように口を挟んでくれる。私はとりあえず、にっこり微笑んで返事をした。

「多分、それと同じだと思うんですけど。三重では人にも使うんですよね。誰かにうちわで扇いでってお願いしたりする時に、うちわであぶってって。これも、場所によるかも知れないですけど」

これ以上、ツギヒトさんが怖い顔をしたままだったら「死んじゃう」。そう思って引きつっているだろう笑顔をツギヒトさんに向けると、ツギヒトさんは寂しげな笑みを返してくれた。

「花ちゃん。オレもね、三重出身なんだよ」

そう言ってツギヒトさんは、新しく入ってきたお客さんの方へと歩いていった。

私が男嫌いなのは、父親のせいだと思う。

小さい頃から、帰りが遅かった。遊んだ記憶もほとんどない。更に言うならば、私の父親は人の話を聞かない。だから、今日あったことなどを話す気にもならなかった。途中で話を途切れさせられることに、恐怖さえ感じていたから。

それは、今でも変わらない。だから、父とは話そうとしない。

私の父はマニュアル人間なのだ。

マニュアルにある父親と言うものを演じているような、いつもそんな違和感があった。

本当にこの人は子供が好きなんだろうか？ そう思ったことは少なくない。

父親は変わっている。自分は変わっているくせに、子供にはマニュアルどおりを望む。

私が普通のレールから飛び出した時、父親は少し戸惑ったようだった。今でもきっと思っているんだろう。

化粧が上手で、冗談が通じて、話し上手な仕事場の女の人のように。本当はそんな人間に、娘にもなってもらいたかったのだろう。

私は基本的に化粧は苦手だ。ただ、日焼けをするとアレルギーが出る体質なので、今は少し濃い目にファンデーションやらパウダーやらを塗りたくっている。

普段マスカラはしない。アイライナーも引かない。口紅くらいはするかな。

髪の毛は真っ黒。結ぶか耳にかけるかのどちらか。

服装はいたってシンプル。Ｔシャツとジーンズ。もしくは花柄のスカートにシャツ。どう頑張っても大人には見えない。

これは服装のせいではなく、顔のせいなのだけど、父親は服のせいだと思っている。子供っぽい服を着て一緒に出かけたら、ぶちぶちと文句を言われた。

もう父とは出かけるまいと思った。当然の結果だ。

理想とは正反対にいってしまった私を、父親は悲しんでいるのだろう。

私も努力しようと考えたこともあった。だけど、結局はどんなに頑張っても子供に見られた。もうここまでいくと、内面から溢れる子供らしさがあるのだとあきらめた。

自分の娘を自慢できない父親には、申し訳ないと思っている。愛せない娘に育ってしまって、申し訳ないとまた思う。

それでももう、この年になって、私は変わることはできない。こんな子になってしまってごめんなさい。それしか言えない。

がっかりさせてしまうことに、いつも私はへコむ。どうしたらいいのか、いつも考えるけれど思いつかない。

気がつけば、父親とはどんどん疎遠になっていった。同じ家にいるのに、言葉を交わすことすらなくなっていった。

これでいいのだと思う。もうあきらめていい頃だ。父親も。

決してこの世界には、自分の可愛い娘なんてものがいないことを。他人の子供を羨ましがっていればいい。今の私にはそれしか言えない。

誰の好みにもなれないだろうと思った。男の人の好みはよく分かる。私自身、可愛い人が好きだから。これは必要ないものだ。だから、私も男の人は要らない。

好きになってもらえないだろうから。

何よりも自分自身が、誰かに寄りかかることを恐れているから。

自分の肉親さえ、失望させてしまった私だから。

一人は嫌いじゃない。人に助けられて生きていることも知っている。ただ、たった一人は要らない。

いつも誰かと繋がっていられればいい。いつも一緒でなくてもいいのだ。

助けられた分だけ、返せるように。

少しずつ優しさを分けてもらい、その優しさに励まされて私は優しくなりたいと思う。

綺麗になれないことを、少しも悔やんではいない。

綺麗になってあげられなかったことなら、これからも後悔するだろう。

「何処へ行くんだ？」

出かける直前に父親からそう訊かれて、私は思わず泣きそうになった。

聞こえないフリをして、玄関を飛び出す。今日は普通の会社員からしてみれば休日だ。だけど、私はアルバイトに出かけていく。

アルバイトといっていいものか、未だに分からない。私のために居場所を提供してくれている、というのが一番正しい表現のような気がするからだ。それでもお給料を頂いているのだから、アルバイトなのだろう。一生懸命働くことで恩返しになると信じている。

父親が言っているのはもちろん、アルバイトのことではなくて就職の話だ。

決まってもいないのに、どう答えろというのだろう。いつも、アルバイトを始める前からもずっとそう思っていた。どこどこへ行きたい、行きます、で済む話ではない。

また胃の辺りが重く沈む。逃げたい、この状況から。

仕事が見つからなくて苦しいのは私のはずだ。父親ではない。私のことなのだ。

私は働きたいと思っている。だけど、働く場所が見つからない。

どうしろと言うのだろう。迷惑をかけたいわけでも、楽をしたいわけでもないのに。だけど、何処かで楽な方を選んでいるから、矛盾しているのも私なのだ。

うだうだと思い悩んでいるうちに、「スマイル」の看板が見えてくる。お店の前には珍しく、エプロンをつけていないツギヒトさんが立っていた。

「ツギヒトさん、おはようございます」

「おはよ、花ちゃん」

「ツギヒトさん、今日はお休みですか？」

基本的に「スマイル」には定休日というものがない。私は時間を持て余すだけなので、時間さえあれば顔を出しているけれど、ツギヒトさんと店長さんはごくごくたまに交代でお休みを取ることもあった。

「今日はみんな休み。花ちゃんもだよ」

「え？ 何かあったんですか？」

「大幅な模様替えをするんだってさ。だから、今日は臨時休業だって店長が」

「随分唐突ですね.....昨日は何も言ってなかったのに」

「と、いうわけで。花ちゃん。お休みです」

「もしかして、私にそのことを連絡するためだけに待っててくれたんですか？ すみません。もっと早く来ればよかった」

落ち込みついでに、今日は休日だということを思い出す。家に戻れば、父親がいるのだ。それだけはどうしても何よりも避けたかった。

「いや、待ってたんだけど。連絡だけじゃなくて.....その、模様替えを手伝おうとしたら、店長がたまには二人で遊んでこいって追い出されちゃって。軍資金を貰ったんだ」

家に帰らずに、ツギヒトさんとお出かけ。なんて素敵な話だろうと顔がにやけた、気がする。ツギヒトさんが声を殺して笑っているので、よっぽど私は変な顔をしたのだろう。

「二千円だけどね」

お金のことで笑ったと思われたのだろうか。ひどく卑しい子に思われていないだろうかと少し不安になりつつ、言い訳するのも恥ずかしいので黙りこんだ。

「あ、もしかして、都合が悪い？」

「いいえ！ いいえ、いいえ。出かけたいです。近場でも何処でも」

手をぶんぶん振ってから、ツギヒトさんの袖を摑んで引っ張る。すると、ツギヒトさんは照れくさそうに笑いながら私が引っ張るので動き出した。

何だか、デートみたいだ。今までこの方彼氏なんてものがいた経験がないので、そういうものに近いのかどうかも分からないけれど、そんな気がした。

「さあ、何処へ行こうかな.....」

「私、こっちに越してきたばかりだからあんまり.....よく分かんないです」

「オレも。この間も言ったけど三重出身だから、アキさんに連れ出されるくらいにしか出かけたことなくて。出かけるって言ってもまず、それが大変だよね」

「とりあえず電車、乗ります？」

「そうだね」

今度はとても気まずい。何処へ行こう、とか簡単に言える人間だったらよかったのにと思う。行く場所がなかったら、ぐずぐずしてしまいそうだ。

いつも昔から、私は人の行きたいところへついていくばかりだった。行きたいところなんてなかった。欲しいものもなかった。あるとしたら、本くらい。

何処か行きたいところないのってよく友達には怒られた。それでもやっぱり、行きたい

ところを見つけることはできなかった。

そんなときにいつも思うのは、「帰りたい」だった。

もちろん、家ではなかったのだと思う。家に帰っても心の平穏はなかった。だけど、それ以外に帰る場所なんてなかった。何処へ帰りたいのかは分からないけれど、いつも帰りたいと思っていた。

そういえば。とても気まずいけれど、今は。帰りたいとは思っていない。

これがツギヒトさんの、空間を居心地よくしてくれる力なのだ。気まずいのだけれど、この空間にはふんわりとした柔らかい空気が流れている。

話さなくても構わないから、ぼんやりとただただ歩いているというのも悪くない。ただ、それだとツギヒトさんが退屈してしまうかも知れないけれど。

「花ちゃん、買い物とかしたい？」

駅の近くまでやって来て、それまで無言だったツギヒトさんがこちらを向いた。買い物はしばらくしていない。だけど、最近では物欲もなくなりつつあった。無欲の境地に入りはじめているのかも知れない。

「私、今ちゃんと働いていないので節約してるんです。欲しがりません、就職するまでは！ の精神です」

「なるほど。オレも欲しいものとかってあんまりある方じゃないから、何処か公園にでも行って散歩でもしようか」

「いいですね。歩くだけって好きです」

「オレも。でも、珍しいよね。目的もなしに歩くなんて」

「歩いてるうちに見つける豪邸とか、公園とか、神社とか、そういうの好きなんですよね」

「あー分かる。階段とか好きだな」

「うわあ、本当ですか！ 私も好きです。あ、見てください、これ」

カバンの中から焦るように携帯電話を出して、話が途切れないうちにと必死にボタンを押して操作した。携帯電話のカメラ機能で撮った写真をディスプレイに映し出す。

「あ、いいね。オレも携帯電話で写真撮ろうかな」

「画像が少し荒いですけどね。私の携帯、もう古いから」

「でも、これだけ撮れてれば充分だよ。すごい階段だね、何処かの神社？」

「はい、京都へ行った時に撮ったんです。上るのは大変でしたけど」

「ご両親と行ったの？」

「.....はい」

少し前までは、家族一緒に出かけていた。日帰りだったけれど、行きたいと言った神社へ連れて行ってくれることもあった。大学生の頃は、そんなことも平気だった。行きたい、という一言も口に出せていた。子供だと思っていたから。

「ね、花ちゃん。電車には乗らないでこのまま歩いてみようか」

「いいんですか？」

「行くところも思いつかないし、歩くのが好きな二人が揃ったんだし。探検するのもいいかなと思って」

「はい！」

どうしてツギヒトさんは、こんなにも私の喜ぶ方へと導いてくれるのだろう。私が希望しているところへ自然に連れて行ってくれるような感覚だった。

そして、もしかしたら。店長さんが私たちに話し合う時間をくれたのではないかと思う。それをツギヒトさんは素直に受け取り、私はそれを感じ取っている。

昨日、出身地の話になった時、ツギヒトさんの様子が少しおかしかった。それは、私にも店長さんにも明らかだった。

ツギヒトさんは、私が三重県出身であるということに何か、脅えているようにも見えた。

どうしてツギヒトさんは、少年だった頃に、ここへ出てきたのだろう？

その疑問はどうしても付きまとっていたけれど、何も訊くつもりはなかった。無理やり聞き出したところで、私が力になれるはずもない。知らなくていいことは、知らない方がいい。

ツギヒトさんが話すのなら、それはもちろん聞くけれど。

小さな公園の横を通り過ぎながら、子供たちが遊んでいる姿を眺める。小さな子供が懸命に走っている姿は危なっかしくて、抱きしめたいくらい可愛くて、いくらでも眺めていられる気がした。

母親たちの側にある、紺色のベビーカーから赤ちゃんの泣き声がする。すると、走っていた一人の男の子がベビーカーに向かっていった。お兄ちゃんなのだろうか。

それでも悲鳴のような、叫び声のような泣き声は止まらず、母親が抱き上げている。私には赤ちゃんが何を必要としているのか、泣き声では判断することはできない。

「赤ちゃんの泣き声って、聞いてると悲しくなります。何だか一緒に泣きそうになって、逃げ出したくなります」

「ほら、でももう泣き止んだよ」

母親に抱かれて泣き止んだ赤ちゃんがにっこり笑っている。それだけのことなのに、何故かとてもほっとした。

「大丈夫だよ」

赤ちゃんに向けてではなく、私にその言葉が向けられているような気がして、滲んでいた涙がまた膨れ上がった。悲しいとかそういう思いがあったわけでもないのに、不安がずっと渦巻いているような感覚がある。

小さい頃から、宇宙を思うことがあった。

宇宙といっても本当の宇宙ではなくて、自分の中にある絶対に触っていけない領域のようなものだ。それは、とても「死」に近い存在だった。

死んだ後は何があるのだろう。生まれてくる前は何かがあったのだろうか。答えは何一つ得られないところにある。そして、生きている限り一生つきまとう。生きているということに違和感があるのだ。だけど、これ以外に知らないから何も思えない。うまく説明ができないのだけれど、不安に感じてどんなに逃げても、生きているから逃げられないのだ。ここから逃げ出すということが、何故生きているのかが分からないから、できない。

そこに僅かに触れるたびに、恐れて泣き出す他にできることがなかった。考えてはいけないのだ、夢中に生きていかなければいけないのだ。そう思うのに、ふとした瞬間にその宇宙に引き込まれる瞬間がある。

早く仕事を探して、忙しくしていれば考えずに済むだろう。のんびりしているから、この宇宙が私の近くへやってくるのだ。退屈しのぎをずっとしているわけにはいかない。

「花ちゃん？」

「あ、すみません。ぼんやりしてましたね」

「少し、休もうか。疲れたんじゃない？」

「あの、いえ.....そうだ。話、聞いてもらえます？ 相談っていうか」

「オレでよければ」

自動販売機の前に二人並んで、ツギヒトさんはコーヒー、私は紅茶を買ってもらった。逆走になってしまうけれど、子供たちのいた公園まで少し戻る。子供たちを遠巻きに眺められる対角線上にあるベンチに腰掛けた。

「あの.....畏まって聞いてもらうようなことでもないんですけどね。私、前にも少し話しましたけど父親が苦手なんです」

「ああ、可愛くないって言ってた」

「話しかけられると.....吐き気がするくらいに駄目なんです」

「意地悪な人なの？」

きゃははと、男の子が声を上げて笑っている。

「.....私、小さい頃、父に遊んでもらった記憶がないんです。物心ついた頃にはもう、お父さんきらーいって言ってました。小学三年生になって、嫌いって言葉はいけないって気づいて、それ以来言ってないと思うんですけど。だけどやっぱり、ずっと苦手な感はあります。父がもしも突然死んでしまったら、なんて考えて優しくしようって思ったこともあるんです。それなのに、父は絶対に意地悪で返すか、話を聞いてないかのどちらかなんです。父とは会話が続かないし、会話を続ける気がないみたいなんですよね。だから結局、苦手なまま。すぐに苛々しちゃって、口汚くなっちゃうから、もう喋らないようにしようって思ってると、

今度は全然自分と口をきこうとしないから、父が意地悪を言うようになるんです。.....何でしょうね、これ。悪循環なんです。私はいつもどうしたらいいのか分からなくなって、もういいやってあきらめてしまいます。父に嫌なことを言われるのは嫌です。父に嫌なことを言うのは嫌です。父の理想にはなれないって知ってます。.....好かれてる自信なんてこれっぽっちもないんです」

こんなことを話してどうする、と途中で何度も思ったけれど、最後までぼそぼそと呟くように話した。

今朝父親に話しかけられた時、自然に返事ができたらどんなにいいだろうと思っていた。だけど、苦しいから後ろめたいから先に怒りのようなものがかっと湧いてしまうのだ。

働いてさえいれば、ちゃんと自立できていれば、自信を持って自分というものを持つことができていれば、どんな言葉にだって返事ができるのだろう。今の私には、何一つない。だから、何を言われても自分が責められているような被害妄想に包まれる。

「親にも好かれてないんだから、他人なんてもっとです。私は好きだけど、相手も同じとは限らないっていつも思ってしまうんです」

ツギヒトさんは難しい顔をして、私のことを見ていた。人生相談のようなことを唐突にされてしまったら、もちろん驚いてしまうだろう。

好かれてないなんて相談をしたら、大抵の優しい人はそんなことないよ、好きだよって言ってくれるのだ。

そう言ってほしいから、こんなことを言い出したみたいでものすごく後悔した。話をすればするほど、馬鹿みたいなことを言ってしまうから、黙っているのが一番安全だと知っているのに。

こんな風に話し終わってからいつも、恥ずかしくて言わなくていいことまで話してしまって「死んじゃう」思いでいっぱいになるのだ。

久しぶりだった。こんなに「死んじゃう」思いで話をしたのは。

「オレも人に好かれてる自信なんてなかったよ」

「へ？」

「好かれてるって自分で思うのって恥ずかしかった。そうじゃない？ 自意識過剰だな、とか自惚れてるな、とか思うしね。だけどさ。本当に大事にされてるって感じることはない？ オレは時々、いや結構頻繁にあったんだ.....同情とか嘘とか気遣いかも知れない

けど、それでもとても大切にされてるって思った。その時に気がついたんだよ。その人の思いを自分が勝手に決めてしまってはいけないって。その人が大事に思ってくれてるかも知れない、その思いが本物だった時、失礼だなって」

とても大事に思って大好きだと思っているのに、その人には伝わらなかったら。私に嫌われているとその人が感じていたとしたら。それはとても、悲しいことだと思った。

「お父さんのことは分からないし、花ちゃんの辛い思いもあるだろうから、簡単に話をしていいものじゃないと思う。もちろん、花ちゃんがお父さんに嫌われているとは思ってないけどね。いつも１００％で、それでも足りないかなって感じることがあるよね。でもそれは、足りないと思うことに一生懸命になりすぎてるから、お互いに充分だって思えないんじゃないかな。もしかしたら、もう足りてるのかも知れないよ。例えば、意地悪を言い合うのは表現方法がちょっと荒っぽいだけじゃないか、とかね」

「私が好きだって思える一方通行でも充分幸せなんです。だけど、嫌われたくない.....」

「好きだって思われてて、嫌いになれる人って中々いないと思うよ。だからさ、ちょっとだけ疑ってみて。消しちゃう前に。自分が好かれてるかも知れないってことを。少なくとも.....少なくともっていうのも何だか失礼だけど、オレは花ちゃんが好きだよ。店長もきっとね。好きじゃなきゃ、大切な本を貸したりしない。本が好きな人にとって本はすごく大事なものだよね。花ちゃんも本が好きなんだから、分かるよね。信じられなくてもさ。そうでないと、オレも店長もかなり寂しいし」

ツギヒトさんが好きだと言ってくれた瞬間、くしゃくしゃになりそうな体が縮むような思いがした。嬉しいというのを飛び越えて、鳥肌が立つくらいに感動していた。

言ってほしくて、こんな話をしたくせに。こんな答えが返ってくると分かっていて、自分からパスを出したのに。どうしようもなく、感激した。

私が好かれていないと信じきっていたら、こんなやさしさに対してとても失礼だ。

へなちょこでも、パスを出してよかった。

ツギヒトさんのことが好きだなあ、と思った。

「そんなこと言ったら、調子に乗っちゃいますよ」

「調子に乗るぐらいで丁度いいよ」

「励まされてばかりで申し訳ないです……励まされたくて話してるんですけどね、ズルばっかり。ツギヒトさんに何かお礼したいと思うくらい」

きっとサラッと返事ができるのは、ツギヒトさんも色々と悩んできたからだと思う。その答えをカンニングして写して、それで私は赤点ギリギリを彷徨っているようなものだ。

「オレ、普段から花ちゃんに癒されてるから、いいよ」

「え？ 私、何もしてないと思うんですけど」

「花ちゃんってさ、人と話す時、絶対に笑ってるんだよね。話すことも頭の中で一度考えてそれから話してるって気がするんだ。笑ってるから話しやすい。受け入れてくれてるって思えるから。花ちゃん、そういうところに気を遣う子だよね」

小学生の頃、少し笑っていないだけで怖い顔をしてると言われたことがあった。どれだけ常に笑っているんだろう、と自分で疑問に思うほどだった。だけど、それがもっと小さい時に言われたことが原因だったとある時気がついた。

親と離れて祖父母の家に行った時のことだ。楽しいと思うことよりも、離れていることが怖かった。後から来ると言っていたけれど、事故に遭ったりしたらどうしようと埒の明かない心配もしていた。そんな時に電話口で大泣きした私に、お母さんが言ったのだ。

――あんたの笑顔がみんな好きなんだから。泣かないで。笑ってなさい。

笑っていれば、みんなが喜んでくれる。そう知ってからだと思う。私が普段からずっと笑っているようになったのは。あまりに笑っているので、腹黒い疑惑を持たれたこともあったけれど、それも笑って流した。私自身も、笑っている人の方が話しかけやすかったから。話しかけやすい空気を作りたいと思った。

考えてやっていることだから、何となく自然のものではないので、騙しているような気さえする。だけど、ツギヒトさんはそれも分かってくれているようだった。

「実は.....オレも、一つ勇気を出して訊きたいことがあるんだ。笑顔で聞いてくれる？」

「ツギヒトさんの話を聞かないわけ、ないじゃないですか」

にっこり笑って、頷く。一瞬、ツギヒトさんが泣きそうな顔をしたように見えた。

続いて小声で告げたツギヒトさんの質問は簡潔で、とてもとても短かった。

花ちゃんは、昔のオレを知ってる？

そう訊かれて、絵でツギヒトさんのことを知っていたと、言うタイミングを逃したまま今日まで来てしまったことに後悔した。

早くに話していればこんな風に訊かれることもなかったのに、自分が隠しごとをして居座っていたような気がして気持ちが悪かった。

「ずっと黙っていてすみませんでした！」

勢いよく立ち上がって深く深く頭を下げながら私がそう答えると、ツギヒトさんが見る見る青ざめた。知っていたことが分かってしまうくらいに、私は表情に出していたのだろうかと思いながらも、ツギヒトさんの様子の変化はおかしいと感じる。

「あの.....ちょっと説明が難しいんですけど、知っているといえば知ってます。知らないといえば知りませんでした。どうして分かってしまったんでしょう？」

「――え？ 花ちゃんが、三重出身だって」

「それで、ですか？ ええと.....そういう意味でだったら、知らないって答えた方がよかったかも知れないです。ツギヒトさんの、絵を知ってるんです。壁にツギヒトさんの絵が描かれてて.....だから多分、ご近所には住んでいたんだと思います。だけど、ツギ

ヒトさんは知らなくて、ツギヒトさんに会って、ツギヒトさんだと分かったんです」

分かりづらい説明だと思う。だけど、これ以外に説明のしようがない。

ツギヒトさんは探るように私を見つめてから、ほっと息をついた。その顔色が元に戻っていくのを見ていて、自分の中に少し違和感を残したけれど考えないことにする。

「そっか.....オレの顔を知ってたんだね」

「私、その絵が大好きだったんです。その絵を見ると、励まされている気がして。落ち込むといつも見に行って.....今と変わらないんです。だから、ツギヒトさんに会って、やっぱりお礼が言いたかったんです。だけど.....恥ずかしくて言えなくて内緒にしてました」

あの絵を描いた人も、ツギヒトさんのことが大好きだったのだろうと今なら分かる。やさしい雰囲気も全てひっくるめて、ツギヒトさんに近づいている気がするくらい、あの絵はツギヒトさんを表していたから。

ツギヒトさんは愛されていて、とてもとても好かれていて、そこからいなくなった。

その事実を受け止めながらも、ツギヒトさんのいない空間にツギヒトさんの絵を埋めたのかも知れない。それ程までに大切にされるということは、どんなものなのだろう。

「何だか不思議だね。花ちゃんはオレの顔だけを知ってて、本物のオレに出会ったんだ」

「私、大好きなアーティストとか作家さんとか、会いたくないなあって思ってました。嫌われたくなくて、どうしても好かれたくて、だけどそれは迷惑ですよね。どうしたらいいのか分からなくなるんです。本当に好きな人って好きでいたいから、傍にいられなくてもいいって思います。その人を嫌いになるからじゃなくて、自分が好かれる自信がなくて、嫌われてしまったら立ち直れないと思うからなんです。同じ気持ちですとか、私もそうですとか、そういうのってみんなが思うことだし、私だけが共有しているっていうわけでもないですし、それを自分と貴方だけだって思い込んでしまうのも怖いんです。だから、いつも。伝わらないかも知れないけど。元気でいてください、大好きって思っ

てます。いてくれてありがとうって。大好きな人の音や言葉が、私が生きてる証明になるんです。私が生み出す以外のものは全て、生きてるからこそ出会えるものですもんね。生きていてよかったって心から思えます。大好きって気持ちはたまに辛くて仕方がないですけど、やっぱり大切で捨てられないんです」

ずっとずっと遠いままであっても、その存在がある限り救われる瞬間がある。ツギヒトさんを描いた壁には、そんな瞬間瞬間を紡いだ多くの時間を助けられていたと思う。

「ツギヒトさんの絵は同じような存在だったんですけど.....会ってしまったら調子に乗って、近くで話ができるのはもっともっと幸せなことなんだなって思いました。本当に、心から、嘘なしで、会えたのがツギヒトさんでよかったなって思います」

ツギヒトさんは穏やかな笑顔を見せてくれて、私の頭を撫でてくれた。大好きな人に優しくしてもらえるなんて、本当に駄目人間の私にとっては贅沢だけれど、だけどとてつもなく嬉しい。

「花ちゃんは、オレに出会う前からオレの健康も祈ってくれてたんだね」

「そう、なりますね」

にこにこしているだけで、ツギヒトさんが少しでも癒されると言ってくれるのなら。私はツギヒトさんの前にいる限り、いつだってにこにこ笑っていようと思う。

笑顔は感染するはずだから、私が笑っていればツギヒトさんもきっと笑ってくれる。その笑顔で私はまた、幸せになるのだから素敵な循環だ。笑っていれば、いいことがある。と、信じている。

「紅茶、あったまってない？」

「あ、ちょっと.....飲むのをすっかり忘れてましたね」

「話し込んでる内に、ちびっ子たちもいなくなってるよ」

「いつの間に、ですね。飲んだら散歩、再開しましょうか」

「そうだね」

笑いかけられて、えへへと私は照れながら笑う。

何だか、色々と。恥ずかしいことばかり話してしまったような気がしてきた。だけど、気まずさは少しくらいあった方がいいのだ。多分。

私が調子に乗り過ぎないように、注意しなくてはいけないのだから。

「おー、帰ってきたか。おかえり。どうだった、デートは？」

日が傾き始める前にお店へ戻った私たちに、店長さんはにやりと笑って声をかけてきた。

「店長、お膳立てありがとうございました」

ツギヒトさんが店長さんに合わせるように、そう答える。私は冗談と知りながらも照れてしまって、逃げるようにツギヒトさんの後ろに隠れた。

「基本は散歩コースだったので、軍資金、余りましたよ」

「散歩？ また、熟年夫婦みたいなデートだな」

コーヒーと紅茶と、コンビニでおむすびとお茶を買った昼食分だけだったので、千円弱余っていた。ツギヒトさんがその小銭を店長さんの掌に返している。

「使い切ればいいもんを。返されても困るんだけどなあ。お嬢、持っとけ」

「え、いいです。ちゃんと節約して帰ってきたんですよ」

ひょっこりとツギヒトさんの後ろから姿を現して、差し出された手をきっちり押し返すと、店長さんは困ったように笑った。

「節約って……お嬢は変なとこ気ぃ遣うな。分かったよ」

それからやっと、模様替えをするといっていたお店の中を眺めた。カーテンがオレンジ色に変わり、テーブルの位置も変わっているようだ。大掃除をした後のようにピカピカにななっている床を見て、一人でここまで綺麗にできるものだろうかと思った時、アロハシャツのような派手な服を着た人がカウンターの裏から現れた。

「お、ツギ、帰ってきたんじゃん」

「あれ、アキさん？ 帰ってきてたんですか」

「親父が掃除手伝えって呼び出しやがったんだよ。お、これが噂のハナコか」

ハナコ。恐らくというか、確実に私のことだろうと思う。噂のハナコさん。何だか昔の怪談みたいだ。こちらこそ、これが噂のツギヒトさんを撥ねたというアキさんか、と心の中で毒づいてみる。服の趣味も、問題だ。

「花ちゃんだ、馬鹿息子」

「ハナなんて、二文字は言いにくいんだよ」

「なら、気安く呼ぶな」

「ツギにガールフレンドができたっていうんで見にきたんだ、話しかけたって構わねえだろうが。な、ハナコ」

「そうですね、噂のアキコさん」

にっこりと笑って、思い切り嫌味っぽく、対抗してみる。元々、父親との口ゲンカで口の悪さだけはかなり育っているのだ。優しいツギヒトさんや店長さんの前で使うことは決してないけれど、こういった類の人にはケンカを売っても許されるはずだ。現に、店長さんもツギヒトさんも笑いを堪えているような様子なので、売ってＯＫという合図だと勝手に受け取った。

「なっ、ムカツク野郎だな、お前」

「初対面の人に向かって礼儀がないのはそちらです、アキコさん」

「なっ。おい、ツギ！ 何かこいつ、ムカツク」

「アキコ、いい加減しろって」

「親父まで！ アキコじゃねえっつうの」

「知りませんでした.....アキさんって女の人だったんですね」

「お前ら！ 何だ、みんなハナコの味方か！」

「アキコさん、口ゲンカ苦手なタイプですね？」

アキさんは思ったよりも、乱暴なことが言えない人のようだ。言われたら言われるがままで、勢いと声の大きさだけで対抗しようとしているようにしか見えない。

私はアキさんに何だか、好感が持てた。こういう単純といったら申し訳ないけれど、子供のケンカしかできない人に悪い人はそういない。店長さんの息子さんなのだから、悪い人のはずがないという思いがあり、ツギヒトさんが親しみを込めて「アキさん」と呼ぶ友人を嫌いになるようなこともないはずだ。

楽しそうに笑っているツギヒトさんと店長さんと私に、アキさんは声を上げるのをあきらめたらしい。ちっと舌打ちが聞こえたけれど、怖いとは思わなかった。

「絶対、俺はお前のことを、ハナコとしか呼ばないからな！」

捨て台詞がもうあまりに可愛らしくて、年上だというのによしよしをしたくなった。私の代わりに、店長さんが頭をぽんと叩いている。

「はじめまして、アキさん。私は噂の福井花です。こちらで店長さんとツギヒトさんにお世話になってます。今後もお会いすることがあると思いますが、よろしくお願いします」

けろっとした顔で頭を下げてみると、きょとんとした顔が私を見下ろしていた。奇襲攻撃にも弱いタイプらしい。

さあ、これでもまだ、ハナコと呼ぶのだろうか。観察するように、アキさんが発言するのを私はじっと待つ。すると、アキさんは苦々しい顔をして口を開いた。

「よろしくしたくねえよ、ハナコ」

口が悪い人の言葉には色んな意味が含まれている。と思っている。

きっとこれは、よろしくと返したかったのだ。多分。

四、図々しい神頼み

四、図々しい神頼み

どうもこうもないのだけれど、働きたい。

アルバイトをさせてもらっているおかげで、死にそうなくらいストレスを抱えずに済んでいるけれど、早く自分自身の力で戦っていきたい。

そう思っているのは、事実。嘘はない。だけど、本音はもう少し弱気だ。

働く場所を得ることができたとして、そこで人間関係に失敗したらどうしよう、とか。

仕事があまりに辛すぎて、耐えられなかったらどうしよう、とか。

未知のものは何でも怖い。分かっている。その上で知らなければ、その場に立たなければ、いつまで経っても怖いままだということも、もちろん分かっている。

怖いからといって、いつまでもぐだぐだしていてはいけないということも分かっている。

もうこうなったら、最後は勇気と勢いで乗り切るしかないのだ。

そんな時に思い出すのは、中学時代の部活でのことだ。

不真面目な仲間ばかりのクラブだった。私はそんな中で、誰よりもボール拾いや素振りを真面目に取り組んでいると思っていた。だけど、練習を一番頑張っていた人間にやってくるといわれていたレギュラーの座は私のところへは、やってこなかった。

家に帰ってお母さんに結果を報告し、私は泣いた。一生懸命に頑張っていたのに、先生のいないところでサボっているような子がレギュラーに選ばれた、と。その時、時々名言を残すお母さんは、私にこう言ったのだ。

――見ているのは、人間だけじゃないでしょう。先生が見てなかったとしても、そこにある草や土はあんたのことをちゃんと見てる。あんたが頑張ってることを知ってるよ。見てくれてるんだから、あんたはこれからも頑張ればいいじゃない。

私にとって、この言葉はその後もずっとずっと忘れずになくならないものとなった。

その言葉をもらってからというもの、私はそこにある自然に向かって頑張っているでしょう？ と話しかけてはその自然が味方だと感じられるほどになった。人間の知らないところで、生きている自然が私を見てくれていると信じていた。

気付けば私は、一番手として部活を率いるほどにまでなっていた。レギュラーの座が常に自分のところにある強さまで、成長することができたのだ。

常に努力。卑怯なことをしようとしたら、いつだって何処だって見ている何かがいる。見守ってくれている何かに恥じないように。味方がいると信じて、突っ走らなくてはと思う。

怖いけれど、怖い怖いなんて言ってばかりいられない。

パソコンから、求人募集をしている会社へ応募する。そのワンクリックで死ぬほど胸が苦しくなるけれど、勢いで押すしかない。数日後、メールを受信していることが分かると、汗が滲むほど緊張してそのメールを開く。断りのメールだと分かり、ひどくひどくがっかりする。がっかりしているはずなのに、何処かでほっとしている自分もいる。

落ちたから仕方ない。働けないのは仕方ない。なんて、甘えてしまう私がいるのだ。

今までの私は、働く場所が得られないほどに駄目人間なのだと気づいたりもする。

履歴書を書いていると、自分の穴にとてもよく気がつく。バイト経験もない、これといったスキルもない、自己アピールをしようにも「笑顔と明るさ」なんて漠然としたものしか思いつかない。それなのに、楽をしようとばかり考えているから、何も引っかからない。

そんな履歴書に食いついてくれる会社も、もちろんない。

履歴書だけで、経験値だけで、計れないものがあると思うのだけれど。何もない人の言い訳でしかないのかも知れない。人柄、なんて履歴書では伝わらないのに。そもそも、人柄なんて仕事をする上では関係がないのかな。

この氷河期の御時世、正社員の道を探すのは困難だということもよく分かった。募集自体が曖昧な契約社員であるとか、フルで働くアルバイトであるとか、派遣社員であるとか、そういったものしかほとんどといっていいほどない。スキルがなければ、何処へも行けない時代なのだ。

まずはアルバイトをして、仕事に慣れていってステップアップするしかない。

そんなことしか、今の私のポンコツな頭では考えられなくなっていた。

事務職をしてみたいというのはあった。というか、事務職以外に何も思いつかなかったというのが正しいのだけど。アルバイトで事務をして、成長してから転職の道を摑もう。そうすれば、お給料を貰いながら勉強ができるのだ。アルバイトならば、採用してくれる会社の範囲も広がるし。

こんな思いつきが始まりだった。だけど、こんな思いつきがちょっとしたスタートになったりするのかも知れない。

今日、アルバイトの面接へ行って、初めてちゃんと話をすることができたと思った。今までは馬鹿にされるばかりだったけれど、そういった雰囲気を感じることはなかったのだ。アルバイトという立場の軽いところでの採用だったからなのだろうと思うけれど、それでも初めて人間扱いをされた気がして嬉しかった。

笑顔を誉めてもらえたことが、何よりとても嬉しかった。

「ハナコは見た目から全部ガキだからな」

「またそうやって、人の傷つくことを言う！ どうしてアキさん、またいるんですか」

「お前だって人の傷つくことを言ってんじゃねえか。俺はなあ、ツギに会いにきてんだよっつうか、ここは俺の実家だろが」

確かに、それは間違いない。立場が弱いはずの私がぶつぶつ言えるのは、店長さんが味方になってくれると知っているからだ。

「おい、馬鹿息子。手伝う気がねえなら、さっさと奥に引っ込んでろ」

苦々しい顔を私に向けてから、それでも大人しく奥に戻っていかずにツギヒトさんの隣に並んで一言二言交わしている。

私自身の個人的な考えからすれば、アキさんのような人とは打ち解けやすい。今までの友達もこういった口の悪い人が多かった。三重県人も関西なまりに近いこともあって、ボケツッコミの役割分担はできる方だ。言い合いのようなスキンシップには慣れている。

ツギヒトさんが楽しそうに、アキさんと話しているのも何だか嬉しかった。

友達はやっぱり必要だなあ、なんて二人の姿を見ていると思う。全て切って自分でなくした私がそんなことを思うのも失礼な話だけれど。

花ちゃんはアキさんのこと、嫌っていないと思うけど。

そんな声がツギヒトさんから発せられているのが、私の耳にも届く。疑わしい顔をしたアキさんが私をちらりと見た。

その通り、嫌ってなどいない。口が悪い人には口が悪くなるのは、負けたくないというよりも自分がそう威勢良くしていなければ対等に会話をさせてもらえないからだ。

お前さ、もう帰らないつもりなのか。

二人の会話に入ってみようとか、盗み聞きしようとか、そんなつもりはないのだけれど、聞こえてきてしまうものをシャットダウンするのは難しかった。

小さい頃から聞こえてくる声を聞き逃すまいと、常に自分の情報として飲み込むのは得意だった。どんなことだろうと、聞いていれば後々自分が助かることだってある。その情報を元にして、その人にしてあげられる何かを見つけられることもある。もちろん、自己満足であったとしても、役に立たない自分ができることはしたい。例えば、誰かがよそ見をしていて何かにぶつかりそうになった時、こっそりその邪魔物を退けるくらいのことはしたい。

だけど。いけない、いけない。ツギヒトさんの弱い部分を聞いてはいけない、それだけはしてはいけない気がする。助けになれないならば、聞かない方が自分の為でもある。その辺の判断が難しい。

できる限り、声が聞こえないところまで離れてしまおうと思う。すると、アキさんがくすりと笑った。同時に店長さんも笑った。振り返ると、きょとんとしているツギヒトさんと私の目が合って、揃って首を傾げるだけだった。

「お前が、ハナコを拾ってきた意味が分かる気がするなあ」

「そうだろ。その意見に関しては同感だ」

「何ですか、それ。拾われたのは事実ですけど——店長さんにもですよ」

「ハナコはガキだから分からなくていいんだよ。なあ、ツギ」

「オレも何のことか、分かりませんよ」

少しだけ不機嫌にも見える、珍しい無表情でツギヒトさんがそう言った。

本当に珍しい。今まで毎日のように会っていたのに、こんな顔を見るのは初めてだと思った。僅かにアキさんが困った表情をしたのも、気になる。

「アキさん！ ツギヒトさんに意地悪しちゃ駄目ですよ！ 私には分からないからなんて理由で、黙ってると思ったら大間違いです！」

「たまには黙れ、ハナコ！ この野郎！」

「どっからどう見たら野郎なんですか！ このやろー」

髪の毛をぐしゃにぐしゃにされるという嫌がらせを受け、私も対抗するようにバシバシと思い切りよく叩いてみる。アキさんは笑っていたし、私も笑っている。そんな様子を見て、ツギヒトさんにも笑顔が戻った。

よし。おっけー。空気を、壊せたかな。

カラン。お客さんも丁度いいタイミングでやって来た。私が即座に動こうとすると、何故かアキさんがそれよりも早くお客さんの方へと歩き出す。

「俺が行くよ。ツギに意地悪した反省も込めて、な」

「やっぱり、意地悪だったんですね」

そう唇を尖らせて、わざとらしく返すとアキさんは頷いて笑った。以前は手伝っていたという話を店長さんから聞いていたので、自然な接客振りに流石と思う。

「あいつが手伝うなんて、お嬢がいてくれるおかげだな。馬鹿息子の口の悪さに対抗できるとは、やっぱり見た目よりもお嬢には根性があるなあ」

「女は根性です。限界はないと信じてます。と言っても、限界を超えられると思って頑張りすぎて倒れたことが何度かあるので、限界を把握することにも努力してます」

「倒れたって、花ちゃん」

「あの、大したことではなくて、調子が悪いなあと思っていたんですけどね。これが終わったら横になろうなんて我慢してたら、意識を失いました」

「それはまた、根性とは別で心配だな」

「もう大丈夫ですよ。どのくらいで倒れるかっていうのを学びましたから」

あと、どれだけ心配をかけてしまうかを知ったから。

その倒れた後のことだ。しばらくして気がつくと、お母さんが必死に泣きながら名前を呼んでいるのが聞こえた。気持ちよく眠っているような空間から呼び戻されたのは、その声があまりに切羽詰っていたからだ。自分の失態でこんなにも悲しませてしまうのだと知り、親より先に死なないように努力をしなければいけないと、その時に誓った。

どんなに辛くても、死にたいと思うほどに悩んだこともあったけれど、そんな時にはいつも思う。自分が死んだら、家族はきっと悲しんでしまう。自分に原因があると疑わず、泣いてしまう。人の人生を変えてしまう勇気も、なかった。

それに、自殺のことを考える時。泣いている、謝っている人の声が聞こえる。死んだ自分を目の前にして、誰かが泣いているのを想像する。

結局、自分は腹いせの為に死のうとしているようにしか思えなかった。死んだ後の光景を思い浮かべて、ざまあみろと言いたいだけのような気がした。呪いをかけるような、自分の死に意味を持たせるような。そんな結果にならないことだってきっと、あるだろうに。

死ぬのが怖いというのもある。言い訳をしたいだけなのだというのもある。だから、私の自意識過剰な一意見でしかない。

自然に溶けるように消えるのが一番、望ましいのだけれど。

「ただでさえ、駄目人間なのに。心配までかけちゃうなんて、もっと駄目駄目になっちゃう」

「心配をかけるのは、やっぱり駄目だよね」

「あ、だけど、ツギヒトさん。心配しないなんて、無理だとも思うんですよ。家族が買い物に出かけるっていうだけでも、心配になるじゃないですか。事故に遭わないかな、とか。この御時世ですから、どんなことに巻き込まれるかも分からないですし。心配する方はするなって言われたってしちゃうし、仕方がないというか.....自然なことなんだと思います。私の場合は自分で気をつければいいことだからっていう意味で駄目なんです」

駄目人間の私が、どんなことであったとしても否定してはいけないと思う。否定できるだけの背景を何一つ持っていないのだから。駄目なのは私であって、心配をかけてしまう人ではないと伝えたかった。

「好きだから、心配するのかなって思いますしね」

好かれている自信がないと言っていた私が、こんなことを言っていいものか悩んだけれど、呟くようにぼそりと言う。ツギヒトさんが優しく笑ったのが分かった。

入り口の方へ騒がしい声が集まってくるのが聞こえた。いつもの、高校生君たちだ。私に気がつくと軽く手を上げて、それから入ってきてくれる。いつの間にか弟のような気持ちで彼らを見られるようになっていたことがとても嬉しい。

「お姉さん、来たよー」

「いらっしゃいませー。試験どうだった？」

先日来た時に、もうすぐ中間テストだと話していたので訊いてみる。彼らの反応はまちまちだったけれど、試験はほぼ終わっているようだ。

「で、お姉さんの方はどうよ？」

「どうもこうも.....進展なし」

「もうちょっと頑張れよ、姉さん」

「そんなこと言ったって、仕事中はなかなか話はできないし」

「帰りに待ち伏せとかは？」

「あの人ね、ここだけの話、住み込みなんだよ。待ち伏せしたところで出てこないんだって」

高校生君たちが言っているのは、ツギヒトさんのことだ。私が彼と親密になれる方法を聞き出す、といった風に仲良くなる方法をとった為、やって来るといつもこの調子なのだ。

意地悪な発言だとか、困ってしまうようなことだとか、そんな助言が出てくることを覚悟していたりもしたのだけれど、この子たちは想像以上に真面目で真剣に話を聞いてくれている。何だか、本当に相談しているような状況のように思えても間違いではない。

「消極的だなあ、おねーさん。そういえば！ コイツ！ 彼女できたんだぜ」

指を差されて少し照れているのは、キツネ君だ。

「ホント？ おめでとー。こないだゆってた、女子部の後輩だったっけ？ その子？」

「そうそう！ 告白して二週間、返事まで長かったんだよな」

「返事、自分からもらいに行ったの？ うわ、頑張ったね！」

ほとんどがガリガリ君の説明で進んでいく間、彼は恥ずかしそうにしていたけれど、私の質問には頷いてくれた。嬉しそうだ、いいなあと思う。

高校時代、そういうことはなかったな。女の子と一緒にいる方が楽しくて、男の子に好かれる要素もなかったし、大学へ行っても男の子は避けていたし。こういう楽しいとか幸せとかそういうものを、全部取り損なってきたような気がした。

「お姉さんはさ、そーゆーの苦手そうだよな」

高校生にまでバレるとは、よっぽど私はそういうことに無縁に見えるのだろう。間違いない。間違いないのだけれど、落ち込む。

「男嫌いだったから」

「そっか、そういうことか」

「何が？ そういうことって何？」

「お姉さんが、アレを選んだわけ」

「ああ、オカマだから？」

「オカマって言わない約束したのに！」

「ごめん、ごめん。いや、でも、そういうことだろ。男っぽくないっていうか、男嫌いでも平気な感じ？」

「私、店長さんも平気だよ？」

「アレはおっさんだから？」

「おっさん.....」

顔の表情を固めようとして失敗した。無理に我慢した反動で、思い切りよく吹き出して笑ってしまい、怪訝な顔をしたカウンター陣から目を逸らす。

「.....ま、言葉は悪いけど、みんなからしたらそうか」

ヤサオ君が笑いが収まらない私に笑いかけて、それから優しい一言をくれた。

「どんなでも。俺はお姉さんを応援するよ」

他の子たちが一瞬不思議そうな顔をしたけれど、同意するように頷いて笑いかけてくれる。

「俺らも、相談に乗ってやるからさ」

どうして唐突にこんな宣言へ繋がったのは分からないけれど、優しさは伝わってきていたので素直に嬉しかった。この子たちが、可愛い。

「ありがとー。みんな、本当に良い子」

一人ずつ、頭を撫でてやると、不本意な様子の中に激しくうろたえている表情がまた可愛かった。

高校生君たちはいつも通り声を揃えて、子供扱いすんじゃねえ、と怒鳴った。

少し肌寒くなってきた風を避けるように、お店のドアを閉める。

鍵をかけてエプロンをたたみながら奥へ行くと、ツギヒトさんとアキさんが笑いながら話していた。店長さんも少し離れたところで、二人の話に応じているようだ。

「お疲れさまでしたー」

「ハナコ、お前、ガキに人気があるなんて.....やっぱりガキだな」

「良い子たちだから、何を言われてもいいですよーだ」

「ちょっとした問題児が可愛くすら見えるからな。うちの馬鹿息子でさえ、手伝わせるくらいの才能だ。中々やるな、お嬢」

「良い子じゃなかったら相手できませんよ。ね、アキさん？」

「ガキにガキ扱いされた！ 腹立つ！」

ツギヒトさんがアキさんに背中を向けて、くつくつと声を堪えて笑っている。アキさんが来てからというもの、以前よりももっと楽しい雰囲気が増した。アキさんがムードメーカーだというのが一番の理由だけれど、ツギヒトさんが友人といるその空気がよかった。

優しいお兄さんと、親切な店員さんと、そんなツギヒトさんは見てきたけれど、年相応の顔のツギヒトさんを見られるようになったのはアキさんが現れてからだ。

「あ、お嬢。今日、こないだ話してた本、持って帰るか？」

「借ります！ 五冊でしたよね。全部借りちゃっていいんですか？」

「ハードカバーだからな、一冊ずつの方がよくないか？」

「え、そうなんですけど……続きが読みたくなったら、眠れなくなっちゃうので。借りてもいいです？」

「それなら、お前、持ってってやれ」

店長さんは息子の方ではなく、ツギヒトさんに向かってその指示を出した。ツギヒトさんは自然に躊躇もなく、「いいですよ」と答えている。

「あ、あの！ そんな、それっくらい持てますよ！ 私、図書館で半端じゃない数の本、借りたことありますし！」

「ツギがいいって言ってんだから、素直に持たせとけ。自転車、使えばいいだろ？」

アキさんまで面倒くさそうに、だけど何だか面白そうに言い、私は追い出されるように背中を押された。店長さんがその後ろで二重にされた紙袋の中へ本を詰め込み、それをツギヒトさんに渡している。

「さ、行こっか。じゃあ、行ってきます」

「え、ええと、お疲れさまでした」

裏口からお店を出ると、ツギヒトさんは自転車のカゴに紙袋をゆっくり入れてスタンドを蹴った。ツギヒトさんが私の隣まで来たところで、私も歩き出す。

「日が落ちるの、早くなったね」

「秋ですね。風も冷たくなってきましたし」

この間までこのくらいの時間は、まだまだ明るかった。それがここ数日で、薄暗くなり

はじめて家に着く頃には暗くなっている。

もしかしたら、暗くなっているから、送ってくれようとしているのだろうか。だけど、そうだとしたらこれからはもっと暗くなる一方だ。毎日こんなことが続いたら、申し訳なくて「死んじゃう」。だから、今日だけのはずだ、と思うことにする。自意識過剰になっているだけで、恥ずかしい。

――帰りに待ち伏せとかは？

高校生君たちとの会話が今更ながらに蘇って、少し照れて笑ってしまう。無理だと反論したけれど、こういう状況があるとは思ってもみなかった。

ツギヒトさんのことが好きだから、協力してほしいというようなことをあの子たちに話したのは、ツギヒトさんに暴言を吐かなくなればいいと思う考えがあったからだ。それが思ったよりも功を奏し、高校生君たちは私の味方であり、私の好きなツギヒトさんを傷つける発言はなくなった。

ツギヒトさんのことは好きだけれど、固体として、人として好きなだけだと思っている。

だけど、彼らと話を合わせるように話している内に、本当のような気がしてくるのが私の思い込みの激しさの怖いところだ。思い込めば、嘘も本当になる。女の人はそれができる、と何かの本で読んだ気がする。

こうして二人で並んで歩いていたりすると、益々自分で自分の首を絞めているような、そんな恥ずかしい思いが滲み出す。

「花ちゃんが、スマイルに来てくれるようになって、よかったって思うよ」

「え？」

唐突に呟くように言ったツギヒトさんを見上げると、前を向いたまま歩いている。

「高校生たちは花ちゃんがいると嬉しそうだし、出て行ってしばらく帰ってこなかったア

キさんが、店を手伝ってる姿まで見れたからね」

「アキさんが手伝ってるのって、そんなに珍しいんですか？」

店長さんも何だか嬉しそうに、アキさんが手伝ってくれたことを何度も繰り返し口に出していたことを思い出す。

「うん。オレが来たばかりの頃は、手伝ってたんだけどね。オレが手伝うようになって、それから就職して出て行ったから」

「私、どちらにも訊けなかったんですよね.....アキさんはお店を継がないんですかって」

「オレがいる間は、手伝わなくてもいいって思ってるみたいなんだよ」

それだと、ツギヒトさんがいなくなってしまうからアキさんが帰ってきた。そんな風に聞こえる。

「花ちゃん、神社とか好きだって言ってたよね」

「はい」

「今度さ、アキさんがいる内に。二人でお休みもらって、行かない？ 小さいんだけどね、雰囲気のいい神社があって、でもちょっと遠いんだ。自転車でいける距離だけど、仕事の帰りとか合間にいける距離じゃなくて」

ツギヒトさんのお勧めの神社。それはとても行ってみたいと思う。咄嗟に「行きます！」と張り切った声で言うと、ツギヒトさんは微笑んでいた。

「願いごとが叶うって有名らしいから。神頼み、しに行こうよ」

「神頼み、なんて懐かしい響きだなあ」

仕事場以外でツギヒトさんと会えるというのは、緊張してしまいそうだけれど、仕事場

では中々話す時間も取れないから楽しみでもある。この間、一緒に散歩した時の居心地のよさを知っているから尚更だ。

「ここで、大丈夫です」

マンションが見えてきたので、私が紙袋を受け取ろうとするとやんわりと断られた。

「下まで行くよ」

結構重いから、なんて返されて素直に従ってしまう。ここまで送ってもらえて、重い本を持たずに帰ることができて、それはとても本当に助かっていた。だけどそれ以上に、申し訳ない気持ちが胸に重い。

小さな子供が住んでいるマンションなので、熟の帰りなのか、遊んできた帰りなのか、トコトコと走っている子たちが目の前を通り過ぎていく。

階段を駆け上がる姿は懸命で可愛らしいのだけれど、危なっかしくもある。ツギヒトさんが自転車を停めている横でその小さい背中を見ていると、一番後から走ってきた男の子がゆらりと後ろに傾ぐのが分かった。

「危ない」

直ぐ近くにいたので、二段目くらいの低い位置から後ろ向きに降ってきた男の子を、膝で滑り込むようにして受け止めた。男の子は泣きそうな顔を見せたけれど、自分が無事だと理解したのだろう、立ち上がると振り返って私を見た。

そして、何も言わずに立ち去った。

慌てている様子がいっぱいいっぱいな気持ちを表していたので、笑顔でとりあえず手を振ってみた。後ろめたそうに私の方を見て、男の子は壁の向こうへ消える。

「花ちゃん！ 大丈夫？」

「平気です。変に助けちゃったから困らせちゃいましたね」

残念だったのは、こんな時に限ってスカートだったことくらいだ。膝を擦り剥くなんていつ以来だろうと思いながら、赤くなった膝小僧を立ち上がって眺める。

「早く洗わないと」

「はい。家が直ぐそこでよかったです。……すみません、本、ありがとうございました」

「それはいいけど……」

本を受け取りながら笑いかけるけれど、ツギヒトさんの心配そうな視線が膝に注がれていることに気づき、心配かけてしまったなと思う。

「ツギヒトさん、本当に大丈夫ですよ。自分が痛いのは結構平気なんです。痛みの度合いが分かりますから。だけど、人が痛いのは嫌なんですよ。人が痛いのって何も分からなくて心配じゃないですか。いい格好しいに聞こえちゃうかも知れませんけど……あの子が泣くよりずっといいんです」

本当に、カッコつけたい人が言いそうなセリフだ。だけど、上手に言えないのだけれど、結局は自分が痛い方が楽でいいと思っていることに違いはない。

「じゃあ、オレにも言わせてよ。花ちゃんが痛そうにしてるのを、オレは見たくないって」

ツギヒトさんの方が痛そうな顔をして、そう言った。

――好きだから、心配するのかなって思いますしね。

自分で言った言葉が自分の勝手な解釈で頭の中を巡りはじめたので、それを必死に押し留める。何だかんだで、ツギヒトさんのことをいい意味で意識しているのが分かった。

「……もちろん、あの子が泣いてるのも見たくはないんだけど」

付け足しのように言われた言葉に、私は痛くないと言外に伝えられたらと思い、にこにこと笑った。

「私が助け方を失敗したのがいけなかったですね」

送ってくださってありがとうございましたと頭を下げて、私はツギヒトさんが自転車に乗って走り出すまで見送っていた。膝から血が滲んでいたけれど、ツギヒトさんに心配されたことが申し訳ないはずなのに嬉しくて、痛みを感じることすら忘れていた。

家に帰ると、私の真っ赤になった膝を見てお母さんが小さな悲鳴を上げた。

直ぐにお風呂場へ連れて行かれ、流水でざぶざぶと洗わされた。少ししみたけれど、気にするほどではなかったので大人しく我慢した。

正方形の４，５センチある絆創膏を膝に二枚貼ると、小学生の怪我のように見えて少しだけ情けなかった。大人がこんな大きな絆創膏を貼っているのを、ほとんどといって見たことがない。

「お嬢、足は大丈夫なのか？」

ツギヒトさんや店長さんに心配をかけまいと、今日はスカートではなくジーンズを履いてきたというのに、何故かバレていた。珍しいことに、ツギヒトさんが告げ口したようだ。

「大丈夫です。ツギヒトさんに口止めするの、忘れてました」

ツギヒトさんが気まずそうにカウンターの奥へ逃げていくのを見つけ、そんな声を投げかけてみる。振り返らないツギヒトさんの代わりに、アキさんが笑い声を上げた。

「ハナコ、やるじゃねえか。.....親父、今日にしてやれば？」

「お嬢次第だな」

ニヤニヤしているアキさんと、心配そうな顔をしてくれている店長さんの顔を見比べて

首を傾げる。ツギヒトさんが奥から戻ってくるのが見えた。

「……何ですか？」

「今日は俺様がこの店を手伝ってやるから、ハナコとツギで出かけてこいよ。ツギから聞いてるんだよ、休みがほしいってな」

「あ」

「お嬢の怪我に無理させるのもと思うが……どうする？」

店長さんの最後の問いは、ツギヒトさんに向けられていた。私はただ転んだだけなのに、そこまで大袈裟な話にされると困ってしまうというのもあって俯いた。

「花ちゃん、大丈夫？」

「小学生でもこんなの我慢できますよ。……あ、自転車がないですけど」

「自転車なら俺のを貸してやるよ。ガキ用に椅子下げてやるから」

アキさんがそう言ってお店の外へと出て行く。ここまでしてもらっているのだから、行かないという返事が出てくるはずもなく。ツギヒトさんと私は見合わせて笑った。

お店の外へ出ると、アキさんがサドルを一番下まで下げてくれている。確かにチビだけれど、そこまで下げなくてもと口出しをしようとしてやめた。アキさんの優しさは分かりにくいけれど、感じているつもりだ。

「そんなに遠くまで行くわけじゃないんだろ？」

アキさんの質問にツギヒトさんが「三十分くらい」と話しているのが聞こえた。ツギヒトさんと往復で少なくとも一時間は話をしなければならない。そう覚悟する。覚悟がいるのは、私が余計なことを言わないようにと心がけなければならないからだ。

「お嬢、これ持ってけ。涼しくなってきたって言っても、飲み物くらいはいるだろ」

店長さんから受け取ったものは、ペットボトルのスポーツドリンク二本だ。開店前とはいえ、私たちのお出かけの為に二人が出てきてくれていることが何だかおかしかった。

まるで、私たちが何処か遠くへ行って当分帰ってこないような、見送りにも似ている。

「はい。ツギヒトさんの分です。店長さんから」

「ありがとう。店長、ありがとうございます」

気を付けろよと軽く手を振って、店長さんはお店の中へ消えた。その後を追うように、面白いものを見るような目をしたアキさんが背を向ける。

「花ちゃん、こっちだよ」

自転車にまたがったツギヒトさんが手招きをして待っていた。初めて乗る自転車だったので、私はうまくバランスがとれずにふらつきながら走りはじめる。

「足は本当に大丈夫なんだよね？」

「はい。久しぶりに転んだんで新鮮ですよ」

自転車を漕いでいればもちろん引きつった痛みはあるのだけれど、それをわざわざ宣伝することもないと思う。

前を走るツギヒトさんの髪が風に流れている。隣に並べるほど広い道ではないので、後ろを静かについていく。時々振り返ってはついてきているかを確認しているツギヒトさんに、私は笑顔を向けた。

自転車はとても気持ちがいいと思う。お小遣いが少なかったからというのもあるけれど、買い物へ行く時に電車に乗らずに何処までも自転車で行くことが多かった。往復で五百円の切符代が、自転車で一時間頑張れば買い物の予算に入るのだ。体力は余りあるほどあったのだから、方法としては間違っていないと思っていた。だから、自転車は相棒

だった。

自転車で愛知県にまでやってきたという、ツギヒトさん。

もう９年も前の話だと言っていたけれど、今の私よりもずっと若かったツギヒトさんは何を思って自転車を漕いでいたのだろう。詮索しようと思ったことはない。想像してみようとしたこともない。こんな風にふと思い出しては、流れるように消えていく。

見上げると、綺麗な青空だ。運動会でもできそうな、秋の真っ青な空。

こんな日に風を切って、ツギヒトさんの後を追いかけて自転車を走らせているなんてとても幸せな気がした。こんな時間ばかりが、ずっと続いていたら本当に幸せだろう。だけど、駄目人間のままの私が喜びきれないのは仕方がないことだ。

先日、インターネットから求人に応募した。それから一週間以上が経っているけれど、音沙汰がなかった。最近ではそういうことも少なくない。お断りのメールがあることがとても親切だと思えるほどには。

断ることさえ、私に対しては必要ないのだと言われているような気がした。私の弱々しい勇気に、誰も応えてくれない。それはきっと、私が悪いからだ。

せっかく、ツギヒトさんとお出かけしているのに。

どうしてぼんやりすると、私の弱音のような言い訳のような声が頭の中を巡るのだろう。今はこの時間を楽しんでいい時間のはずだ。ツギヒトさんまでつまらない思いをさせては、私はもっと自分が駄目だとしか思えなくなる。

「花ちゃん」

ツギヒトさんに声をかけられて、私は顔を上げた。少し長めで、急な坂を目の前にしてツギヒトさんが私を待つように止まっている。

「こっからは歩こうか。流石にこれは急だよね」

「何だか転げ落ちそうな坂ですね」

自転車から降りて、二人で坂をじわじわ上っていく。前のめりな体制で隣を見ると、ツギヒトさんが苦笑いを返してくれた。

「丘とか山とか、好きなんですけど、ここに住むのって、大変そうですよね」

息を切らしながら、振り返る。まだ三分の一くらいだろうか。

「そうだね、自転車は、辛いよね。車がないと、住めそうにないね」

「高台って、憧れますけど。坂とかも、好きですけど。毎日は、大変」

えい、と変な掛け声をかけながら、一気に進んではゆっくり進んでと不自然なリズムで上る。ツギヒトさんも辛そうだ。この坂を軽い息で上れる人はどんな人だろうと思う。スポーツ選手でも息切れくらいはしそうだ。

「花ちゃん、頑張れ」

ツギヒトさんが最後の何歩かを一気に走るように上りきり、振り返って笑っている。笑い返すと私も小さなコンパスをめいっぱい広げて、坂の天辺に辿り着いた。

「お疲れさま。昨日の今日で無理な運動させちゃったね」

「いえ、これっくらいどうってことないです」

はあはあと息は荒いのだけれど、何だかとても気分がよかった。振り返った先から低く町が見下ろせて、また気持ちが浮上する。

「いつも暮らしてる町を、上から見るのって何だか不思議な気分だよね」

「そうですよね、別の世界を見てるみたい」

「さ、もうちょっとだよ」

ツギヒトさんが自転車に乗り、私もそれに倣って自転車にまたがる。少し先に行った左手に、小さな森のように木々が茂っている場所があった。きっと、そこへ行くのだろう。

神社の本殿らしい場所を横目に通り過ぎ、その先の車の駐車場として使われている広場へと進んでいく。自転車をそこに停めて、改めてその場所を見上げた。

大きな、鳥居。その先は緑色のトンネルになっていて、その空間だけ木々の色で薄暗く、冷たい空気が心地いい。その先は少し木々の隙間があるのか、きらきらと木漏れ日が零れているのが見える。とてもとても綺麗だった。

空気が違う。神社へ着くといつも思うのはそんなことだ。父親の運転する車でよく出かけていた頃、私は車酔いすることが多かった。そんな時、神社へ着いて下りてお参りしていると、その気持ち悪さから解放されていることがあった。神社にはそんな、不思議な空気が流れているのだと幼心に知ったのだ。

小さな歓声を上げて走り出すと、ツギヒトさんが慌てたように追いかけてくる音が聞こえた。砂利の音に、普段の生活の中では聞けない音だと思う。

「すごく綺麗。いいところですね」

「静かだし、この道も好きだよ」

「あ！ 手、洗いましょう洗いましょう」

龍の口から僅かに流れる水の音が聞こえる。そこで二人並んで柄杓を手に取り、片方ずつ両手を流す。ツギヒトさんは口もゆすいでいるようだった。

「ハンカチ、使いませんか？」

「ありがとう」

少し歩いていくと、さっき横を通り過ぎてきた本殿が見えてくる。鳥居をまたくぐって、本殿の真正面へと早足で進んでいった。

「うーん……今日は少し奮発して……百円……」

いつもならお賽銭は、一円五円十円がいいところだ。だけど、今日はツギヒトさんに連れてきてもらった幸せも手伝って百円を一枚、箱の中へと滑り込ませる。そうはいっても、たった百円でしかないのだけれど。されど、百円。

隣で笑っているツギヒトさんは、私に合わせてくれたのか百円玉を一枚取り出している。そんなことがおかしかったし、嬉しい。

二人で二礼し、二拍手し、深く深く私は神頼みをする。

願うことはいつも一緒だった。世界平和とかそういうことを願えるほど、私自身に余裕もなければ優しさもない。そんなことが願えるくらい、強くなりたいとは思う。

――私の大好きな人たちが、幸せでいられますように。

とても狭い範囲限定だ。だけど、これがなければ何もできないので、これが一番大事だ。

神頼みが叶うという神社ならば真剣に伝わるように祈らなければと思い、唸るように祈り続けていると隣の影が静かにすっと消えた。ちょっと長すぎただろうか。

一礼して振り返ると、ツギヒトさんは面白いものを見るような目で私を見ていた。就職活動のこととか、そういうことを祈っているように見えたのかも知れない。

「休憩、しようか。あっちに座る場所があったはずだから」

頷いて、先を歩くツギヒトさんに駆け寄る。何だか犬みたいだと思って、自分に笑う。

「ねえ、花ちゃん。神頼みの叶う確率ってどれくらいなんだろうって思ったことある？」

「……確率。小さい頃は叶ったり叶わなかったりでしたね。お願いするというより、宣

誓にも近いです。頑張ります、見ててください、みたいな。最近は漠然としたお願いばかりになって.....だけど、叶えてもらってるような気もします」

「オレはさ、叶わないだろうなって思いながら、神頼みをすることが多かった。だから、実際叶わなくても仕方がないかなって。信心の問題だよね」

「そうですね.....叶わなくても、駄目駄目でも。神様の意地悪、とは思いませんでした。だって、悪いのは私ですから」

「そう自分で言えるのは、素敵だね」

さらりと誉められたことが嬉しくて、恥ずかしくなってペットボトルを口に付ける。ツギヒトさんもペットボトルのフタを開けて、思い切りよく飲んでいる。

静まり返った二人の間に、涼しい風が吹き抜けた。一枚二枚と、まだ緑色をしている葉っぱが流れるように降っている。ツギヒトさんに出会ってから、一つの季節が既に通り過ぎている。もう一つ、通り過ぎることはできるのだろうかと思った。

「花ちゃん。オレさ、家出してきたんだよ」

「え.....？」

唐突に繰り出された言葉に、思わず訊き返した。聞こえていたのだけれど。

「９年前に、三重県からここまで自転車で、家出したんだ。だから、花ちゃんが三重出身だって聞いて少し、慌てたんだ。店長もアキさんも言わないでいてくれたし、花ちゃんも訊かないでくれたから.....自分から話せる時に話そうと、思ってたんだよ」

「それじゃあ.....あの絵は.....」

いなくなってしまったツギヒトさんを思って、探す思いも込めて、誰かが描いたものだったのだろうか。そこには何の説明もなかったけれど――こうして、ツギヒトさんを見つけた人間もいる。

「絵の上手な奴が友達にいたから、多分そいつが描いたんじゃないかって思う。花ちゃんから話を聞いて、本当に久しぶりに思い出したんだ.....色んなことを」

御家族は？ と訊こうとして、私は口を噤んだ。話そうとしてくれているのに、自分から聞き出そうとなんてしなくてもいいと思った。訊かない、というスタンスを守り続けていたのだから、今ここで壊さなくてもいい。

「家出したのは、どうでもいい理由なんだ。別に何があったわけでもなくて、家族にも友達にも大事にされてた.....と思うんだ。家出してしばらくしてから、電話したんだよ。心配しないでほしいって言ったら、家族は頷いてくれた」

ツギヒトさんがいなくなってしまって、家族の人はひどく心配しただろう。傷ついたのだろう。だけど、ツギヒトさんが一人になりたいと願ったことを尊重してくれたのだ。それが正しかったかどうかは、別としても。

「あ、花ちゃん。突然こんな話をしてごめん。.....ここへはさ、実は花ちゃんに家出のことを聞いてほしいと思って、誘ったんだ。聞きたくなかったら、ごめん」

「聞くだけしか、できないですけど.....」

もちろん、勝手に話してるのはこっちだからね、とツギヒトさんは自嘲気味に笑った。

ツギヒトさんがこのことを私に話すことと、アキさんが帰ってきたことが繋がった気がする。

私があの壁の少年と出会っていたことで良くも悪くも、スマイルを取り巻く環境を変化させてしまったのだ。ツギヒトさんは過去の自分を思い出し、アキさんはツギヒトさんが過去と向き合っていると知り、帰ってきた。店長さんはアキさんの帰還を喜びながらも、ツギヒトさんとの別れを何処かで感じ取っている。

私が変化の最初の一打を打ったのだから、責任を持ってここにいなければいけないと

思った。

「甘やかされてたんだ、オレ。周りにいるみんなが、優しい人ばかりで。店長が前に花ちゃんとオレに言ったことがあったけど、本当に恵まれてたんだよ。その内に、恵まれてることに耐えられなくなってきて――」

この人は、私とは逆の理由で逃げてきたのだ、と思った。私は好きだから逃げた。ツギヒトさんは愛されて逃げたのだ。

「こんなにも恵まれててもいいのかって、それに値する人間なのかって。考えはじめたらどうしようもなくなったんだ。優しくしてもらってるのに、オレに返せるものは少な過ぎて。一生かかっても返せないって思った時に、もう要らないって思った」

「私も、ものすごく似たことを考えたことがあります」

ツギヒトさんの独白の隙間を埋めるように、私は思わず口にしていた。ツギヒトさんが顔を上げて、私を見つめている。

もう何も要らない。私に与える必要なんてない。だって私は、何もしてないから。だから要らない。要らない、要らない。何かを持つなんて身の程知らずなこと、もうできない。誰にも優しくできない私が、何もできない私が、生きていてもいいのだろうか。これからも生きていけるのだろうか。

無害な人なんていない。だけど、人の害になるだけなら要らないと思った。

話の腰を折ってごめんなさいと謝り、ツギヒトさんを見ると寂しそうに笑っていた。

「やっぱり、花ちゃんは分かるんだね」

「店長さんに借りた本でこんな話がありました.....お金持ちの家に生まれた男の子は恵まれているという理由で、町の子供たちから嫌われているんです。町の子たちが危ない目に遭った時に真っ先に助けにきてくれるのに。自分は怪我をしても守ろうとするのに。それでも、金持ちがしゃしゃり出て、みたいに言われてしまうんです。その子は、嫌わ

れていることすら受け入れて、悪ぶってみせるくらいに孤独なんですけど優しくて。その子が成長して、初めての友人に言われるんです。恵まれてることは罪じゃないよって。その血の恵みをどう利用するかで、あなたの罪は増減するんだって。店長さんが言いたかったのは、そういうことなんですよね」

思い悩んだとしても、家出にまで打って出られないのは私が弱虫だからだ。ツギヒトさんはかなり悩んで、もう飛び出す以外に道を見つけられなかったのだと思う。だけど、結局家出した先で出会ったのは、優しい店長さんとアキさんだったのだ。そして、優しさの中で９年間も過ごしていたのだから、もう分かっているのだと思う。

「花ちゃんに出会ってさ、オレ、色々と分かったんだ。自虐的なくらい頑張ってみてもいいかなって。だから」

帰ろうと思う。

ツギヒトさんは、そう続けた。だから、私は勢いよく立ち上がり、財布の中から百円玉をもう一枚探した。

――ツギヒトさんが、幸せになりますように！

何度でも同じ言葉を心の中で繰り返す。

ツギヒトさんがいなくなってしまうのは悲しいけれど、９年前に失った人たちのことを思えば大したことではないと思わなくてはいけない、と思う。

「花ちゃん」

ツギヒトさんに肩を叩かれるまで、私は祈り続けていた。

その日の夕方のことだ。

私の携帯電話に、見知らぬ番号から電話が入った。

躊躇いながらその電話に出ると、先日笑顔を誉めてくれた会社からの電話だった。

来週から働けますか？

その言葉に私、は頷く以外の答えを持ち合わせていなかった。

アルバイトを卒業して、アルバイトになる。

今度こそ、本当に逃げ場のない世界へと踏み出す時が来たのだと思った。

玄関でチャイムが鳴る。お母さんが鍵を開ける音がして、私は意を決して部屋のドアを開けて顔を出した。

「ただいま」

「.....おかえり」

一言の挨拶も、私なりの成長の証といえるかも知れない。

五、見栄っ張りの地団駄

五、見栄っ張りの地団駄

どんな風に、話せばいいんだろうと思う。

色々と考えてみたけれど、何も思いつかないまま朝を迎えてしまった。同時に新しい世界への不安が絶えることなく湧き出している。

私はやっぱり駄目人間のままだ。甘ったれで、ヘタレで、一人じゃ何もできない。

泣きたいなあ。泣けたらいいなあ。泣かせてくれるかなあ。

そんなことを考えていたら、少しだけ涙が奥へ引っ込んだ。泣こうって決めたら引っ込むなんて、と少し腹が立った。

スマイルが見えてくると、どう切り出そうかとまた悩んだ。

きっと、喜んでくれる。ツギヒトさんも店長さんも、多分アキさんも。

結局、アルバイトでしか採用されなかったことが残念だけれど、これから自分なりに努力をしてステップアップをしていくしかないと思う。今はそういう時代なのだ。

派遣社員だったり、アルバイトだったり、契約社員だったりで、氷河期のこの御時世にこんな特異なものを正社員にしてくれる大きな心を持った会社はないということだ。

少し生きづらい国だけれど、ここに生まれたのだから仕方がない。

ここはもう、私の実力突破しかない。どれだけの実力があるのかも分からない。自分で自分の能力を把握できていない面も多々ある。

ツギヒトさんがいなくなったら悲しい、なんて思っていた私が一番にいなくなることになろうとは、あの瞬間には思いもいたらなかった。

ツギヒトさんがお店から出てくるのが見える。そして、私に気がついて手を上げた。

「おはようございます！」

「おはよう」

昨日のことがあるからだろうか、少し距離が縮んだような、逆に遠ざかったような不思議な感覚を覚えた。ツギヒトさんはもう、店長さんたちに話をしたのだろうかと思う。

「ツギヒトさん、昨日の、その、お話.....店長さんたちにされました？」

「うん。帰ってから話した」

「あの、私も一つ、報告があるんです」

「じゃあ、みんなで聞かなきゃね。店長もアキさんももういるから」

微笑んだ表情は、私の言わんとするところを理解しているように見えた。

カラン。

いつものベルの音にさえ、感傷的になってしまいそうだ。遠くへ行くわけでもないのに。いつでも会えるのに。だけど、今までの私と同じことをすれば、ここは私の好きだという思いによって切られてしまうかも知れない。切らずにいる方法くらい、知っているのだけれど。

「おう、お嬢」

「迎えに行ってたのかよ、ツギ」

「そうですよ」

からかい気味に言われた言葉に、ツギヒトさんは何の気なしにそう答える。お店から出てきたところに私が来ただけなのに、お迎えになるのだろうか。恐らくはアキさん対策として、軽く流すのが一番ということなのだろう。

「花ちゃんも、報告があるんだって」

「お、そうか。お嬢、もしかしてうまくいったか？」

「あの.....はい。アルバイトなんですけどね、事務員さんとして働くことになりました」

ツギヒトさんに促されて話しはじめると、自然に言葉がすらすらとでてきた。昨夜あれだけ悩んだというのに、そんなことが馬鹿馬鹿しく思える。

「よかったね」

そう言ってツギヒトさんは笑い、「これから大変になるね」と少し同情したように付け足した。店長さんもそうか、と手を叩いて祝福してくれた。アキさんは何だか膨れっ面で、「コメントを差し控えさせていただきます」と言った。

「でも、よかった、でいいんだよね？」

はい、と私は頷く。まるで私が逃げようとしていたことがバレているかのようだけれど、ツギヒトさんならこれくらいのことは分かるだろうと思った。

「明日.....金曜日ですよね。明日までここで働かせていただけますか」

「その辺は最初っから、お嬢が仕事を見つけるまでって話だったからな。お嬢に任せる」

「仕事は来週の月曜日から、なんですけど、ちょっと心の準備が」

「そんなんで大丈夫か、ハナコ」

「あ、心配してくれてるんですか？ アキさん」

「んなわけねえだろ！」

口を尖らせたアキさんの服装がいつもと違うことに気がつく。白いワイシャツに黒っぽいジーンズなんて、地味な格好をしていることが奇跡のようだ。いつもの趣味の悪い柄物の服は何処へ行ったのだろう。

そうだ、と思った。ツギヒトさんがいなくなってしまうからだ。

じっと服装を見られていることに気づいたのか、アキさんは舌打ちをしながらエプロンを取りに行った。その後姿をちらりと見た店長さんが、笑いを堪えている。

「アキさーん！ 私もエプロンくださーい！」

奥の方から意地の悪い速さでエプロンが飛んでくると、私の顔の目の前でツギヒトさんがキャッチしてくれた。困った顔で笑ったツギヒトさんの手から、私は少し大きめのエプロンを受け取る。

「アキさん、怖い！」

「ツギ、余計なことしやがって。ハナコ、俺様にエプロンを取ってもらおうとするならキャッチしてみろってえの」

「不意打ちは卑怯ですよ！」

「はい、もう終わり。店、開けますよ」

私とアキさんの間に割って入ったツギヒトさんは笑いながらそう言うと、ドアの方へと向かう。アキさんは気まずそうな顔をしながらも、私の隣に立った。

「ハナコ」

「はい？」

「お前に、ほんの少し、感謝してる」

「へ？」

「お前が、空気の読める奴でよかった」

「何ですか、それは.....」

ごくごく小さな声でそれだけ言うと、アキさんはカウンターの中に入っていった。

私はその場でさっとエプロンを着用し、大きく深呼吸する。目前にある、店長さんとアキさんと、ツギヒトさんのいるこの狭い世界がとても好きだ。当たり前のようにここに立ち、過ごしていた日々が宝物だったのだと今更ながらに思う。

今、現在は、来週の私からしてみれば、奇跡のような本の中の話のような存在になっているのかも知れない。カウンターの中に入れる権利も、明日には奪われてしまう。いや、奪われてしまうのではなくて、自分がそれを置いていくのだろう。

このカウンターもトレイも、ドアの鍵も全てのものが遠く触れられないものになる。

声の届かないところへ、私が行く。それは結果的に、ずっと心から望んでいたことのはずなのに、悲しくて仕方がない。

だけど、ここで育ててもらった私が、もっともっと成長しなければ振り返れない。幸せなことに、私は一番辛い時にこの人たちに出会えた。

もしかしたら。私が今、幸せなのは。幸せだという思いで、悲しいのは。

例えば、世界平和を神頼みしてくれる人がいたとして。きっとそんな人の優しさとか、悲しさとか、沢山の思いが残っているから、私たちは幸せだと感じられるのではないだろうか。

だから、幸せになりたい。私たちを幸せにしたいと、思ってくれた人がきっといるから。私たちの幸せを見たがっていた人がいるから。

誰かなんて分からないし、誰をなんて考えてもいなかったのだろうけど。

私も思うから。幸せな笑顔が見たい、と。みんなが幸せだったらいいな、と。

きっと死んでしまった後でも、この世をふらふらしながら、誰かの笑顔があるだけで嬉しくなれると思う。

ずっとずっと見守っていたいような、ずっとずっと見守られているような。

いつまでも傍にいたい。そんな気持ち。誰かの思いをずっと抱えて生きていく。

私の思いも、その中に加えられて。名前や記憶は消えてしまうけど、きっとその重さは消えない。生きている命の分だけ、増えていく。

私たちはものすごい重さの、優しさを受けている。

ありがとう、と言いたい。それともう一つ。私は幸せだよ、と伝えたい。貴方たちがいたから、私は幸せだって。

巡りめぐって、私のしたことも還ってくるといいな、と思った。

カラン。

「「「「いらっしゃいませ！」」」」

四人の声が不自然なほど自然に揃い、今日一番のお客様の来店を迎えた。きょとんとしたその人は、一秒後には照れくさそうに笑ってカウンターに腰掛けた。

ここに残る人間だという決意からだろうか、率先してアキさんが接客に向かう。

こんなにのんびりした時間は、四人もいると仕事が見つけづらい。私が消えることが必然のような気もした。新しいスマイルが、そこに見えた気がした。

「店長さん。私、窓の外側を掃除してきてもいいですか？ このお店への恩返しも込めて、

しっかり綺麗にしますから！」

「そうか？ ありがとな。じゃあ、頼む」

腕まくりをして、お任せくださいと笑う。裏口にあったバケツと雑巾とを使わせてもらえるとのことだったので、それを抱えて外へ出た。

「ハナコ。これ、使え」

「え？ あ、洗剤ですか？ ありがとうございます」

泡の出る窓拭き用洗剤を受け取って、それを窓にしゅわしゅわと吹き付ける。高いところは自分の背丈よりももちろん高いので、雑巾に泡をつけて踏み台に乗ってそのまま拭いた。

砂とも泥ともとれる黒い汚れが雑巾を染めていく。拭いた部分だけが浮き上がるように透き通った。

「二度拭きしないと綺麗にはならないかな」

雑巾で拭いた跡が線のように伸びていて、一見すると綺麗になったようにも見えるけれど、じっくり見ると気になる汚れだ。こうして綺麗にしたところで、また雨が降れば一緒なのだろうけれど、これは感謝の気持ちを表しているのだからよしとする。

窓の外からお店の中を覗く。三人が笑い合っているのが見える。時々、ツギヒトさんが私の視線に気づいて笑いかけてくれた。その様子に気づいたアキさんが意地悪な笑みをこちらに向ける。店長さんはいつもの片方だけのにやりだ。

ここを卒業しても、私に気づいてくれたらそんな表情を見せてくれますか？

人に忘れられやすかった私だから。私は覚えているけれど、忘れられてしまうから。特徴のない顔、特徴のない性格。それでも、覚えていてくれますか？

今までの友達にはそう訊くことができなかった。だから、不安が先に立ってしまって、自分から消えるようにいなくなることしか思いつかなかった。

駄目人間でも、覚えていてもらえることは、とても嬉しい。本当は何よりも喜びを感じているのに。覚えていてほしい、なんて言えない。

「花ちゃん、オレも手伝う。高いところ届かないよね？」

背伸びをして高いところを限界まで拭こうとしている私に、背中から声をかけられた。腕が限界を訴えていたところだったので、とても素晴らしいタイミングだと思う。

「オレの方が恩返し、必要だと思うし」

「９年分、ですか？」

「そうそう」

「中、大丈夫なんですか？」

「大丈夫だって。というか、これからは二人になるから訓練だってさ」

「.....アキさん、お仕事辞められたんですか？」

「そうらしいよ。元々、飲食の会社だったみたいで、勉強も兼ねてたんだって言ってた。それって、帰ってくるつもりだったってことだよね」

「そういうの、アキさんだなって思いますね」

「ホントにね」

お店の中に目を向けると、二人はテキパキと各自の仕事をこなしている。いなくなってしまう空間を埋めるものはいつだってすぐに見つかるのだと思う。

「あのさ、花ちゃん」

「はい？」

自分の届くところだけ二度拭きを始めていた私は、バケツの中でじゃぶじゃぶと汚れた雑巾を洗いながら顔を上げる。ツギヒトさんは高いところからこちらを見ていた。

「最近オレ、花ちゃんに頼りっぱなしのような気がするんだけどさ……そこでまた、花ちゃんが大変な時だって分かってるんだけど、その」

「頼られた覚えはないんですけど……ツギヒトさんのお願いなら何でも聞きますよ？ もちろん、私でよければ、ですけど」

悩んだ顔をしたまま、台から下りたツギヒトさんが確認するように窺っている。私は胸を張る仕草をして見せて、にっこり笑ってみる。今度は困った顔になり、ツギヒトさんは微笑すると頷いた。

「今、すごく色々と心配で準備とかもあると思うんだけど」

「いいですよ、そんなの。何ですか、言ってください」

「今度の土曜日……一緒に三重に行ってもらえないかな」

直ぐに帰るつもりはないと言っていたから、下見のような形で帰るのだと思った。私がその願いに、否と答えるはずもなかった。即答だ。

「いいですよ。あ、壁の絵にも案内したいですし、是非。ご一緒させてください」

ツギヒトさんはあまりに私が素早く返事をしたこともあって、一瞬呆気に取られたような顔をしていたけれど直ぐに安心したように笑んだ。

「ありがとう、花ちゃん」

そう言ってツギヒトさんは台にまた上がり、窓のギリギリ端まで綺麗に拭きはじめた。

昨日、ツギヒトさんの手助けもあって窓拭きは無事終了していたので、今度は花壇に生えた草をむしる作業をしていた。

店の中は正午を過ぎた時間帯ということもあって、人が多く入っている。私はもう手伝わなくてもいいのだろうと、少し自分で自分を仲間外れ扱いしながら外に出ていた。

軍手が土の色に汚れる。草むしりなんて、いつ振りだろうか。小学生の頃から、土の中から出てくる幼虫などが苦手で嫌いだったことを思い出す。草の匂いも、懐かしい。

ゴミはほとんど見当たらなかった。毎日付近を掃き掃除しているツギヒトさんが、見つけては処分してくれているからだろう。

「あれ？ お姉さん？」

「あ、こんにちは。どうしたの？ こんな時間に」

不思議そうな声をかけられて振り返ると、そこにはヤサオ君がいた。学校はまだ終わっていないはずなのに、私服でそこに立っている。

「風邪引いちゃったんで、学校休んだから。病院の帰り」

「え、大丈夫？ 親御さんはお仕事？」

「俺、高校生だよ？ 一人で病院くらい行ける」

「そう？ お家近いの？ 送ろうか？」

「大丈夫だって。お姉さんこそ、何してんの？」

「自主的な掃除当番」

「何それ」

ちょっと咳き込みながら笑うヤサオ君に、私は立ち話をさせてしまったことに後悔した。早く帰らせてあげないと、悪くなってしまうかも知れない。

「早く帰ったほうがいいね。悪化したら大変」

「いいよ、そんなの」

もしかしたら、帰っても誰もいないのかも知れない。親御さんが働いていれば仕方ないけれど、だから帰りたくないのかなと思う。そうはいっても、そのままにもしておけない。

「やっぱり、送る」

「いいって、それよりさ。お姉さん、辞めるってホント？」

「へ？ 誰から聞いたの？」

「……ホントなんだ。そっか。昨日もお姉さん、掃除してただろ？ その時、そんな話をしてたのを聞いたって友達が」

ツギヒトさんと今度から勤めることになる会社の話をした覚えはある。横を誰かが通り過ぎていても、私は見逃しているだろう。まさか、そんなところで話を聞かれているとは。

「よし。待ってて。やっぱり送る」

お店のドアを開けて一番近くにいたアキさんに病人の友人を家まで送ってきますと宣言し、アキさんが何を言う間もなく飛び出す。ぽかんとしたヤサオ君が待っていて、私は隣に並んで背中を押した。

「さ、帰ろう。どっち？」

「……こっち」

私の勢いに負けたのか、ヤサオ君は大人しく自分の帰り道を指差した。直ぐ近くなのかも知れないと思ったのは、ヤサオ君の歩き方がひどく遅かったからだ。

「私ね、就職浪人なのね。就職難民というか。ここには、仕事が見つかるまでいてもいいよって言ってもらって、それで働かせてもらってたの。結局、氷河期なのに変わりはないから、アルバイトしか見つけられなかったんだけど」

「そうなんだ」

「これからもスマイルをご贔屓に。アキさんがいるから、いつもみたいだったら怒られるかも知れないけど。あの人も見た目より優しいから、大丈夫」

「お姉さんさ、ハナって名前なの？」

突然名前を訊かれて、それでもツギヒトさんが名前を呼んでいることもあるので知っていてもおかしくはないと思った。アキさんが「ハナコ」なんて呼ぶのでどっちが本当の名前なのかが気になったのだろうか。

「うん。お花畑の花。そういえば.....名前、訊いたことなかったね」

ヤサオ君という名前を勝手につけていることは、ここでは内緒だ。自分が個々を判断する為だけにつけた記号のようなものだし。

「俺はカツミ。克服のコクにオノレって書いて克己」

「いい名前だね。カツミ君」

ガリガリ君もキツネ君もモグモグ君も、本当の名前を訊けずじまいだった。カツミ君の名前を知って思うのは少し感傷的な思いだ。

「俺ん家、そこなんだ。いいって言った意味が分かっただろ」

「こんなに近くに住んでたんだね、不思議」

小走りで玄関まで行くカツミ君を眺めていると、その先で手招きしている。私も同様に小走りで追いかけていくと、家のポストをカツミ君は指差していた。

「俺の妹、花っていうんだ。お姉さんと一緒だろ」

「漢字も一緒だ。今まで同じ名前の人ってそういえば会ったことないなあ」

「俺も。いそうでいなかったから、ちょっと珍しかった」

「そうだね」

玄関先の階段を一歩上がって、少しだけ具合が悪そうなカツミ君が振り返る。早く家に入ったほうがいいのに、と思うけれど何かを言おうとしているので、じっと待った。

「.....花さん。俺らのこと、忘れないよね？」

「忘れないよー。カツミ君たちの方が先に忘れると思うけどなあ。私、かなり記憶力いいから」

「言うね。俺もかーなーり、記憶力いいから。勝負だね」

「うん」

「何処かで見かけたらさ.....声、かけてもいい？」

「うん」

「無視すんなよ？」

「しないよ」

きっとこの先、声をかけづらくなるのは私ではなくカツミ君の方だと思ったけれど、ここではそんなことは言わない。今こうして、寂しそうにしてくれていることが嬉しいから。

「早く横になるんだよ。ちゃんと治して」

「うん。じゃあね、花さん」

「カツミ君、またね」

手を振ると高校生の男の子らしく照れながら、それでも小さく振り返してくれた。私の命名に間違いはなかったと思う。ヤサオ君改めカツミ君は、やっぱり優しい。

高校生君たちとも会えなくなると思うと、また寂しい気持ちになった。いなくなった人間は忘れられるのも早いと、誰よりもよく知っている。

早足でその場を去るように、お店へと向かって歩き出す。お客が何人か出て行くのが見えたので、もうお昼時の忙しさは終わりを告げているのだろう。

表から入ろうかと思ったけれど、裏口から一度手を洗って入ろうと裏へ回る。戻ってきたことをアキさんに報告しなくてはと思った。勝手にさっさと出てきてしまったので、少し怒られてしまうかも知れない。

すると、お客もほとんど帰ってしまっているようで、三人の話し声が聞こえてきた。

「ツギ、ハナコが来て、よかったな」

アキさんの口から私の名前が出ていたので、思わず足音を忍ばせてしまった。入り口の近くで入りづらくなってしまい、立ち止まる。聞いてはいけないと思い、もう一度外に出てしばらくしてから出直そうと足を踏み出そうとした時、ツギヒトさんが頷く声が聞こえた。

「あれだけ、お前と似てる人間がいるとは思わなかった。お前ら、気の遣い過ぎでハゲそうだよな」

「どうしようもないことを、悩みがちなとこもな。それがまた、悩むなって言ってもやめられねえんだから仕様がない」

店長さんの声もする。自分の話題を盗み聞きするなんて、とんでもないと思うのだけれど、何故かその場から動き出せずにいた。これから駄目なところの話がはじまるかも知れない。そうしたら泣いてしまうかも知れないのに。

「お前は、許されたかったんだろ？ 何から。どうして。そんなもん知るかって俺なら放置しとくもんだが、あいつは違ったな」

「多分、気付いてないとは思いますけどね」

「ハナコは何も知らねえくせに、お前を許してたからな。あいつにとって許すっていうのは、簡単なことなんだろ。自己否定に必死だから」

自己否定に必死。その通りだ。図星を突かれて少し打撃を受ける。早くここを立ち去ってしまえばいいのに、どうして動き出せないのだろう。

「よかったな、ツギ。ハナコを拾ってきて、本当によかったな」

アキさんのそんな優しい声に、そして頷くツギヒトさんと店長さんの声に、気づけば涙が頬を流れていた。

迷惑ばかりかけているのに。救われたのは私だというのに。私を拾ってよかったと、そんな風に言ってくれる人たちがいることに、奇跡を感じた。こんな時、他の人ならどう表現するのだろう。私には分からなかった。だから、こっそり裏口からまた外へ出た。

感謝しているし、もらっただけでも返したいと思うのに、返せない。そんな苦しみから逃れようとして家出したツギヒトさんの思いが、また深く理解できる。

静かに涙を拭いて、草むしりを続けることしかできなかった。

「今まで、お世話になりました」

お店が閉まり、三人が揃ってやっとその挨拶ができた。

「直ぐに泣きながら帰ってくるんじゃねえの」

「帰ってきてもらっても、大歓迎だ。馬鹿息子と二人じゃあ、客も寄りつかないしな」

アキさんが私の頭を撫でるように、ぐしゃぐしゃに掻き回した。この人の意地悪な行動は優しさの裏返しだ。もう泣きそうだ。

「ま、そんな顔するな。お嬢。これだけ近くにいるんだから、その辺で会うだろうよ。お嬢が遊びに来てくれれば一番だがな」

「いっそ、常連になれ」

「常連に、なりますー」

じわじわと涙が滲んできたけれど、もう我慢できそうにないのでそのままでいる。元々泣き虫な私のことだから、それほど驚かれることもない。

「永遠の別れって訳じゃあるまいし.....お嬢」

困った声を出しているのは店長さんだ。以前に泣き出した時も、どうしていいものか悩んで慌てたようになっていたのを思い出す。あの時は、店長さんが私のことを考えて用意してくれていた本に、救われたのだ。

「お嬢。これ、貸してやるから」

今偶然にも思い出していた過去と重なるように、店長さんはカウンターの下に隠されていたような紙袋を差し出した。その中には文庫本がぎっしり詰まっている。

「返しに来たら、また貸してやる」

「お前のことだから、借りっぱなしで逃げることはねえだろうなあ」

私の性格を把握している店長さんだからこその技だ、と思った。

本を借りているから絶対に返しにいく。きっと時間が開いてしまったら逃げ腰になる私に、スマイルへやって来る理由を作ってくれたのだ。

「ありがとう、ございますー.....」

「ツギを迎えにやるわけにもいかねえからな」

その言葉に苦笑したのは、ツギヒトさんだ。

「お前が俺たちのことを嫌いだっつーなら、何も言わねえけど。そうじゃねえなら、遠慮なく来い。ツギ、お前もそうだ。気ぃ遣うな、勝手にこっちが迷惑するんじゃねえかとか決め付けんな。分かったか？」

「「はい」」

嫌いなわけ、あるはずがない。ツギヒトさんと私の即答はそんな思いも含んでいて、きちんとアキさんと店長さんに届いているはずだ。アキさんにここまで言わせてしまっているのだから、いつか弱気な自分の気持ちと出会った時、返り討ちにできるだろう。

「ま、そういうことだから。湿っぽいのは終わりだ」

アキさんはそう言って、私にタオルを一枚投げてくれる。涙をごしごしと拭いて、僅かにファンデーション色になってしまって少し焦った。

「明日はお前ら、またデートなんだろ？ さっさと帰れ」

「お嬢、こいつのこと、頼んだぞ」

ツギヒトさんの首根っこをつかむ動作をして、店長さんがにやりと笑う。

「あの！ 本当に私、ここにまた来てもいいですか？」

裏口からではなく、お店の入り口から出ようとして尋ねる。私の後ろに続いた店長さんとアキさんが何言ってるんだ、と少し怒った顔をした。

「いいに決まってるだろ」

決まってる、という決め付けた言い方が普段は苦手だったのだけれど、こんな状況で使われるととても素晴らしい表現のように聞こえる。何とも自分本位だ。

「私、大好きな人とは必ず離れてきたんです.....自分でそうしてた部分もあって。だけど、離れてきたから離れない方法を知ってるんです！ それは、いつもその人に会いに行くことなんです！ 大好きだってことを伝えるためには、それを続けなきゃいけないって分かってるんです！ だから.....ウザイくらいに、いつも来ます！ 覚悟はいいですか？」

こんなことを言うのは、人生で初めてだった。頷いてくれると信じているから、言えた言葉でもあった。

「望むところだ」

「その言葉、忘れんなよ」

この間と同じように紙袋を持ってくれているツギヒトさんが、私の隣で声を上げて笑っていた。そのままツギヒトさんは自然に自転車のカゴへ紙袋を乗せ、私が追いつくのを待っている。

「気をつけて帰れな」

「はい」

いつもより少し長く、それでもいつものことのように私を二人は見送ってくれた。ツギヒトさんが自転車にまたがったので、それに倣ってついていく。

「お疲れさまでしたー」

振り返って手を振る。店長さんは大きく、アキさんは軽く手を上げただけだったけれど、そんな様子が見えてまた涙が出そうになった。もしかしたら、明日また行ってしまうくらいのことはあるかも知れないけれど。ここでのアルバイトの区切りは今日だ。

「さっきの、よかったね」

「え？ さっきのって？」

「『覚悟はいいですか？』」

自分で言っておきながら、こんな風に繰り返されるととても恥ずかしい。絶句してしまった私に、ツギヒトさんはごめんごめんと笑いながら謝ってくれる。

「オレも使おうかな、と思った」

「じゃんじゃん使ってください。言った後で少し、恥ずかしくなるのを耐えられるようでしたら」

ヤケ気味に返すと、ツギヒトさんはツボに入ったのか、まだ笑っている。だけど、この雰囲気に救われている。湿っぽい空気が何処かへ吹き飛んでいったようだ。

「ツギヒトさんは.....いつまでこっちにいるんですか？」

「それは、まだ。明日行ってみて、また逃げ出したくなるかも知れないしね」

「あの絵を見たらきっと、そんな気もなくなりますよ」

「そんなによく似てた？」

「雰囲気がとても。.....ただ、私もしばらく会ってないので、なくなってたらどうしようって思ったりもしてます」

「会ってない、か」

「この人は愛されてるんだろうなって、絵を見ただけで分かりました。何故か、実在する人だって信じきっていたんですよ。会えるとは、思ってなかったですけど」

「花ちゃんが見つけてくれなかったら、オレは一生帰らなかったかも知れないね」

「そんなこと、ないです。多分ツギヒトさんは、自分と向き合っていつかは帰っていたと思います。だって、アキさんも店長さんもいますから」

ツギヒトさんは答えなかった。

私が見つけてしまったせいで、この先の未来がおかしな方向にいってしまわないことだけは祈らずにはいられない。いいことなのか、悪いことなのか、私は判断することができないだけに、不安も抱えている。

「私は。私のことですけど、ツギヒトさんたちに出会えてよかったと思ってます。弱気で立ち直れない気がしてたんです……だけど、的確なやり方で手を引いてもらえたから。だから今、スマイルを卒業できたんだと思います。もちろん、これからなのであまり強気な発言は控えた方がいいとは思うんですけど……そんなこと言えちゃうくらいに力を蓄えた気になってます」

眠れない夜のやってくる頻度が減り、吐き気がするほどの苦しみも、じっと離れることのなかった耳鳴りも薄らいでいた。

父親との諍いは未だに絶えないけれど、挨拶をするだけの勇気を持つことはできた。これから少しずつ、会話をしていけたらいいと思う。ツギヒトさんが言っていたように、好かれている可能性を疑ってみることにしたのだ。

悪いことしか、起こらないと思っていた。あの日、ツギヒトさんに出会わなかったら。大切な本が雨に濡れて、また自分の中に閉じこもって落ち込んでいただろう。

駄目人間な自分から目を逸らして、本の中に逃げ場を見出して生きることしかできなかった。現実離れした本ほど読みたい時期があった。想像すら難しいほどの別世界で、私はもう一つの命を得たいと願っていた。

だけど、現実の世界で。物語のような出会いを自分が経験して。嘘のように優しい人たちが存在すると知って。私の人生が小説になったような気さえした。

この出会いが、悪いことのはずがない。

できるだけ長く長く生きて、この物語の続きを読まなくては。

「オレも、会えてよかった」

意味もなく、心臓が鳴った。意味はない、はずだ。

「何も分からなくていいって、何も分かってくれなくていいって思った。花ちゃんと出会ってから。そこにいてくれるだけで、心配してくれるだけで嬉しかった」

言葉が見つからなかった。私から言えることは何もない、と思った。いるだけで何かの役に立てていたなんて、それは何よりの誉め言葉だった。

「ありがとうね、花ちゃん」

「……ツギヒトさんも、覚悟はいいですか？」

咄嗟に飛び出た私の言葉に、ツギヒトさんは優しく微笑んだ。こんなにも近くで、壁の絵の少年が生きている表情を見せてくれている。なんて、私は幸せなんだろう。

「花ちゃんこそ、覚悟はいい？」

そう返されるとは思っていなかったので、また言葉に詰まった。だけど、ツギヒトさんがそう言ってくれるのなら、覚悟なんて幾らでもできる。

「覚悟します！ 覚悟させてください！」

「こちらこそ」

自転車のカゴから紙袋を持ち上げた手が、そのまま私の手を握り締めた。お互いに頑張ろうと励まし合うような、そんな握手のようにも思えた。

「ありがとうございました。また、明日」

「うん。明日の朝９時頃、ここまで迎えに来るから。……あ、そうだ」

私が紙袋を受け取ると、ツギヒトさんが自分のジーンズのポケットを探りはじめた。しばらくして出てきたのは、小さく折られたメモ帳のようなものが二枚だ。

「これ、店長とアキさんから。メールアドレスだって。恥ずかしいから渡してくれって頼まれたんだ。あとこれは、オレのメールアドレス。どんなことでもいいからさ、たまにはオレたちにメールくれたら嬉しい」

「あ、はい。帰ったら直ぐ、メール送りますね」

「うん。じゃあ、またね」

ツギヒトさんが自転車に乗って遠く見えなくなるまで、紙袋を握り締めたまま、私は手を振って見送り続けた。

テレビの中から聞こえる星占いを気にかけながら、ベッドに腰掛けて時間を確認する。

もう８時だ。９時頃の約束なので、あと一時間弱ある。星占いの前半部分に私の星座が出てこなかったので、最下位だったら見たくないと思いテレビを消した。

ベッドに放り出してある携帯電話を片手に、三つの受信メールを何度も何度も見返す。

昨日、家に戻ると直ぐにツギヒトさん店長さんアキさんのメールアドレスを登録し、自分のメールアドレスを連絡する為にメールを送った。すると、素晴らしい早さで三通のメールが届いたのだ。店長さんとアキさんは競争していたのかと思えるほど、ほぼ同時にメールが来たので笑ってしまった。

一歩早かったアキさんからのメールは「ハナコのアホ」と一行だけ。店長さんからは「これでメル友だ」とアキさん同様、一行だけのメールが着いた。

もう少し何か書いてくれてもと思ったのだけれど、二人にそれは難しいだろうと自分で納得することにした。そして、その後届いたツギヒトさんのメールも一行だった為、男性陣に長いメールを期待してはいけないのだと知った。男の人とメールなんて、したことがないのだから分かるはずもない。仕方がない。

ツギヒトさんからの一行は「明日、楽しみにしてるね」と書かれていて、ベッドの上で転がるくらいの威力が私にはあった。普段から言いそうな言葉で他意はないのだろうけど、最近の私にはこんな一言でさえも心臓に来るものがある。

ディスプレイをぼんやりと眺めていると、メールの絵柄が流れるように現れた。大好きなアーティストの曲が、オルゴールの音色で響く。ツギヒトさんだ。

「ええと――今、店を出ました。早く着くかも知れないけど大丈夫かな？ あ、うわ、急がなきゃ」

三人からのメールをしつこく繰り返し見ている間に、いつの間にか時間が過ぎていたようだ。慌てて薄い上着を羽織り、携帯電話をカバンにしまう。

「行ってきます！」

リビングの方まで顔だけ出して声をかけると、父親の「行ってらっしゃい」という声が聞こえた気がした。お母さんは私の後を追いかけている。

「気をつけてね」

「鍵、かけてね。行ってきます」

少しだけヒールの高い靴を履いて、コツコツと音を立てながら振り返ってお母さんに手を振る。エレベーターではなく階段を駆け下りるようにして地上に辿り着くと、カバンから携帯電話を取り出した。

「えーと.....下で待ってます、でいいかなあ」

待ち合わせ場所にはもう着いているので、気分が落ち着いた。ツギヒトさんの姿がまだあるはずもないので、メールの返事をゆっくり書いて返信する。

ツギヒトさんが来るのを待つのは、何故だか楽しい気分だ。小さな子たちが通り過ぎて

いく姿も、何もかもが幸せな風景に見える。

子供たちは集団で野球か何かをするのだろうか、広場の方へと向かって走っている。その中にこの間、転びそうになったのを助けた男の子がいた。直ぐその子に気がつけたのは、一人だけ私の方を向いてのんびりと走っていたからだ。

今日はスカートをはいていて、膝に大きめの絆創膏が目立っていたので、あの子も気になったのだろう。平気だと伝えようと思い、笑顔で手を振ると少し離れたところで頭を下げているのが見えた。

いい子だ。この間は驚いて逃げるように行ってしまったから、私としても余計なことをしたのではと思っていたけれど。お礼を言い逃したと、反省してくれていたのかも知れない。

「この間の子だよね」

子供たちが走っていたのとは逆方向から声をかけられて、一瞬びくっとなってしまった。その声は間違いなくツギヒトさんのものだったので、そこまで驚かなくてもよかったのにと自分に恥ずかしくなる。

「おはよう。ごめん、驚かせた？」

「いえ、あの、気を抜いてました」

「もしかして、いつも気を張ってるの？ オレと一緒の時？」

恥ずかしくなってしまったので、自分から歩き出してツギヒトさんの先を行くと、そんな怪訝そうな声が投げかけられた。表現を間違ったかも知れないと思うけれど、今更取り消すこともできないので黙ってしまう。

ツギヒトさんと一緒にいる間、無理をしていると思われてしまうのは嫌だ。だけど、今の言い方だと、ツギヒトさんがそう疑っているように聞こえた。

うーん、と唸るように考え込んでいると、ツギヒトさんが隣で吹き出した。

「ごめ.....いや、ごめん」

「え、何かおかしかったですか？ 私、何かしました？」

「そうじゃなくて、さ。変な質問したよね、ごめん」

「いえ、ええと、その、気は張ってると思います。ふにゃふにゃでツギヒトさんと一緒にいるっていうのも失礼な話ですし」

「ふにゃふにゃ.....それも、見てみたい気がするけど。ごめん、オレも気を張らないわけないなって思った。オレだってそう」

駅の構内に入ると、ツギヒトさんが私の分の切符も買ってくれた。付き合ってもらっているのは自分だから、そう言われて返答する間もなく押し切られてしまった。私も故郷へ帰るようなものですから、と返すべきだっただろうか。帰りにはきっと、そう言おう。

「私、駅裏の方に住んでたんですよ。ツギヒトさんは表の方から行ったところですよね？」

「そう。あの辺だと地区が違うから、子供会とかでは会わないね」

「ですね。ええと、私が中学二年の時にあの絵を見つけたんだから.....九年前で.....ツギヒトさんの年齢が？」

「九年前に高校卒業して家出したんだよ」

「十九歳の年に家出したってことは.....二十八歳？」

「今年二十八歳。まだ二十七歳」

「五つ年上なら、私が一年生の時に六年生ですね。一緒に遠足とか行ってたかも。何組でした？」

「オレ？ 確か、Ａ組」

「あ、残念。私はＢ組です。偶然手を繋いでたお兄さんがツギヒトさんだった、なんて奇跡のような偶然があったら感動したんですけど」

「もう充分、奇跡みたいだと思うけどね。オレのことを絵でしか知らなかった花ちゃんが、本物のオレとあの店で会うなんてさ」

やって来た電車に乗り込みながら、ツギヒトさんが呟くようにそう言った。私が常日頃から感じている奇跡を、奇跡だと言ってもらえたことが嬉しかった。

一人ずつなら座れる席はあったけれど、私たちはドアに肩を預けるようにして二人並ぶ。

以前、大学から実家に帰る時によくこの電車には乗っていた。目前に広がる景色は、大学生時代の自分を思い起こさせる。大学へ行っている間、九州の方言に疲れてしまうこともあった。そんな時にこの電車に乗ると、進めば進むほど懐かしい方言が飛び交う電車になっていき、ほっと落ち着ける気がしていたものだ。

一駅、一駅と乗車客が乗り降りする度に、三重県の住人の割合が増えているのが分かる。馴染みのある方言が、高校生の女の子たちから発されているからだ。部活で学校に行くのだろう。日に焼けた女の子たちの楽しそうな声に、羨ましい気持ちが湧く。

捨ててしまったけれど、私にもあった。とても幸せで、楽しくて、それなのに逃げ出したかった、かけがえのない大切な思い出だ。

隣にいるツギヒトさんを見ると、外をじっと眺めている。様々なものを抱えて、私と同じように過去へと思いを馳せているのだろう。声をかけようとして、やめる。

ドアに背中をもたれさせて、電車の中に吊られている広告に目をやった。そこには何冊か持っている作家さんの新刊が発売されるとある。思わぬところで嬉しい発見だと思い、カバンから手帳を取り出して発売日にメモ書きをした。

「何してるの？」

「あ、あの作家さん、好きなんです。新刊が出るって書いてあったので、発売日を書いておこうと思って」

隣でがさがさしている私の行動に気がついたツギヒトさんに、そう説明する。ツギヒトさんは頷きながら、私の見ていた広告を端から見ているようだった。

「前は、本の発売日が早く来てほしいっていつも思ってたんですけど、今はあっという間で.....ちょっと怖いです」

「年取ると、時間が過ぎるのが早いからね」

「そうなんですよね。直ぐに次の話が出てきちゃうから慌てて読んでって、待ってたはずなのに追いかけてる時があります。そんなだから、終わっちゃうのも早い」

「なるほど.....終わるのが早いんじゃなくて、オレたちの時間の進み方が早くなっただけっていうことだね」

「最終回はできるだけ読みたくないんです。好きなシリーズなんて特に。自分の想像では未来を補完できないですし.....だけど、大分経ってから続編が出たりすると、もう読めなくなってたりするんですよね。不思議なんですけど」

「花ちゃんはさ、どうして本をそんなに好きになったの？」

そういえば、ツギヒトさんと出会った理由も本だったなと思う。

どうして好きか、と訊かれると答えられる理由が直ぐには思いつかない。好きだから好きというのが恐らく答えではあるのだけれど。

「ごめん、また変なこと訊いた」

ツギヒトさんが謝ってくれたのと同時に、私は一つの記憶を手繰り寄せていた。好きという思いよりも先に、読みたいという思いが生まれた日のことだ。

「.....私、字がまだ読めない頃、大好きだった絵本があったんです。それをお母さんとか、おじいちゃんにおねだりして読んでもらっていた記憶があるんですよ。自分一人で読みたい。だけど、文字が読めない。だから、丸暗記するしかなかった」

「へえ、すごいね」

「絵を見たら大体話も分かりますしね。もう何十回と読んでもらった本でしたから。その時に悔しかったのを覚えてるんです。早く文字が読めるようになりたい！ って」

「何歳くらいの話？」

「保育園に行く頃には字が書けてたので.....三歳くらいです」

「賢いね」

「文字に関してだけ、努力してましたね。それからまた経って、小学一年生くらいの頃なんですけど。お母さんが読んでいた推理小説か何かを、パラパラとめくって読んでみたことがあったんです。子供の本とか漫画ってフリガナが振ってあるじゃないですか。だけど、その本はフリガナがなくて、それ以上に驚いたのが言葉の意味が分からないということでした。今でも、哲学書とか読んでると頭がおかしくなりそうになりますけど、まさにそれだったんです。言葉を知らないと気付いて、焦りました。早くこんな本を読めるようになりたい！ これが次の目標です」

「そういう経験って何だか羨ましいな。そんな風に考えたことが一度もなかったから」

「それからは色々と読みましたし、広辞苑が好きだったので読みながら気になった言葉を書きとめてみたり.....ちょっと変な子ですよね」

「努力してでも読みたいと思うくらい、好きだったんだね」

車窓の景色が見慣れた景色に変わった。もう直ぐ、到着だ。まだ引越ししたのが半年前

のことなので、変わったというほど変わっていない。

「本を読んでいる間だけは、別世界にいられましたから。時々、入り込みすぎて現実がどっちだったか分からなくなったこともあります。あ、もう着きますね」

高架も何もない、駅構内に踏切がある田舎の駅だ。それでも、懐かしい故郷の駅だ。まだ自動改札も設置されていなくて、駅員さんが降りてくる人を待ち受けている。

「ツギヒトさん、あの辺が私の住んでたところですよ」

「田んぼの真ん中だね」

「蛙が苦手なんですけど、家の中にも入ってくるんですよー。ああ、懐かしい！」

「駅前の本屋、なくなったんだ」

「あ、入ると何も買わずには出られない本屋さんですね？ 私が高校生の頃にはもうなかったですね。寂しかったの覚えてます。あそこって雑誌の常連さんがいましたよね。取り置きしてもらってるの、見たことあります」

駅員さんに笑顔で切符を渡すと、飛び出すようにして駅前の自転車置き場からはみ出した自転車を避けて進む。

分かれ道の真ん中にある小さな郵便局も変わらない。この辺は私のテリトリーだ。場所からしても、ツギヒトさんではなく私の地区の方に入る。

後ろから追いかけてくるツギヒトさんが呆気に取られているような気がして、慌てて立ち止まって落ち着かなくてはと思った。

「半年来てなかっただけなのに、すみません。はしゃいでました」

「いいよ。オレも懐かしくて、はしゃぎたい気分だから」

「じゃあ、行きましょうか」

自分でそう言って、無意識に引っ張るようにツギヒトさんの袖を摑んでいた。ツギヒトさんも笑いながらそれを受け入れてくれたので、少しの間だけそのままでいてから自然を装って放す。図々しいことを、してしまった。

「駅前、少し寂しくなったね」

「そうですね。国道沿いに色々と大きなお店ができましたし、最近はみんな車がありますから」

「変わったなー.....」

ツギヒトさんの寂しげな声に、私も落ち込んでしまう。９年も離れていたのだから、寂しさも私とは比べものにはならないだろう。この辺を歩くのは、私でさえ久しぶりだった。

「あの場所、本屋さんがあったの覚えてます？」

「うん、覚えてる。この辺で本が揃ってるのって、あそこくらいだったよね。ああ、店が違うんだ」

「本屋さん、もう少し先に移動しちゃったんです。私、あの本屋さんでかなり散財してたんですよ。新しい方へはほとんど行ってないんですけど」

駅前から斜めに進んでいく道を選び、ツギヒトさんを手招きして先を歩く。本屋さんへ行く途中に商店街があり、ツギヒトさんを描いた壁があるのだ。

私が本屋へ行く理由が大抵の場合、現実逃避だった。手っ取り早く、自分を嫌なことから引き離すことができた。そんな時に出会ったのが、壁の少年だった。そんな出会いだったからこそ、大人になっても大切な存在として残っていたのだろう。

大好きな絵だけの存在。そこには、物語の主人公に恋をするような、とても恥ずかしいけれど真剣な想いがあった。いつだって生まれ変われるとしたら、物語の主人公の盾に

なりたいとそんなことばかり考えていた少女時代だ。

私の生活は平凡で、今でもそれは変わらないけれど。平凡であることが自慢だと今なら言える。だけど、物語のようなことだって充分あったのだ。

友人が仕掛けてくれたドッキリや、試合に勝って喜ぶようなことだってとても素晴らしい物語だと思う。そして何より、ツギヒトさんたちとの出会いは紛れもなく奇跡だった。

悲しい思いをするような非凡は要らない。悲劇のヒロインになろうなんて思わない。平凡でもいいから、幸せになりたい。そう願えるようになった。私のこんな平凡な話を面白がって聞いてくれる人がいるのだから、多分。

商店街へ入ると、開いている店は三割ほどだった。歩いている人もまばらで、ツギヒトさんも安心しているように見える。もう少しで、小さな路地の壁が見えるはずだ。

「もしかして、あれ、かな？」

ツギヒトさんが先に壁の存在に気づき、指を差して私に示す。先程までとは打って変わって少し脅えているような声に示された先へ視線を向けると、少し崩れかかった壁が目に入った。

ああ――まだ残っていた。思わずそんな声が漏れた。

忘れもしないその姿は、私の記憶よりもずっと鮮やかに描かれていた。

何かをすくい上げるように重ねられた掌の隣には、ＮＥＸＴと文字が書かれている。その単語の意味が、今ならば分かる。ツギヒトさんの「次」だ。

もしかしたら、色は少し塗り直してあるのだろうか。雨風に汚れたその姿をもう一度浮き上がらせるように、手が入れられているのかも知れない。消えるのを許さないという、作者の思いが伝わってくるような気がした。

最初から、この絵はツギヒトさんへの思いが込められていると知っていた。知っていたのに。ツギヒトさんを知ってからこの絵を見ると、何故か涙が溢れた。

こんなにも大切に思われている。待っている人がいる。私の小さな想いなど、この絵の前には負けてしまう。だけど、何処かで独り占めしたいという想いがあって、それがとても恥ずかしいことのように思えた。

私は、完敗だ。この絵に出会った時から、それは決まっていたことのようだった。

「花ちゃん？」

「.....この絵、綺麗になってるんです。前よりも。ツギヒトさん、すごくすごく大切に思われてるんですねえ」

感動と切なさとが込み上げてきて、涙が止まらなかった。私が待つ側だったとしたら、そう考えると胸が苦しくて耐え切れない。

いなくならないで、なんて言えない。知らないところで傷ついて、消えてしまった人に。言いたくてももう、そこにその人はいないのだから。会いたいけれど、会えない。どうしたらこの悲しみを、我慢することができるのだろう。できるはずもない。

会えないから、自ら姿を消した人に会いにいけないから、だからこの絵はここにあるのだろうか。会いたい気持ちはここに、押し殺されているのだろうか。

「会えない、なんて、悲しい、です.....会いたいって思い、ます。会いたいって.....」

「うん、そうだね、そうだったんだね。今なら、分かるよ。分かるから.....泣かないで、花ちゃん」

ツギヒトさんと数ヶ月だったけれど、今のツギヒトさんと毎日のように過ごして、一緒に遊びに出かけたりして、そんなことがとても特別だったのだと気づく。こんな幸せいっぱいの私が、同調して同情して泣いたところで何の解決にもならないのに。

会いたい時に、会いたい。できる限り、会いたい。会いたいと、言いたい。

何も返してくれなくていいから。何も返せなくなるのは嫌だから。そんなこと結局、どうでもいいから。自分勝手だけれど、放せない。きっと、私自身が色んな意味で逃げてばかりいたから、初めて何よりも必要なものを見つけたのだと確信した。

帰ってしまったって、私が会いに来る。うざいくらいに。そう誓ったばかりだ。

「オレも、さ。花ちゃんの仕事が決まったって聞いた時、よかったねって言いながら反面寂しかったんだよ。毎日一緒にいたからさ。仕事が始まれば簡単には会えなくなる。そんなことオレが言える立場じゃないんだけど、思ったんだよ」

だからね、と微笑みながらツギヒトさんの手が優しく私の頭の上にのる。小さな子をあやすように頭を撫でられて、また涙が流れた。

「花ちゃんが、うざいくらいに会うって宣言した時さ、すごいって思った。これだって思ったんだ」

どうしてだろう。私も今、そのことを考えていた。店長さんとアキさんが私たち二人を似ていると断じるのは、こういうところからなのだろうか。

「オレが会いたいから。オレも会いにいくよ」

大好きな人が、会いたいと言ってくれる。そのことがとても、幸せだと思った。

今までも言ってくれた人がいたのかも知れないけれど、私は気づかなかった。こんなにも幸せなことなのだということも、知らなかった。

「もう一度訊くけど……覚悟はいい？」

「会いたいです……私も、会いたい」

本当は毎日でも。だけど今は、それは言わない。

壁の絵を皮切りに、二人で思い出の故郷を歩いて回った。

そうしている内に、同じところに住んでいても年齢が違えば見方も違うのだと知った。

二人とも中学までは地元の学校へ行っていたので、同じ学校の同窓生だ。それでも、先生の話も運動会の話も微妙にずれてしまうのは、五つの年の差が生んだものだろう。

もちろん、重なる部分もあったので、その話では大いに盛り上がった。とても怖い体育教師がいたことや、香水の匂いがひどかった社会科教師の話などだ。

まったく男っ気のなかった私にとって、男の人と一緒にこの町を歩いていることが不自然だと感じることもあった。昼食をとろうと入ったお店では、昔の自分が直ぐ隣で羨ましそうに見ているような気がする。

まして、それが、あの絵のツギヒトさんなのだから喜びも一層だ。

「ちょっと、歩き疲れたね」

「そうですね。流石に疲れました」

朝から夕方近くになるまで食事をした以外はほとんど歩きづめだったため、足の裏にマメができていそうな感覚がある。疲れているけれど、できるだけ長くツギヒトさんと一緒にいるためなので努力は惜しまないつもりだった。ツギヒトさんが帰ろう、と言うまでは。

「もう……４時か。そろそろ帰ろうか」

「はい」

返事をして立ち上がった瞬間、ふと視線を感じて顔を上げる。誰かがいた気配はあったのだけれど、周りを見回しても誰もいない。

私のことを覚えている人は少ないだろう。だとすれば、今の気配はツギヒトさんを見ていたものだったのだろう。ツギヒトさんに告げるべきかと悩み、私よりもそういうことに鋭そうな人に敢えて進言する必要もないだろうと考えた。

ツギヒトさんに気づいていて、それでも声をかけられずにいるとしたら。それは、ツギヒトさんが自分から帰ってくるのを待っているからなのだろう。そんな双方の思いを気軽に邪魔してはいけないと思う。

切符を買おうとしてまた、ツギヒトさんに止められた。返そうと思っていたのに、と口を尖らせてみるけれどやんわり断られた。

渡された切符を片手に駅構内へ入っていく。

小さな踏切を渡ってベンチへと進むと、駅裏側の田んぼが目に入った。あの家も、あの家もかつての友人の家だ。まだしっかりと場所も覚えている。

私は捨ててしまったけれど、ツギヒトさんは置いてきただけだ。だから、まだ復活させることが幾らでもできる。そのことが自分のことのように嬉しかった。

傍らを見ると、ツギヒトさんがベンチには座らずに立ち尽くしている。私が見ていた方向とは逆を向いていたので、振り返って駅の出入り口に目を遣った。

駅の建物の横には駐車場があって、その先には駐輪場がある。いつも私が大学へ出かけていく時、お母さんはその駐車場に立って私を見送っていてくれた。数ヶ月の別れだというのに、私はいつも寂しくて泣いていた。

その場所に二人、私の両親よりも少し年配の男女が立っていたことに、やっと私は気がついた。

ツギヒトさんは何も言わない。

私も何を言うつもりもなかった。

こんな日のために、あの絵は描かれたのだと思った。多くの人が目にするあの絵を知っている人は多いだろう。ツギヒトさんがこの町を訪れれば、誰かが気づく。そしてそれは、伝えられるのだ。伝えられるべき人たちに。

直ぐ近くの踏み切りの音が聞こえ、続くように駅構内の踏切が鳴りはじめた。

私はツギヒトさんから少しだけ離れ、気づかれるか気づかれないかの小さな会釈をする。電車でその人たちが隠れてしまう前に、応えるような礼が返ってくるのが見えた。ツギヒトさんがそのことに気づいて、私をじっと見た。余計なことをしただろうかと思いながらも、私は見返して微笑む。

電車に乗り込むと、ツギヒトさんは外の二人がよく見える窓際へと寄った。私はそれに従わずに、逆側の窓の席へと腰を下ろす。

ツギヒトさんの背中だけを見ていた。その表情は、こちらからは見えなかった。

ただ、僅かに頭を下げたことだけは分かった。

動き出す電車の中、ツギヒトさんはじっとその場に立っていた。次の駅に着くまでの間、ずっと動かずにそこにいた。

しばらくして、ツギヒトさんは静かに私の隣に座った。

「ツギヒトさん。私が先を行きますね」

「え？」

唐突に何を言い出すのかと思ったのだろう。怪訝な顔をしたツギヒトさんが私の顔を見た。

「私が先に行きますから。追っかけてきてくださいね」

弱虫二人が逃げ出して、スマイルに匿われて。その中で外へ出て行く力を蓄えて。やっと私たちは出て行けるだけの勇気を得た。得た、はずだ。

決めたのはツギヒトさんが先だけれど、出て行くのは私の方が先だ。私が先を歩いて、少しでもその道を知り、ツギヒトさんの力になれたなら。幸せだ。道を切り開くために、先を行くのも悪くないと思う。

言葉にはしなかったけれど、ツギヒトさんには伝わったようだ。こんな時は似ていてよかった、なんて少しだけ思う。似ていない部分の方がとても多いとも思いながら。

ツギヒトさんは泣けるほど優しく微笑んで、言った。

「直ぐに追いつくから。待ってなくていいよ」

待ってる余裕なんかありませんよ、と私は冗談っぽく返すので精一杯だった。

明日から、ツギヒトさんのいない世界が始まる。そのことに改めて、向き合わなければならない時が来たのだと分かった。

駅から出ると、もう随分暗くなっている。ツギヒトさんと並んで歩きながら、私は上手に今日の別れを告げる方法はないかと考えていた。

失敗したら、また泣いてしまう。先日、スマイルで大泣きしたばかりだ。スマートに別れたいと思っている内に、また涙が滲んでくるのを感じた。

そうだ。突然走って逃げてしまおう。メールで後のフォローをすれば、何とかなる。驚きはするだろうけど、ツギヒトさんは私のこういう弱いところは分かってくれている。

だけど、次に会う時に気まずいかも知れない——もしかしたらもう二度と会うことはないかも知れないけれど——そんな想像が浮かんで、また涙が出た。

さり気なく、さり気なく走り去ろう。捨て台詞のような挨拶を残せば、問題ないはずだ。

「あの、ツギヒトさん！ この辺で大丈夫です！ それじゃあ、また！ 今日はありがとうございました！」

これだけ言えれば、自分の中では合格だ。ツギヒトさんが何かを言おうとした瞬間に、小走りで走り出す。

「花ちゃん！」

必死に走りながら、背中から聞こえる声に慌てた。走って逃げるとまでは考えていたけれど、追いかけられるという想定はしていなかった。

泣かないように、泣かないように。そう考えれば考えるほど、涙が溢れるのを止められなかった。今、顔を見られたりしたら「死んじゃう」。

「花ちゃん！ 待って！」

直ぐ近くで、声が聞こえた。そして、手を掴まれる。

「直ぐに追いつくとは言ったけど.....逃げるのはなしだよ」

荒い息をつきながら、ツギヒトさんは私を見て笑った。また涙が零れて、「死んじゃう」と私は呟く。死なないで、と軽い返事が返ってきた。

「泣いてばっかりで、やなんですー」

「泣いてもいいから。オレは平気だから」

「泣き虫は嫌われちゃうんですー」

間延びした返事しか返せない私に、ツギヒトさんは丁寧に話しかけてくれる。いつしか子供の言い訳めいたことが口から出ていて、ツギヒトさんが小さく笑った。

「嫌わないから。花ちゃん、オレにも言い訳させてよ」

「.....言い訳？」

「そう。次に会う約束、遠回しにさせて」

店長のように上手くはできないけど、と言いながらツギヒトさんはポケットの中に手を入れる。ごそごそと探した後に出てきたものは、小さな鍵だった。

自転車の鍵、のようだった。

「これ、オレがスマイルに置いてる自転車の鍵なんだ」

その小さな鍵が、捕まっていた私の掌に載せられる。

「向こうに戻ってしばらくしたら、帰ってこようと思ってる。こっちで仕事を探すつもりだから.....それまで、預かっててもらえないかな？」

その頃、もう私に会いたくなくなっていたら？ そうも思ったけれど、「後悔しても知らない」と開き直る気持ちが湧いた。

鍵を隠すように握り締める。すると、ほっとした雰囲気がツギヒトさんから流れた。

お互いにそろそろ、信用していいのかも知れない。まだ腹の探り合いのような、遠回しなことばかりしか言えないけれど、いつかは腹を割って話せる日がこの人となら来るかも知れない。そう思った。

「喜んで」

気がつくと、涙は止まっていた。

会えなくなることは寂しくて切ないけれど、この鍵がある限り約束は有効だ。ツギヒトさんも寂しいと言ってくれた。お互い寂しいのだから、きっとまた直ぐに会える。

「花ちゃん、頑張ってね」

「はい。ツギヒトさんも」

「またね」

「はい。お元気で」

今度はツギヒトさんが走り出した。私は大きく手を振って、ツギヒトさんを見送る。

家に着いてしばらくしてから、ツギヒトさんにお疲れさまでしたメールを書いた。送るのと同時に携帯が鳴り、確認するとツギヒトさんからのお疲れメールが届いていた。

声を上げて笑ってから、画面をじっと見つめる。やっぱり、似たもの同士だ。

そして顔を上げると、カレンダーが見えた。

今日は、大安だ。

明日から新しい私が始まる。それは楽しみなようで、とても怖い。

だけど、自分が逃げ続けていられるわけがないとよく知っているから。だから、一歩を踏み出すのだと思う。

分からなければ訊けばいい。間違えたら謝ればいい。そうならないように精一杯努力すればいい。それが分かっていれば大丈夫。

そう、自分に言い聞かせた。

明日の今頃、私はどんなことを思っているのだろう。明日の今頃、今の私を優しく笑って応援できるだろうか。大丈夫だったよと、今日の私に言えるだろうか。

言えるといいな、と思う。

何でもできる人間じゃないから、不安なのは当たり前。人よりも遅れてしまったのだから、必死にならなければならないのも当たり前。

色々想像して、勝手に不安になるけれど。上手くやれないことばかりを考えるけれど。何か一つくらいはできるだろう。

一つずつ。基本だけど、大事なことだ。

早く追いつけたらいいな。みんなと同じ場所で頑張れたらいいな。

それは、辛いことの始まりでもあるけれど、きっと、自分を許しはじめることでもある。

苦しんだこの数ヶ月が、私を支えてくれる。

あれ以上に惨めで、自分を情けなく思うことなんてないと思うから。

頑張れ。今はただ、泣かずに。

「そろそろ行きます」

そうか、と店長が頷いた。オレは大きなリュックを背負って、店のドアに手をかける。アキさんの姿はなかった。

「静かになりましたね、この店」

これからもっと静かになるな、と笑いを含んだ声が返ってきた。アキさんと店長は照れているのか二人だとあまり話さない。花ちゃんがいた頃はあんなにも賑やかだった店が、以前の落ち着きを取り戻しているようにも見えた。

「オレ、いつも待ってたんだと思います。花ちゃんのことを。花ちゃんが来てくれていたから、気づかなかっただけで。毎日そこにいることがすごいことだったんだと、今更ながら気づきました.....店長。店長のおかげです。ありがとうございました」

店長は笑った。ちょっと子供のような笑い方で。

「オレは、時間を無駄にしたとは絶対に思いません。花ちゃんは自分のことを駄目人間だって言ってましたけど、駄目人間だって生きてる。可能性は山のようにあると思って

います。オレは自由な時間の中でもがいて、それがこれからのオレに必要なものだって分かりました。逃げた時間の分だけ、オレは人より多く生きないとと思います。自慢できることじゃないけど、脅えていたくない。ずっと必死にやってきた人には頭は上がらないけど、オレも必死になりたいと伝えたいんです」

「お前たちは不器用なだけだよ。ちょっと出だしで躓いただけさ。ずっと必死だったのを俺は知ってる。だから、胸を張って世の中に出て行けばいい。お前たちはここに残ったわけじゃない。これから出て行くんだ。だったらいいじゃないか。社会の中に行くのも、自分が選んだ道なら。自分が満足できるなら、何処へでも行けばいい。何が負けとか、そんなこと言ってる奴は放っとけ。どっちを選んだってどっちにつくかってことが問題なだけで負けなんだ。だったら、どっちを選んだって勝ちってことだろ？ 負け犬の遠吠え、上等だ。行くって決めたんなら、自信持って行けよ。花ちゃんが先を走ってるんだ。お前を励まそうと先に行って危険はないか探してる。お前は花ちゃんの作ってくれた道を走ってるんだ。大丈夫だな？」

一緒に行った神社。そこで君は思い出したように戻って、何かを祈っていた。後で何を祈っていたのかと尋ねたら、君は満面の笑みで答えた。

――ツギヒトさんが幸せになりますようにって、祈ってました。

君の言葉はいつも少しズレてた。でも、人のことを考えてばかりの君がちょっと羨ましかった。君はいつもいっぱいいっぱいのはずだったのに、何処からそんな余裕が湧いてくるんだろうといつも疑問に思っていた。

こうして、君の祈りに対する応えがオレに届いたから、オレが今度は君のことを祈ろうと思う。そう、でも。少し余裕ができるまで待ってほしいかな。

何処かにぶつかった祈りが、何処かへまたぶつかって。それでも祈りはいつだって巡っているから。ドミノのように、隣へ隣へと繋がっていくんだろう。

それは綺麗な丸い円で。沢山の人が線のように並んで、誰かの背中にぶつかりながら進んでいく。時には頭を打ってしまうかも知れないけど、振り返った人が笑って許してくれたなら、ぶつかったことすら「幸せ」になる。

甘ったれな君とオレ。馬鹿みたいに優しさの輪を見てる。

今、オレは君の後ろにいて。君が立ち止まった時は、その背をそっと押すと決めてる。

きっと君はそれをしっかりキャッチして、次の人に体当たりしていけるだろうから。君の頑張ってる姿がそのまま声になる。

――頑張れ。

オレも痛いけど、君も痛い。

だからオレも頑張るし、その声が君に届けばいいと思う。いつだってそんな風に、オレたちは巡りめぐって応援しあうんだ。

「はい。オレ、強くなります。花ちゃんは駄目人間じゃないってちゃんと教えてあげられるように。その一生懸命さがとても好きだって、次に会えたら言いたい」

今、オレを呼ぶ声はここにはいない。

許してと叫んでいた人間を、何も考えずに許した人がいる。何もかもを許し、拾い、笑ってくれた女の子が。そんな君に、会えてよかった。

好かれてる自信なんてこれっぽっちもないんです、と言った女の子に。

「店長。今まで、お世話になりました」

ドアをゆっくり押すと、そこにはアキさんがいた。憮然とした顔で、オレが出て行くのを待っていてくれたようだった。

「アキさんも、お世話になりました」

「世話した覚えはねえよ……元気でな」

「はい。自転車、預かっててくださいね。鍵は花ちゃんが持ってますから」

「分かってる」

軽く背中を押すような重さで、アキさんの手がオレの肩を叩いた。

「ハナコが泣くから――ツギ、帰ってこいよ」

「オレも、常連になりますから」

「「またな」」

店長とアキさんが声を揃えて言う。アキさんがスマイルの中へ入っていく姿を目で追いかけ、頷いてからオレは店の扉を閉めた。感謝の気持ちを込めて、静かに閉めた。

先日、男三人の携帯電話に彼女からのメールが同時に届いた。

そこには、仕事がとても忙しくて体力勝負だと書いてあった。それでも、働くことは楽しいと笑顔の絵文字も入っていて、ほっとした表情が三つ揃ったものだった。

大丈夫だから、追いついておいで――そう言われているような気がして、オレは噛み締めるように何度もそのメールを読んだ。オレはこれからが、スタートだ。

だけどいつか。君に追いついて笑いたい。その時、君が泣いていたなら、泣き止むまで傍にいる。いてくれるだけでよかった君の、自由になれる場所が、オレの自由であれる場所であるように。

そう、だから今は。とりあえず。

次へ。

エピローグ

エピローグ

久しぶりに訪れた店は、あの日から何一つ変わっていないように見えた。

そう店長に告げると、「変えないようにしてるのさ」と返事が返ってきた。アキさんが隣で笑いながら、「親父も思い出に浸りたい年齢だからな」と冗談混じりに言う。

かつてここにあった笑い声がふと思い出されて、四人が笑い合っている姿さえ見えた気がした。高校生たちが彼女に声をかけて、彼女がそれに答えて小走りになる。

ここを離れてから、およそ半年が経った。高校生たちも学年が上がる頃だろう。何年生かを訊いたことがなかったので、もしかしたら大学生になるのかも知れない。

彼女からは、定期的にメールを貰っていた。そして、必ず返事はその日の内に出すようにしていた。

仕事にも慣れてきたこと。色々なことを任されるようになったこと。アルバイトの仕事の範疇を超えていた為、契約社員に格上げされたこと。

意外にも事務仕事は向いているようです、と書かれたメールを見て自分まで嬉しくなった。

９年間、アルバイトだけで過ごしていた自分もついに就職活動の波に乗った。女の子と男とではその波は違うのだろうが、苦労したのは言うまでもない。

彼女が履歴書だけで落とされてしまうと泣きそうな顔で言っていたのが、今の現実なのだと知り、彼女の苦しみを少しだけ理解できたように思った。

それでも、就職先を見つけることはできた。４月から、遅れに遅れた世界が始まる。

故郷へ帰ってからのことは、逐一メールで三人には報告していた。自然に受け入れられ、そして自然に出てくることができた。それもこれも、彼女があの日一緒に故郷へ帰ってくれたからだ。

色々と回っている間に、何人かの知り合いに見つかっていたことが後になって発覚した。その中に彼女を知っている人もいたらしい。彼女は自分のことを覚えている人などいないといつも言っていたが、それが彼女の思い込みであることが証明できた。

そして何よりも、駅まで出てきてくれていた両親に彼女が頭を下げたあの時。両親は何かを悟ったと言う。聞かなくてもその内容は分かったので、敢えて聞くことはなかった。

壁の絵は、本人の帰還とともに取り壊されることになった。彼女は勿体ないと嘆いていたが、自分としては残される方が恥ずかしかった。取り壊される数日前に写真に収めておいたのは、彼女への感謝を込めて自分にできる精一杯だった。

欠片も一つだけ貰った。彼女が欲しいとメールに書いてきていたので、指先だけが見える欠片を拾ってハンカチに包んだままにしてある。

「あ、お客なんだから何か、頼まないと変ですね」

ぼんやりと懐かしい思いで突っ立っていたことに気づき、カウンターの席につこうとするとアキさんと店長が見合わせて笑った。

「お前、タイミングが悪いんだよ。さっきまで、ハナコ来てたぞ」

「今から追いかければ間に合うだろ。それからまた来い」

そう言われて思わず、座ろうとしていた体が反射的にドアの方へと向かった。後ろから懐かしい笑い声が二つ重なって追いかけてきたが、照れるのも忘れて飛び出す。

カラン、カラン、カラン。

あまりに勢いよく出てしまった為、ドアベルが激しい音を鳴り響かせていた。他の客に迷惑をかけてしまったと頭の端で思う。

――ツギヒトさん、お元気ですか？

いつも、その一言から始まるメールの文面に自然と笑みが零れた。

就職が決まったことも、愛知へ帰ってくることも、全て伝えてある。アキさんからは、最近彼女がスマイルに来る回数が増えたと連絡があった。店長からも、いつ帰ってくるのかを教えてやれと言われていた。

伝えられなかったのは、どうしてだろうか。会いたいから会いにくると、自分が言ったにもかかわらず。

「花ちゃん！」

かつて見慣れていた後姿を見つけ、呼びかける。以前と同じ道を通って帰ってくれていてよかったと、どうでもいいことを思った。

いつかのようにびくっと驚いた風で、彼女がゆっくりと振り返る。

その表情は、何よりも早く見たいと願っていた――笑顔だった。

「ツギヒトさん！」

嬉しそうに名前を呼んでくれて、こちらに向かって走ってくる。いつも彼女は歩くことなく、走ってくる。その懸命さが心地よかった。

「おかえりなさい！」

「ただいま」

彼女がオレに笑いかけた。それだけで胸が温かくなった。

ＥＮＤ

ループ

著　　佐倉 れいる

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社